

---

# 新しき世界へ～日本の受難

亡霊

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

新しき世界へー日本の受難

### 【Nコード】

N4520L

### 【作者名】

亡霊

### 【あらすじ】

日本がその国土と共に未知なる世界へと転移した。そんな状況下でも日本は諦めずに存続の道を模索する。しかし、その日本の転移によって世界は大きく変貌を始めた……。

100・000PV達成！10000ユニークも達成！  
皆様の閲覧に感謝です！

## 混乱（前書き）

駄文ではありますが多少なりともお付き合いしていただければ幸いです。

## 混乱

西暦201X年5月初頭

日本は酷く混乱していた。

その混乱は唐突に起きたある事件故にだ。

しかし、多くの人々に取ってそれは突然でも、予兆は以前からあった。

ただ、誰もそれに気付かなかった。

そのために唐突に思われたのだ。

「食料は現状で1年程度は持つと思われます」

補佐官の言葉に日本国内閣総理大臣、鈴木友平はただ黙ってうなずいた。  
すすきともひら

鈴木は歯噛みしていた。

（気付くのが遅すぎた。もっと早くにわかっていたら・・・）

鈴木は現在、日本に起きている事態が何であるかを把握していた。

原因は分からなくても日本が現在どの様な状況にあるかはわかっていたのだ。

それは、以前からあった変化の予兆に人々よりも早くに知ったからだ。

そのため、災害時における緊急物資の確保と言う名目で様々な準備をしてきていた。

しかし、それも僅か3ヶ月程度ではたかが知れている。

それでもやらないよりマシではあるから、鈴木は敢えて汚名を被る事を覚悟の上で強硬に行動してきた。

「総理、石油資源は残念ながら1年も持ちません。早急にどうにか

確保しなければ・・・」

経済産業大臣である阿部忠勝はそう言っあべただかつて額ににじんだ汗をふき取った。

阿部の言葉に内閣官房長官の伊達正行だてまさゆきが怒鳴り声を上げた。

「確保？あるかどうかも分からんのにどうやって確保するんだ！？」

伊達はやや気性が荒く、過激な発言を繰り返してきたことからタカ派の筆頭になっている。

そんな伊達に怒鳴られて気弱な阿部はうつむきながら汗を拭いてなんとかやり過ごそうとするしかなかった。

「伊達、怒鳴らなくても聞こえる。落ち着きたまえ」

鈴木がそう言って伊達の矛先を自分に向けさせた。

そして鈴木 of 思惑通り伊達はその矛先を鈴木に向けてきた。

「落ち着けるか！国内の混乱は自衛隊や警察による治安維持活動で一時的に抑えてはいるが、それだっていつまでもたんぞ！」

伊達の言葉通り、日本全国どこの都市でも街角に自衛隊や警察が立っていた。

首都である東京は更に87式偵察警戒車や96式装輪装甲車が各所に配置されていた。

このため、一時は警察庁が縄張り意識の為か鈴木に直談判し「治安は警察の手で守れる」と豪語した。

しかし、異変が起きてから3日目にしてその言葉は崩れた。

一部外国人が中心に暴徒と化した群集により各都市で暴動が頻発したのだ。

そのため、鈴木は事態の沈静化を名目に陸上自衛隊に出動を命じ、これを実力で鎮圧したのだ。

これにより野党やマスコミから大きく非難されたが、鈴木は先に出していた緊急事態宣言による超法規的活動として無視した。

結果として、日本に起きた異変から1週間経つが連日非難キャンペーンが行われていた。

「焦っても事態が好転するわけではない。ここは周辺の調査に出て

いる海自や空自の報告を待つしかないだろう」

鈴木にそういわれ、やり場の無い怒りを押さえ込んだ伊達は無然とした表情のまま椅子に腰掛けた。

「しかし・・・」

鈴木の呟きに室内の全員が鈴木を見ていた。

「まさか日本そのものが転移などとは・・・」  
その呟きは誰もが思っていたことであつた。

そう、日本は見知らぬ世界へと転移したのだ。

## 混乱2

日本が見知らぬ世界へ転移した原因は分かっていない。  
しかし、以前から僅かばかりではあったが予兆は存在していた。

例えば衛星からの画像で日本だけが写らなかったり、日本全土で体感可能な群発地震が発生したり、一時的に日本国外への一部地域で通信が不能になったり、と・・・。

それらの不可解な事態に関連性は認められなかったが、とある学者が磁場の著しい乱れを観測し、それが日本の転移に繋がると唱えたのだ。

しかし、世間一般から見ればそんなのは狂人の戯言に過ぎない。  
当然の事ながら誰も信じなかった上に、その学者は虚言を理由に学会から追い出されてしまった。

だが、学者はそれでも自説を曲げず、遺書として幾つかの予言を残し命を自ら絶った。

その遺書は総理官邸あてに送っていたのだが、当然ながら総理の手が届く事は無かったはずであった。

米国では大統領あての手紙はどんなものであれ、実害が無ければそのまま届くが、日本ではそうは行かない。

内容次第ではあるが、大抵はゴミ箱行きだ。

しかし、この遺書もゴミ箱行きだったのだが、どう言う手違いか鈴木の手が届いたのだ。

鈴木も初めは与太話程度にしか思わなかったが、突拍子もない内容だったのが気分転換に読んでみた。

その後、読み終わった遺書は机の肥やしにされたが、ある日起きた通信障害が鈴木を意識を再度、この遺書に向けさせる事になる。

それは平日の真つ昼間に起きた。

- - - 12時21分

その時刻を持つて日本全国で一斉に通信障害が発生したのだ。

それも有線、無線問わずにだ。

しかもその障害は15分間続き、後の試算で数百億もの経済的損失を発生させた。

全国で混乱が起き、鈴木も出先から総理官邸に急遽戻る羽目になった。

しかし、短時間の出来事だったため、最終的に通信は回復し、以後目立った動きはなかった。

そのため鈴木は総理官邸に戻ってから原因の調査と損失の調査を指示し、再び予定に戻ろうとした。

だが、鈴木は言い知れぬ不安に襲われていた。



### 混乱3

そして、鈴木不安は的中することになる。

遺書に書かれていた事柄が、多少の誤差はあれども的中していったからだ。

残念ながら、転移の時期は書かれてなかったものの、ほぼ的中している予言とも取れる物に鈴木は恐怖を覚えた。

しかし、この予言が必ずしも当たる訳ではないと己に言い聞かせつつも、万が一に備えて物資の備蓄を考え出した。

勿論最初は閣僚にも反対された。

しかし、転移する可能性があると思った鈴木は、自らが所属する党や派閥を無視し、独裁者の様に振る舞い強行していった。

結果、転移まで3ヶ月しか無かったものの、多少なりとも備蓄はできていた。

これが平時のままであつたなら、半年持てばよい方だろう。

しかし鈴木はやった。

精々半年の寿命を一年程度まで引き上げたとも言える。

その為に独裁者と言う汚名を被る羽目にはなつたが、これで日本に僅かでも未来を残せたと思えば本望だつた。

とは言え、転移した今となつてはまだそこでは終われない。

夏に総選挙を控えている以上は、それまでに日本が現在の苦境から這い出す下地造りを終わらせねばならない。

故に鈴木は海、空自による周辺調査に望みを託していた。

その結果如何によつては日本は存続どこか滅亡の危機にあつたのだから……。

「調査開始から幾日か経つが、今のところ何ら目立つた報告は来っていないぞ?」

腕を組ながら慚然とした表情の伊達ではあったが、伊達自身も何かしら良い報告が来ることを願っていた。

タカ派だ何だと言われようと、伊達もまた日本の未来を憂いる鈴木の無二の友人でもあるからだ。

だが、伊達の言う通り、このままではじり貧いばりやうと言えた。限りある資源を無為に使っているからだ。

「・・・搜索範囲を国境の外に向けるしかありません」  
立ち上がりながらそう言ったのは防衛大臣である伊庭亮治いはりやうぢだった。

## 混乱4

伊庭の提案にしばし場が静まり返る。

現状、調査は日本の国境内に限っており、外には向けていない。

国境近辺から遠方観測するに止めていたのだ。

今のところそれだけで朝鮮半島や北方領土、並びに尖閣諸島が確認されないため、別の世界であるのは分かっていたが、万が一にもまだ見ぬ別の国と争いになるのを防ぐ為だった。

何よりもこの世界の文明レベルが解らないのだ。

領空侵犯などして問題を作るわけには行かないのだ。

こればかりは戦後の日本に慢性的に存在する事無かれ主義が未だにあると言う証明だろう。

「しかし、それは・・・」

外務大臣の橋波秀昭が口を濁す。  
はしばひであき

この世界の国家と問題になった場合、真っ先に彼の元に来る。

橋波はそんな面倒事はごめんだった。

「ですが、現状海しか観測されない以上は敢えてやらねばなりません。まさか引きこもって日干しになれとでも言いますか？」

伊庭はまだ若い（それでも40代半ば）せいか、やや挑発とも取りかねない言動をする。

橋波はそんな伊庭に反論した。

そう言う意味では橋波もまだ政治家として若いのだろう。

「もし何かあったらどうする？誰が責任をとるんだね？」

鈴木は橋波のそう言う物言いがあまり好きになれない。

その為、思わず鈴木が橋波に食いついてしまった。

「責任云々の問題ではあるまい。この日本が飢えるかどうかの問題だぞ」

流石に橋波も鈴木にそう言われては言葉を飲み込むしかない。

確かに今のままでは国全体が飢餓に見舞われるのだ。

「はつきり言って3ヶ月以内に何かしらの食料や燃料の供給元を確保しなければなりません」

そう告げる阿部の表情は暗い。

「食料は備蓄に続いて自給率向上名目で事前に行った事業である程度の供給は可能です。ですが石油などのエネルギーは・・・」

彼の表情の暗さは、事前から石油の備蓄や太陽光発電をはじめとした各種エネルギー確保事業が、軌道に乗るところか前段階で転移してしまつた事による。

「いや、構わん。どのみち3ヶ月程度で出来る事ではなかつた」

慰める訳では無いが鈴木はそう言つて阿部の苦労を気遣つた。

「そうは言つが石油資源だけでなく、各産業に欠かせない各種資源不足の問題もある」

伊達の言葉は日本の将来に暗雲が立ち込めているのを表していた。

「はつきり言つて、発表を前倒しするのは難しいんじゃないか？」

友人たる伊達の心配は分かつていたが、鈴木はここら辺りが引き延ばす限界だと思つていた。

「いや、国民はそろそろ現実を知りたいだろう。これ以上の情報統制も難しくなる。ならば・・・」

正直、鈴木に取つても一つの賭けだった。

食料、燃料は配給性にしなければならぬ上、先が見えないストレスに国民がいつまでも耐えられるとは思えない。

何よりも事実を知らない野党やマスコミ、国民が鈴木を政権から下ろしたがつている。

今の状況で悠長に解散総選挙などやってなどいられない。

そんな事をすれば自滅するだけだ。

「ならば国民に真実を告げ、ある程度でもいい。希望を見付けるまで俺は独裁者となる」

そう言う鈴木の目には汚名を被る悲哀と決意の光が宿っていた。

#### 混乱4（後書き）

導入はここまでになります。

初心者なので上手く伝えられてないかもしれませんが、これからもお付き合いいただけると幸いです。

## 希望を求めて（前書き）

ようやく日本が動き出しました。

さて、これからこの国に何が待ち受けているのでしょうか？

それは読んでからのお楽しみに・・・なるかどうか疑問符がつきま  
すねw

## 希望を求めて

西暦201X年5月12日

小松基地を飛び立ったP3Cが日本海上空をひたすら燃料が許す限り西へ向かって飛行していた。

先日、鈴木総理が日本全国に向けて行った日本のおかれた状況、すなわち転移の事実と日本が今、危機的状況にある現実を伝える放送は、全国に戸惑いを与えていた。  
だが、それでも思ったほどの同様はなく、何とか国民は冷静さを保っていた。

あるいは現実を直視できずに、ただ楽観的、あるいは他人事の様に感じたのかもしれない。

それは戦後の日本に蔓延った日本人の悪い癖の所為かもしれない。  
しかし、それでも国民は不便な生活になってもことさら騒ぎ立てるような真似はしなかった。

ただし一部では政府を糾弾する市民団体や野党、マスコミと言った連中が突き上げをしてきてはいた。

それでもその他多くの日本人は慌てずに助け合う形で苦境を乗り越えようとしている。

これは鈴木も予想外だったのだが、鈴木の前輩で短期間ではあったが内閣総理大臣の座に座ったことのある人物が言っていた言葉が思い出された。

「日本人の底力を疑った事など無い」

今にして思えば、私は悲観的になりすぎて日本を、国民を侮っていたのかも知れない。

鈴木はそうとさえ思っていた。

だからこそ、この日本を救う手立てを何としても見つけねばならない。

鈴木はそのため敢えて日本の領空、領海を越えての調査を決断した。

その調査の為に安西康彦あんざいやすひこ一尉を機長とするP3Cは飛行していた。

「一尉、天候が悪化してきてます」

副操縦士の花木浩太はなきこうたが気象情報を確認しながら伝えた。

安西は、これ以上は危険か？と思いつながら燃料に余裕があったためにもう少し飛ばうと思っていた。

限りある燃料を使ってここまで着たのに、何も所為かも無く帰らなかったのが本音だ。

増槽にも余裕がある。多少の天候不良など・・・。

だが、天候はいよいよ悪化してきており、これ以上は危険になってきた。

「一尉、もう無理です。一旦帰還しましょう！」

例年とは違う天候に花木は気が気ではなかった。

例年ではここまで酷い低気圧に遭遇はしない。

しかし、まるで自分達の進路をさえぎるかのように強力な低気圧が行く手を阻んでいる。

「・・・こそ、ここまでか・・・」

悔しそくに安西が呟いた瞬間、落雷による閃光が走った。

と同時に期待に衝撃が発生し、計器類がいつせいに明滅、もしくはありえない表示をだし、警報が鳴り響く。

「落雷が本機に！？」

花木が悲鳴を上げる。

後ろにいた乗員からも次々と以上を報告してきた。

「一尉！レーダーがやられました！」

「計器が使い物になりません！」



流石に墜落、はしなかったが危険な状態には変わらない。

「無線は!？」

安西の怒鳴り声に花木が辛うじて無線は生きていることを告げた。しかし、計器が正常に作動しない今の状況ではいつどうなる香などだれにも分からない。

航空機は昔と違い、計器が正常に作動してなければ極めて危険な状態になる。

これは電子制御されているための弊害ともいえだが、まさかこれほど強力で激しい落雷が直撃するなど思ってもいなかった。

「機体が・・・分解しなかっただけましかな？」

そっぴいながら悪天候の中で安西は期待を何とか保とうと必死だった。

計器が使えない今、進行方向も現在地も分からない。

こうなつては生き残った無線がたよりだ。

「こちらリサーチャー4、小松ベース！落雷により現在地を見失った！そちらのレーダーで誘導してくれ！」

安西は無線機のスイッチを入れて緊急事態を宣言した。

しかし、返答が無い。

たしかに無線は生きているのだがどうも届いていないようだった。

「小松ベース！こちらリサーチャー4！応答願う！」

再度の呼びかけにもやはり返答は無い。

誰もが最悪の事態に息を呑む。

(くそ、だめか・・・)

安西の思いもむなしく、無線機はザーと言う空電音だけが鳴り響く。諦めにも似た重いが場を支配しかけたとき、荒らしが収まりだした。

「・・・？」

と突然、視界が開けてきた。

今だ飛行を続けるP3Cの背後に巨大な積乱雲がとぐろを巻いている。

「抜けた・・・？」

呆けたような花木の言葉に我に返った安西はほっと胸をなでおろした。

と、その時、視界に海のは違う色が前方に広がっているのを見た。

「・・・陸地・・・だ・・・」

安西の呟きに花木は勿論、後ろにいた連中までもがコクピットに入ってきてその光景を見た。

陸地だ。

それも島ではなく広大な大陸だった。

そして、安西は駄目元でもう一度無線機に向かって叫ぶ。その叫びは歓喜の籠った叫びだった。

「小松ベース！こちらリサーチャー4！陸地を確認！大陸だ！現在地は・・・計器が死んでるからそちらで確認してくれ！AWACSでも護衛艦でも何でも良い！この声が聞こえるか！」

安西の歓喜の声にこたえるかのように無線から声が聞こえてきた。

「こちら海上自衛隊調査隊。貴機をレーダーで確認した。貴機の現在地は・・・」

## 希望を求めて2

大陸発見の報は即座に日本政府に伝えられ、鈴木の間るところとなつた。

そのため、鈴木は即座に閣僚を召集し閣議を開いた。

延々とした議論の結果、自衛隊を派遣し現地の状態の把握、並びに不足の事態に備える事となつた。

一部閣僚からは「他の国の領土だった場合、戦争になるのでは？」との慎重意見も出たが、続々と入る報告からどうも未開の地らしいと判断された。

そして5月15日。

先遣隊として陸上自衛隊から一個普通科中隊、施設中隊そして資源調査の為に専門家や外務省官僚が海上自衛隊のおおすみ型輸送艦をおすみとはるな型護衛艦はるなにの二隻は日本の西にある大陸へとたどり着いた。

直ちに施設中隊が簡易住居の設営、並びに万が一に備えて防衛設備を作り始める。

その間に普通科は周辺の調査と警戒に当たっていた。

その中に高橋政信<sup>たかはしまさのぶ</sup>一等陸士がいた。

「・・・見たことの無い植物だな<sup>いのこえやすし</sup>」

高橋の仲間である井上康二が声をかけてきた。

「だな。とりあえず触んなよ？毒があるかも知れんしな」

隊の前方を進む高橋の言葉に、真ん中付近にいた班長の田淵直人<sup>たぶちなおと</sup>二曹がびつくりしたように声を上げた。

「た、高橋！それは本当か！？」

思わず身を縮めた田淵の様子に高橋は落胆した。

日頃、訓練の時などは散々に威張り散らしていながら、いざと言う

ときはこの有り様・・・。

正直、いざ有事になってもこいつの下には居たくない。  
それが隊全員の思いだった。

田淵は全員の視線が自分に向かっていているのに気づくと、虚勢をはるかの様に高橋と井上に怒鳴り声を向けた。

「止まるな！さっさと進め！」

高橋は溜め息をつきながら了解、と答えるとまた歩きだした。  
それほど深い茂みでは無いが、何があるか解らないためにその歩みは遅くなる。

その様子に田淵は苛々とするが、実際高橋に任せるしかない。

「しかし、こりや道を作るのは大変だな」

井上は隣にいる高橋にそつと呟いた。

その呟きに高橋は頷きながら慎重に歩をすすめる。

そんな状態で30分程たっただろうか？

不意に視界が開けた。

「道？」

何かが歩いて出来たと思われる獣道に出くわしたのだ。

とは言え、道と言うには粗末で、ほとんど通るものがない様子な道だ。

「班長、道らしき物にぶつかりました」

高橋の報告に田淵が前に出てきた。

田淵は道の状態を眺めながら高橋と井上に道の先がどうなっているか偵察してくるように命令した。

二人は命令に従い、とりあえずやや坂になっている道を上り始めた。

### 希望を求めて3

高橋と井上は緩やかな坂道を登りながらも、道の状態をつぶさに観察していた。

「普段どころか、滅多に人は通らないみたいだな」

踏まれて露出した土がそれほど固くないことから井上はそう判断した。

その考えに同調しつつ、高橋は人がいる痕跡を探していた。

「しかし、普段使われないだけで他の国の領内の可能性があるからな。油断だけはするなよ」

慎重な姿勢を崩さない高橋に、やれやれ、と言った表情を見せる井上。

そんな二人はやがて、坂道の終わりにたどり着いた。

そこからの光景は絶景と言えた。

二人が今立っているのは左右に長く小高い丘のてっぺんだったのだ。そして目前には手前に狭い平地、そして緑に包まれた広大な森があった。

「此方高橋、こちらがわは自然で一杯のようですよ」

後ろから無線を使う井上の声が聞こえた。

だが、その井上に高橋は駆け寄ると身を伏せさせた。

「井上、あれは何だと思う？」

緊張感を漂わせる高橋の様子に怪訝な表情で井上は高橋の指差す方向を見る。

相当先ではあるが黒い幾筋もの線が見える。

「煙？山火事か？」

暢気な井上に高橋は告げる。

「山火事ならもつと盛大に煙が出るだろう。あれは何かもつと別なのが燃えてるんだ」

高橋の言葉に井上が息を飲む。

それは、人口物が燃えた時に発生する黒煙だった。

辺りは炎に包まれていた。

まるで舐める様に村の家々を焼いていく炎から人々は必死に逃げ出していた。

その村人が逃げ出し、無人となりながら焼け落ちる村を武装した一団が眺めていた。

「アンストーン卿、異教徒共は大半が村から逃げ出したようです」  
豪華な甲冑に身を包んだ男が鷹揚に頷く。

村から上がる火の手が鎧に映りさながら炎を身にまとっているかのようだった。

男はジャン・ヴィ・アンストーン。

ここより南にあるホードラー王国に仕える騎士だ。

「奴等は何処へ向かった？」

アンストンの問いに部下が北へ、と答える。

それを聞いてアンストーンは口元を歪めせると率いてきた部隊を振り返る。

「諸君、聞いての通りだ。暫しの休憩の後、我らは追撃に入る」

アンストンの呼びかけに兵が歓声を挙げる。

それを満足そうに見るアンストンの目は重大な使命を遂行せんとする己に酔ったものの特有の物だった。

彼はホードラーのみならず周辺に布教されているファマティー教の熱心な信者でもあった。

故に今回の遠征を進言し、自らが積極的に取り仕切ってきた。

なによりもこの遠征によりホードラーの領域は広がり、そして新たに編入することになるであろうこのあたりの土地を自分が支配することになる。

地方領主として領土が広がるのは懐に入ってくる収入の増大に繋がる。

彼はそれによりファマティー教に更なる寄進を行い、正式な司祭の位を得たかったのだ。

「我らの領外とは言え異教徒共が近くににいるのは好ましくないからな」

そう独り言を呟きながらも自然と笑みが浮かんでくる。

しかし、このときの異教徒狩りがとんでもない事態へと発展することとを彼は、いや、誰であつても予想だにできなかった。

「結構火の手がありそうだな」

高橋の報告を聞いた田淵は双眼鏡を覗きながら言った。

火そのものは見えないが、煙の量とその状態から油を多量に含んだ黒鉛であるのが分かる。

「単なる火事・・・ではありませんね」

田淵に高橋が継げる。

高橋からすれば可能性の一つをいっただけなのだが、田淵にはそれが不快だった。

田淵自身、高橋は優秀な自衛官だと分かっている。

しかし、上官よりも優秀な部下、と言う構図は田淵に取って面白いものではなかった。

その所為か田淵は事あるごとに高橋を雑用などに良く使った。

一種のウサ晴らしである。

もつとも、そんな姑息な性根はとくに露呈しているのだが、田淵はそれに気付けるようなものではない。

結果、周りから見れば道化である。

それでも高橋は一応上官として田淵を立ててはいた。

「どちらにせよ後方からは現位置に待機ときている。何も出来んよ」  
あつさりとしたものの言いに高橋は何もなければ良いが、とだけ思った。

そんな高橋たち12名の伏せている丘に向かって移動する一団があ

った。

アンストンに異教徒として村を焼かれ、そこから逃げ出した村人たちだった。

彼等はホードラー王国内で異教徒の烙印を押されて国を負われた者たちの末裔だった。

そして迫害を受けながらも森を切り開き、家を建て、畑を作り生活してきた。

しかし、そんな彼らをあざ笑うかの様にホードラー王国は何度も彼らを追い散らした。

村がようやく形になって、開拓が進みだすと同時に彼等ホードラー王国は兵を差し向け、その度に彼等は村を捨て落ち延びていく・・・。

そうやってホードラー王国は領域を広げ、迫害されてきた村人達は未開の地に移り住んで再び生活を取り戻そうとする。

ある種のいたちごっこだ。

ただし、今回ばかりは何時ものようには行かなかった。

アンストンは熱心なファマティー教徒だ。

ファマティー教は唯一神の宗教で異教徒はその命を持って罪を裁くとされる。

つまりは、皆殺しにされかねないのだ。

一部若者は反撃を主張したが、数に差がありすぎる。

とても勝ち目などない。

だから、彼等はより北へ、北へ、そしてより遠くへ、と逃げるしかないのだった。



希望を求めて3（後書き）

第一話終了です。

タイトル変えようかな？

ちよつと話と合ってませんよね・・・。

それはともかく、ご意見ご感想心よりお待ち申し上げます。

## 遭遇（前書き）

未知の大地へと歩を進める日本。

そこに待ち受けるものとは？

そしてそれに対する日本の選択は？

新しき世界へ・・・第二話です。

## 遭遇

高橋たちのいる丘を目指し（正確にはその向こう側）村人達は歩み続ける。

高橋たちはまだその事に気付いていない。

そしてその一団の最後尾を守る様に簡単な武装をした若者たちがいた。

「何とか無事脱出できたな」

若者たちのリーダーであるアインが仲間に声をかける。

彼は冒険者として各地を渡り歩き、あの狂信者と噂されるアンストンが異教徒狩りに出ると聞き村まで来ていた。

何より仲間の中にこの村出身者がいたのだ。

若い故の青つちよろい熱血漢とも言える。

「でも、あの狂信者は追ってくるよ？どうする？」

アインに付き従う魔術師の少女、幼なじみのシャインが今後どうすべきなのかをリーダーたるアインに聞いた。

しかし、アインもまだそこまでは考えていない。

「どうする、と言われても・・・ただ、あいつら荷駄隊が居ないからそれほど遠くまでは動けないはずだよ」

行き当たりばつたりの意見に思わず嘆息してしまう。

たしかにそれは事実だが、アンストンの部隊は騎馬が中心の集団であるため、予想よりも広い行動半径がある。

はつきり言って甘い認識だ。

「すみません・・・私の故郷のせいで・・・」

二人のやり取りに思わず顔を伏せてしまった少女がいた。

アンストンの襲撃を受けた村生まれの少女だ。

盗賊紛いの事をして村に送金などしてきたが、とある街でアインたちと出会い行動を共にしてかた。

今回はその彼女、ミューリの故郷の危機の為に仲間たちは動いてく

れた。

しかし、結果として仲間たちをも危険な状況に追い込んでしまったのだ。

そのミューリにシャインが慌てて慰める。

「ミューリのせいじゃないよ。悪いのはアインだから」

笑いながらそう言うてのけたシャインにアインが抗議の声を挙げるが悲しいかな、黙殺されてしまった。

「ちえ、でも何であいつらは追撃してこないんだ？」

素朴な疑問を口にするアインにシャインが少し考え込む。

アインは剣士として生きてきたので兵としては優れた力がある。

しかし、魔術師として教育を受けたシャインは知識の一環として軍事知識も教育されている。

そのパーティーの頭脳とも言えるシャインは、この村人たちの疲労と警戒心が和らぐ瞬間を待っている様に思えた。

シャインの考えを聞いたミューリも同じ意見だ。

ただ逃げ出したとは言え若い男たちもいる。

生き延びる為に必死になられたらアンストンの率いる兵たちにも犠牲がでるだろう。

だが、疲労が溜まり、そして追撃が無いのに安心して緊張の糸が切れたなら・・・間違いなく抵抗する気にもならずただ虐殺されるだろう。

「とにかく、少しでも距離を稼ぎましょう」

ミューリの言葉にアインとシャインは頷いた。

「班長、森に何か動くものが見えました」

双眼鏡で森を監視していた部下の一人が田淵に報告した。

それを聞いた田淵は部下から双眼鏡を受け取り自身の目で確認しようとした。

「どこだ？見えんぞ？」

田淵が見間違いないか？と思い声を荒げた。

部下は此方です、と言って方向を指差す。

田淵は横柄な態度をしつつも部下の示す方向を見た。

そして森の中を此方に向かってくる何かの集団が木々の間から目に入った。

「な、なんだ・・・？」

田淵の言葉に全員に緊張が走る。

高橋は井上と共にその方向を確認した。

肉眼でははっきりと見えないが、二人は自前の双眼鏡を覗き込むとはっきり見えた。

「・・・武装はしてないみたいですが・・・」

井上が田淵の判断を待つ。

その判断すべき田淵はどうすべきかが頭から抜け落ちて呆然としていた。

「班長！後方へ指示を仰いでは？」

高橋が大きな声を挙げて田淵の意識を自分に向けようとした。

思わずはっとした田淵は、そ、そうだな、と言って自分で無線機を使い始めた。

「どう思う？」

こちらに向かつて来る集団から目を反らさずに高橋は井上に意見を求めた。

「兵隊じゃないみたいだけど・・・何かと聞かれても分からんとか言えねえ」

普段暢気な井上はだが、この時ばかりは真剣な眼差しだ。

「やつばな。取り敢えず何時でも撃てる様にすべきか・・・」

上が絶対に許可したがないのは良く知っていたが、自分や仲間の身を守る為にはやらざるを得なくなる。

とは言え、撃つな、と言われたら殺されても撃たないのが自衛隊だ。ある意味それは自衛官に取って一番覚悟せねばならない事かもしれない。

「は？し、しかし・・・はい・・・りよ了解です・・・」

後方と連絡が取れ、何かしらの指示を受けた田淵は力ない様子で戻ってきた。

「班長、どうしたら良いですか？」

部下が田淵にそう聞いた。

高橋も井上も、田淵の指示がなければ動きたくても動けない。

だが、田淵の口から伝えられた命令に二人は、いやその場の全員が驚愕することになる。

## 遭遇2

「総員、安全装置解除・・・独自の判断で発砲許可・・・」

顔面蒼白になりながら田淵は消え入りそうな声で言った。

それは、現地の判断で発砲を許可した瞬間であった。

しかし、初めての事に周囲から次々に疑問の声が挙がる。

そして自身も混乱しているのに、周りから次々と疑問をぶつけられた田淵はついにキレた。

「う、う、うるせえ！高橋！お前が指揮を取れ！お前とお前は付いてこい！直接聞きにいくぞ！」

八つ当たり気味に高橋に責任を押し付けると田淵は指定した二人を連れて道を足早に下っていった。

後に残された9人はそんな田淵の後ろ姿を眺めるしかなかった。

「・・・指揮権放棄かよ」

井上がぼそりと呟く。

だが、こうなつては高橋が仲間の安全の為に動かざるをえない。

「総員装備確認！」

高橋が厳しい口調で指示を飛ばす。

「井上！三名連れて道の右側に配置！佐藤！そっちも三名連れて左だ！」

集団が道なりに向かって来る事から簡易ではあるがクロスファイアポイント、つまりは火力が生かせる形を整える。

「残り二名は？掛井と橋本か・・・道の左右に伏せてろ。万が一の時は俺を援護してくれ」

高橋はこれで良いのか判断出来ないが、少しでも有利な形を作りたいかった。

そのため、以前呼んだ教本通りの体勢を取らせようとした。

もつとも、この場合の正解は全員が左右に散って相手に姿を見せず  
クロスファイアポイント  
に十字砲火に誘い込むのだが、相手が何者なのか分からないため高

橋が正面にたち塞がる形を取った。

相手が人間なら話を通じるかも知れない。

甘い見通しだが、如何に優秀な人物でも実戦経験のない高橋に取ってこれが最良の判断と言える。

「気を付けろよ！」

「高橋さん気をつけて！」

上が井上、下は佐藤の声だ。

それを聞きながら装備を確認すると、自分の89式小銃の安全装置のセレクトアーを「レ」にする。

レとは連射の意味で89式はア（安全装置）、レ（連射）、3（三点制限点射）、タ（単射）の順番になっている。

しかし、高橋はちよつと思ひ直して「タ」（単射）にした。

高橋たちのいる丘の上は木などがあつたが、集団が来る側は比較的開けた草むらだつたからだ。

こう言う時は下手にフルオート射撃するより、距離がある内に単射で狙い撃ちにした方が弾の節約にもなる。

「くそ、震えるな・・・」

周りに聞こえない様に呟いて89式を伏せた状態で構える。

「頼むから・・・話が通じてくれ・・・」

神様を信じない高橋だったが、この時ばかりは神に祈る気持ちになった。

高橋たちの存在に未だに気付かずに難民となつた村人たちは高橋たちのいる丘を目指し進み続ける。

その歩みは疲労から非常に重くなっている。

「さあ、もうちよつと頑張りましょう！」

ミューリが明るい表情で村人たちを鼓舞する。

あの丘を越えたら一安心、と言うわけでもないが、希望を持たせなければその場にへたりこんでしまつたろうからだ。

「さあ、森を抜けたよ！もう少し！」



ミューリの声に元氣付けられた村人たちは無言でも互いに助け合いながら丘を目指した。

その時だった。

丘の上に突然、人が立ち上がり道を塞いだ。

「え？」

奇妙な出で立ちの人影にミューリは間の抜けた声を出してしまった。しまった！と思ったがもう遅い。

その声に村人たちがミューリの視線の先、丘の上を見てしまった。途端に絶望感が急速に広まる。

こうなってしまうては村人たちは逃げられないと思い立ち止まってしまう。

「ちょ！みんな！？」

ミューリは戸惑い、焦ったが疲れきった村人たちは動けなくなっていた。

「ミューリ！どうした！？」

突然動きの止まった先頭集団にアインが駆け寄ってきた。

「アイン・・・あそこ・・・」

ミューリの指差す方向には妙な姿の人が立っていた。

「先回りされたのか？」

その人影にアインは呆然とするが、その人物は一人で自分たちに向かって歩いてきた。

最早動くに動けない集団と化した村人たちに向かって、その不気味な人物は近寄ってきた。

### 遭遇3

「高橋！あれはちよつと兵隊じゃないぞ！」

井上が大声を挙げる。

目立つ位置にいる高橋は銃を構えていたため、距離のせいもあり集団の様子が分からなかった。

だが、井上は双眼鏡で観察していたのだ。

「兵隊じゃない？じゃあ何だ！？」

互いに離れている為、ついつい大声になる。

本来なら色んな意味で不味い行動だが、初めての实战（雰囲気だけだが）に思わず訓練してきた事が頭から抜け落ちてしまっていた。

「高橋さん！どうも民間人みたいです！と言うか難民みたいな感じですか？」

高橋と井上が失態を演じていた所に左側に配置したはずの佐藤一樹さとうかずき二等陸士が同じく失態を演じた。

「難民？・・・どうする？」

佐藤の行動を咎める訳でもなく自問自答する高橋。

そして取った行動は勇敢であると同時に無謀でもある物だった。

「指揮を井上に任せる！ちよつと行ってみる！」

高橋の行動に思わず井上が制止しようと思を挙げたが、高橋は無視して集団に向かって行った。

「かゝ、馬鹿野郎が・・・！総員、いざとなつたら高橋を援護だ！高橋に当てるなよ！」

凄い無茶を言っているのは自覚しているものの、井上はそう言わずには居られなかった。

「止まれ！何者だ！」

アインが近寄つて来る妙な姿の男に怒鳴った。

（言葉が通じるかな？）

アインは場違いな疑問を頭に浮かべていた。

しかし、アインの言葉に男は驚いた表情をした。

「・・・日本語？」

アインに詰問された高橋は間違いなく日本語に聞こえた若者の言葉に驚いてしまった。

しかし、まだ20前に見える若者に26にもなる高橋は弱味を見せる訳には行かず、即座に表情を厳しいものに戻すと若者に対し日本語で話かけた。

「自分は日本陸上自衛隊の高橋政信一等陸士です。貴殿方は？」

高橋の言葉にアインたちも驚いた。

彼等が聞いた事もない奇妙な事を言ったからだ。

ただし、アインの驚きは他のものたちと違う物だった。

(・・・言葉が通じた・・・)

微妙にずれた感覚のアイン。

流石に先頭に來ていたシャインが溜め息をついた。

「え」と、こいつは無視して頂戴」

シャインの呆れた様な様子と言葉に高橋は警戒しすぎだったと反省した。

先ほど佐藤に言われた様に彼等の姿はボロボロだった。

「失礼しました。私たちは村を焼け出されて北に向かっています」

ミューリがホードラー王国の手の人ではないと見抜き自分たちの目的を告げる。

「この先は貴方たちの国なのですか？」

ロープを着たシャインが高橋を警戒しながら言った。

もしかしたら追い返されるかも知れない。

いや、最悪は彼等も自分たちを異教徒として・・・。

考えたくは無いが、そう考えて行動しなければならないのだ。

警戒も仕方なかった。

「いえ、この先に国はありませんよ？」

意外にも正直に高橋が答えたのに一同は驚きを禁じ得なかった。

「じゃあ、貴方は何処から来たの？」

怪訝そうな少女二人に高橋は答える。

「まあ、海を渡って来たばかりでして……」

後に軽率と言われてしまう事ではあるが、高橋は取り敢えず普通に受け答える事にした。

「……じゃあ、ファマティー教徒じゃないの？」

ミューリが高橋の目を見ながら言う。

まるで嘘を見抜く様な眼差しだ。

「その……ふあ……何とか知りません。そもそも我が国は信仰の自由があります。しかも私は無神論者です」

はつきり言えば高橋にとって当たり前の事を当たり前に言っただけだったのだが、彼等はまるで信じられない物を見たかの様だった。

「は？信仰の自由？嘘……」

ミューリの眩きが耳に入る。

高橋はそんなに凄い事かな？と思っていた。

「しかも……貴方は無神論者？冗談でしょ？」

シャインも高橋の発言が信じ難いのか聞いてくる。

そんな二人に高橋は笑いながら答えた。

「我が日本には信仰の自由がありまして、当然ながら神様を信じない自由もあるのですよ」

敵意の無い笑顔に思わず誰もがホッとした思いだった。

「まあ、それはともかくとして……この先に進んでも我々の仲間ばかりですよ？」

焼け出されたとは聞いていたが、このまま通して良いものか判断が付かない。

その為に探るつもりでこう言ったのだが、逆に高橋は更なる難問を作り出してしまっていた。

「お願いがあります。私達を助けてください」

少女たちの懇願に高橋は己の耳を疑わざる得なかった。

助けてください？

え？

なに言ってるのこの娘達？

「ちょ、ちょっと待って下さい。そんな事を言われても・・・」

慌てる高橋の様子に少女たちは目に涙を貯めて更に懇願する。

女の子の涙に勝てる道理もない。

無いが、気軽にいいよと言える訳でもない。

「うーん、人情的には助けて差し上げたいですが、自分には判断をする権限がありません。上に報告するので少々お待ちください」

取り敢えず自分に出来る精一杯の返答をする。

返答して即座に無線を取り出し、後方にある調査派遣隊本部に連絡を取った。

### 遭遇3（後書き）

はい、ここで第2話終了です。

ちよつと話の展開がのんびりし過ぎでしょうか？  
それとも駆け足過ぎますでしょうか？

丁度良い感じがつかめてないので、もし何かあれば教えてください。

## 交戦（前書き）

自衛隊の前に敵意むき出しの集団が現れた。  
自衛隊は、高橋たちは生き残れるのか？

新しき世界へ第三話、始めます。

## 交戦

調査派遣隊本部の伊藤重信<sup>いとつしげのぶ</sup>は高橋からの報告に戸惑いを隠せなかった。

はつきり言えば伊藤の持つ権限を超えていた。  
が、ここで見捨てる訳にも行かない。

取り敢えずどうしたものか外務省から派遣されて来た責任者、北野<sup>きたのた</sup>武<sup>け</sup>に相談してみた。

「良いのでは？色々こちらの情報を集めるのにも役立つと思いますし」

北野があっさりそう言うてのけた。  
流石に面食らった伊藤だったが、確かにこの地の情報は欲しい。  
しかも言葉が通じるのはありがたい。

「では、保護でよろしいですね？万が一ホードラーとか言う国から引き渡せと来たらどうします？」

伊藤は一応聞いてみた。

今の日本に戦争する余裕はない。

下手な返答をすれば初めて接触する事になる文明社会、つまりホードラーと言う国家と戦争になるかも知れないのだ。

安易には決められない。

「構いません。第一、文明レベルは12世紀から14世紀レベルらしいですからね。それに、先住民に気を使って日本を滅ぼす訳にはいきませんからね」

北野の冷静かつ冷徹な言葉に伊藤は息を飲む。

つまりは、日本の存続が最優先でその邪魔になる障害は潰すと言っているのだ。

「言質は頂いた、と解釈してもよろしいので？」

伊藤は確認の為に再度聞いた。

「良いですよ。事前に決まっていた事ですから。なんなら書名にし



て残しますか？」

あっけらかんとした北野の様子に伊藤は冷たいものが背筋に流れた。だが、同時に腹も立った。

戦争となつても戦うのは俺の部下だぞ？

そう怒鳴りたかったが、自衛隊はその為にこそ存在する。

日本を守るために存在するのが自衛隊ならば、これもまた日本を守る事だと考えた。

「了解しました。では難民の保護と不測の事態に備え防衛出勤します」

そう言つて敬礼する伊藤を北野は任せましたよ、とだけ言つた。

「なん・・・だと・・・」

本部からの通達に高橋は冷や汗を流した。

（政府は、やる気なのか？）

当然の疑問だが、今の高橋に疑問を解いてる暇はない。

保護せよ、また不測の事態に備え増援も出す。

と命令されればやるしかない。

「・・・許可が出ました。皆さんを保護します」

漸く絞り出した高橋の言葉だったが、彼等にとつては救いの言葉だ。難民たちはこれで助かる！

と口々に叫び出す。

歓喜の涙を流すものもいた。

「そうと決まれば早速行こう！追っ手が来る前に！」

アインの声に難民たちが疲労した体に鞭打つように動き出した。

だが、高橋は不吉な言葉を聞いた気がした。

「追っ手？」

その呟きは歓声に消えた様に思えたが、ミューリと名乗った少々がしっかり聞いていた。

「ええ、ホードラー王国のアンストンと言う騎士が追って来てる筈です」

初めて聞いた事実には高橋は生きた心地がしなかった。

はめられた。

そう思ったが今更だ。

いつ来るか分からない追っ手に迎撃体勢は取らねばならない。

「では大急ぎで丘を越えてください。追っ手が来ても丘で食い止めます」

血の気が引いていたが、逆に冷静になれた。

「井上！佐藤！戦闘配置に着け！敵が来るぞ！」

高橋が無線機に怒鳴る。

その様子にシャインが声をかけてきた。

「凄い魔法のアイテムね？後で見せて貰っても良いかしら？」

この状況下で好奇心を発揮できるシャインに呆れながらも、高橋は難民が来た方向を見ていた。

そして気付いてしまった。

近い！

「急げ！追っ手が近くに來てるぞ！走るんだ！」

高橋の叫びが辺りに響く。

近くにいたシャインがハッとして高橋の視線の先を見る。

その目に土埃がたち昇るのが視界に入った。

「みんな急いで！」

シャインも高橋と同じ様に大声を挙げる。

途端に周囲はパニックに陥り、一目散に丘を目指した。

「貴方も早く！」

ミューリが高橋の袖をつかむ。

しかし高橋はそれを振り払った。

「皆さんの避難完了まで時間を稼ぎます」

高橋にそう言わせたのは、自衛官としての使命感なのだろうか？  
それとも日本人としての矜持だろうか？

そのどちらかも知れない。

「無理よ！1人でなんて！」

悲鳴の様に叫ぶ二人に高橋は笑いながら答えた。

「自分は自衛官です。難民に危機が迫っている状況で逃げる訓練は積んでません。大丈夫、任せてください」

悲壮な覚悟だった。

だが、笑みと言う虚勢をはる事で自らを奮い立たせる。

「行きなさい・・・さあ早く！」

最後は怒鳴る様にして正面を見据えた。

高橋の怒鳴りに二人は高橋の後ろ姿を振り返りながら難民たちの最後尾を守るように走り出した。

それを見送った高橋は、さっきは忘れていた小銃の初弾を装填すると89式を構えた。

「・・・日本人を舐めんな！」

高橋の咆哮が響くとほぼ同時に騎馬集団が森から姿を表した。

## 交戦2

アンストン率いる騎兵部隊は歩兵を置いて異教徒を追撃していた。それは異教徒たちに騎兵に対する反撃能力が無いとの判断だった。

「クルシア！お前は50騎ほど連れて更に先行しろ！」

アンストンの号令にクルシアは速度を上げて本隊の先へと向かった。

「私が着く前に片付くだろう」

ほくそ笑みながらアンストンは異教徒の末路を想像する。

だが、先行したクルシアたちはそこで恐るべき存在と出会う事になる。

クルシアは部下を引き連れひたすらに粗末で細い道を駆け抜ける。

あまりにも粗末故に2騎並ぶのでやっとだ。

それでも道は蛇行しておらず、ほぼ真っ直ぐなのが幸いし速度を出せた。

「クルシア様、そろそろ追い付きますな」

横にいた部下が声をかけてきた。

まだ若い部下はこれが初めての実戦なのだ。

戦功を早く挙げたくてウズウズしているのが分かる。

「まあそう焦るな。異教徒共はどのみち逃げられはしない」

騎兵の機動力を前にすれば徒歩で逃げる事など不可能だ。

そう思うと楽な仕事だとさえ思う。

「クルシア様！森を抜けます！それと声が聞こえます！」

先頭を走る部下が大声でクルシアに報告する。

「よし、追い付いたぞ！1人も生かすな！情けは要らぬ殺せ！みなごろしにしろ！」

騎兵部隊の先頭が遂に森を抜けた。

「止まれ！」

森を抜けたと思いきや、突然先頭から制止の叫びが聞こえた。  
異教徒を目前にどうしたと言うのか？

クルシアは疑念もそこに前に出てきた。

「いったいどうしたと言うのだ」

怒りを押し隠しながらクルシアは制止をかけた部下に問う。

「それが・・・」

言葉を濁す部下の視線の先には見慣れない奇妙な服装の男が立っていた。

その男は何かをこちらに向けており、立ち塞がるつもりらしい。

「貴様何者か？」

高圧的なクルシアの呼び掛けに高橋は負けじと声をあげた。

「日本国陸上自衛隊だ！これより先は日本国の領域である！直ちに引き返せ！」

高橋の言葉にクルシアは驚愕した。

ニホンコク？ジエイタイ？何を言っているのだ？

「この辺りに国などない。貴様の国があるなど聞いたこともない」  
クルシアはブラフと思い笑った。

小賢しい。

その程度で我等を止めるつもりか？  
異教徒らしい。

クルシアの嘲りに似た笑みを前にしても高橋は冷静でいられた。  
以前は守るべき国民からものと辛辣な態度を取られてきたのだ。  
この程度なら然程の事もない。

「お前たちが知らなかっただけで存在する。それとも戦争でも仕掛けるつもりか？」

半分ブラフではあったが高橋をそれを悟られない様に見下した目を向ける。

その高橋を胡散臭い目で見ていたクルシアは、高橋の背後に異教徒が丘に登る様子が見えた。

「ふん！大方時間稼ぎのつもりだろう！その手には乗らん！踏み潰せ！」

クルシアの号令に数人の騎兵が一気に間合いを詰めようと駆け出してきた。

撃つしかない！

高橋はそう思うと引き金に指をかけた。

直後、タン、タン、タン、と高橋の89式が火を吹いた。

高橋が89式小銃を撃つと途端に騎兵が1騎、もんどり打って倒れた。

小銃弾は馬の頭に命中し、そのまま貫通して騎兵の鎧と体に穴をあけたのだ。

仲間の突然の悲劇に思わず他の騎兵の足が止まる。

そこを狙う様に高橋は引き金を引き続けた。

クルシアの思考は混乱していた。

武器らしきものを持つてはいたが、鎧もなく軽装な高橋が騎兵をどうにか出来るとは思えなかったのだ。

だが、目の前には既に五人目の騎兵が馬と共に地面に倒れた伏していた。

（何が起きた？魔法か？）

クルシアの様子に不安げな表情で部下が近寄る。

「クルシア様、如何いたしますか？」

部下の言葉にクルシアは我に返った。

「魔法かも知れん。が、たかが1人だ。全員で一斉にかかれ！」

魔法ならば脅威だが、見たところ1人づつしかやれない様だった。これなら行ける！

とクルシアは思った。

そう、これが目に見える高橋1人なら・・・。

高橋は相手が動きを止めている隙に弾倉を交換し、セクターを「レ」（連射）に切り替える。

まだ最初の弾倉には弾が残っていたが、攻撃を続けられ弾が切れた時に交換する余裕があると思えなかったからだ。

しかし、自分でも驚くほど冷静で居られた高橋だが、後ろの丘にいる井上たちは気が気ではない。

「あの馬鹿・・・」

井上が思わずぼやく。

騎兵が姿を表した時に援護しようとしたが、難民が射線に入り込んでいて撃てなかった。

もつと間隔を空けてれば・・・と悔やんだが、高橋は何とか切り抜けた様だ。

それでも動くに動けない高橋を助けるため、井上と佐藤の部隊はゆつくりと、だが確実に前進を続けていた。

難民の誘導は道端に伏せていた二人に任せている。

今は高橋を助ける事を考えよう。

井上はそう思った。

### 交戦3

クルシアの騎兵部隊は森から回り込む様にして平地に姿を現している。

高橋は道から飛び出して来るならまだ対処できたが、こうなってはダメかも知れない。

と思い始めていた。

「どうすつかなあ」

独り言を呟きながらも注意深く様子を伺う。

次第に騎兵は横一列に並び、持っていた槍を構える。スピアランスチャージ

これがかつて西洋で行われた騎兵戦術かとちょっとだけ感動した。だが、その衝力は侮れない。

馬の突進を人間が食らえばひとたまりもないからだ。

そんな油断せず構える高橋を横目にクルシアは右手を上げた。

「さあ、どうする魔術師？」

にやりと口元を歪め高橋を見る。

いつまでそうやって居られるかな？

そう思いながらクルシアは号令と共に右手を降り下ろした。

「突撃いいい！」

待つてましたと言わんばかりに馬が嘶き、一斉に走り出した。

文字通り地響きの様な音を上げて向かってくる騎兵の姿に高橋は顔面蒼白になりながらも己を奮い立たせるように叫び、引き金を引いた。

「うおおおお！」

高橋の雄叫びと共に89式から連続して5・56mm弾が吐き出される。

それは人馬共に貫き、騎兵をなぎ倒していく。

しかし、フルオートで撃てばあっという間に弾が切れてしまう。



何人かをなぎ倒したところで89式は30発の5・56mm弾をうち尽くした。

「くそ！」

悪態を吐きながら即座に弾倉を交換し、再装填を終え構えた時には騎兵の集団が高橋の目の前に迫っていた。

「ダメか！？」

「もらったぞ！」

高橋の諦めに似た言葉とクルシアの勝利を確信した言葉が重なった。

その時だった。

「高橋い伏せろお！」

高橋を呼ぶ声が聞こえた。

瞬間的に高橋は地面に伏せる。

同時に高橋の後ろ左右から一斉に聞きなれた89式の銃声が鳴り響いた。

「な、なん・・・」

クルシアは最後まで言葉を紡げなかった。

誰の放った銃弾かは分からないが、右目に5・56mm弾が命中したのだ。

クルシアの右目に当たった銃弾はそのまま突き抜け、脳を破壊した後頭部から飛び出す。

その段階でクルシアは仰け反る様に馬上から吹き飛ばされた。

周りの騎兵が思わずクルシアを振り返るが他人の心配どころではない。

クルシアを吹き飛ばした攻撃は彼等自身にも向けられているのだから・・・。

高橋を狙っていたクルシアを含む数人は真っ先に撃たれ、それ以外の騎兵も順次撃たれていった。

とは言え、幾らなんでもすべての騎兵は撃ち取れるものではない。

どうしてもうち漏らしは出るのだが、少なくとも半数近くは討ち取れた。

こうなれば残りは恐慌を来して逃げ出すしかない。

何せ訳も分からない攻撃により指揮官たるクルシアは元より同僚が次々に倒れて行くのだ。

流石に士気は崩壊してしまう。

結果、残った半数は踵を返して逃走を図った。

しかし、初めての实战に絶好の追撃が可能であるにも関わらず自衛官たちはそのまま見送るしかなかった。

高橋は九死に一生を得て安堵しながら立ち上がった。

そこに井上が駆け寄り、キツイ一発を食らわせた。

「馬鹿野郎！いいカツコすんのも大概にしろ！」

井上の怒声に高橋は何も言えなかった。

「幾ら何でも無茶が過ぎるだろうが！死んじゃうところだったんだぞ！」

高橋は井上の怒りに何も反論が出来なかった。

いや、高橋自身、無謀とも言える行動で命を落としかけたのは理解出来ていた。

あの場合、それしかなかったにせよ、仲間が存在を考慮していなかったのだから。

「いいか？テメエがどんな無茶をしても俺らが死なせねえ！逆にテメエが俺らの命を背負ってるんだ！テメエが無茶した分だけ仲間の俺らの命が危険になることを自覚しやがれ！」

高橋には井上の言いたい事が分かっていた。

自分たちの上官たる田淵を信頼出来ない代わりに、仲間は高橋を信頼しているのだ。

その高橋を守るために仲間は命をかける。

だからこそ、高橋は皆の命を背負って行かねばならないのだ。軽率な行動一つで仲間を危険に晒すのだ。

井上はそう言いたかったのだと・・・。

「すまん・・・」

高橋はようやくそう言葉を絞り出した。

その様子に井上がようやく笑みを浮かべた。

「頼むぜ戦友、あいぼうこんなところで死ぬつもりはねえからよ」

井上の言葉に仲間たちが頷いた。

### 交戦3（後書き）

第3話終了です。

戦闘の緊迫感を伝えられたでしょうか？  
皆様のご意見をお聞かせください。

ではまた次話で合いましょう。

## 撃退（前書き）

何とか無事、騎兵を追い払った高橋たち。

しかしそこに騎兵部隊の本隊が来る。

圧倒的な数の差でせまる騎兵に立ち向かう高橋たち……。

だが、高橋たちに絶望感はない。

なぜならばそこに……。

第4話「撃退」お楽しみください。

## 撃退

高橋達がホッとしたのも束の間、新たな一団が高橋たちの下に向かっていた。

アンストン率いる異教徒討伐部隊だ。

アンストンは生き残ったクルシアの部下から報告に怒り心頭だった。異教徒なぞに自分の部下を討たれたのだ。

アンストンの性格上許せるものではない。

「おのれ異教徒の不信心者どもめ！神の信徒を手にかけるとは！」

激しい怒りにアンストンは逃げ帰った騎兵を斬り殺す程だ。

周りの部下は恐怖に縛られ何も言えなくなっていた。

「栄光ある王国の兵よ！神の忠実なる僕よ！異教徒どもに神の裁きを！」

アンストンが血に濡れた剣を高々と掲げる。

部下たちもそれに倣い剣を掲げた。

「異教徒に裁きを！」

「異教徒に断罪を！」

「異教徒に死を！」

口々に吼える部下を満足そうに見たアンストンは全軍に前進を命じた。

それはクルシアが引き連れた50騎などもの数ではない。

総勢300を数える立派な騎兵团だった。

難民を丘向こうに送った高橋たちは、更なる追撃を警戒しつつ丘まで下がった。

そこにはアインたちが待っていた。

「あんた・・・一人じゃなかったんだな」

アインがようやく気付いた様に言った。

「あのなあ、ちょっと考えりゃ分かるだろ？」

アインの言葉に井上が答えた。

「俺たちは自衛隊、つまり君らに分かりやすく言えば私兵ではない国の軍隊だぞ」

そう言われて三人は初めて高橋たちが軍人であることを知った。

「じゃ、じゃあタカハシさんは国に仕えているの？」

シャインの驚きの声を挙げた。

ここで彼等の驚きの理由は階級制度にある。

王がいて、その下に諸侯という貴族がいて、諸侯の下に騎士（家によつては貴族と同列にもなる）がいて騎士の下に国民や領民がいる、と言う階級制度なのだ。

つまり、国（王）に仕える軍人とは貴族や騎士の事なのだ。

これが普通の庶民なら軍人にはなれない。

扱いは民兵や傭兵、諸侯からすれば市民兵と言う数合わせに過ぎない。

だからこそ高橋たちが国の軍隊、即ち国軍《自衛隊》と名乗った事で騎士貴族階級だと勘違いしたのだ。

「まあ、下っぱだけだな」

笑いながら井上は答えたが、お互いの認識にズレがあることに気付いていない。

しかし、佐藤はそれに即座に気付いた。

元々歴史好きな知り合いがいたおかげでそれなりの知識ぐらいはあったからだ。

そのため間違いを正そうと発言した。

「ただし、日本には身分制度が無いので貴殿方の考えるような軍人ではありません」

井上は佐藤が何故そう言ったのか分からなかった。

高橋はそんな二人を見て、お互いが生きてきた世界の違いを感じ取

っていた。

「身分制度が無い？どうやって国として存在しているの？」

知識欲が比較的強いシャインは食い入る様に聞いてくる。

しかし、高橋たちに説明する余裕は無くなっていた。

麓に新たな一団が姿を現したのだ。

「どうやら、本体らしいな」

井上が陽気な顔から急に険しい表情になる。

たった一回、しかもある意味一方的とも言える戦いではあったが、その一回がその場の自衛官に自信を与えていた。

勿論、彼等が特別だからではない。

ただ自衛官として永久に無いことを祈りつつも常に国民の盾になる事を使命として生きてきたからだ。

ちよつとしたきつかけが彼等を訓練を受けてきただけの素人から一人前の兵士へと大きく変えていた。

そんな彼等の変貌に驚きを隠せないアインたちだったが、アインにも分かる気がした。

アインもまた剣士として幼なじみを守ってきたのだから。

もつとも、シャインからすれば肩を並べてきた。だが……

「数が多いな……どうする？」

何度も死線を越えてきたアインが落ち着き払って高橋に聞く。

そんな年不相応なアインを見た後、高橋は89式を持ち直し周囲を見る。

「総員装備の確認、それから先程の配置に着け」

高橋の指示に全員が敬礼で答えたが、井上はついでに一言進言した。

「奴等は騎馬だ。横一列で来られたら十字砲火は難しいと思うが？」

井上の言葉に少しだけ考えこむ。

そして……

「俺らだけなら厳しいさ。だが……」

高橋が無線を取り出した。



それを見て井上はニヤリと笑みを浮かべた。  
そのやりとりを見ていたアインたちは、彼等が何かとんでもない事  
をするのではないか？  
と思いだしていた。

## 撃退 2

「奴等は何処だ？」

アンストンは平地に出たものの予想する攻撃を受けない事に疑問を持っていた。

目の前には狭い平地と細い道、そして打ち倒された騎兵の屍が転がっている。

「まさか・・・増援を呼びに行ったのでは？」

部下が考えられる可能性を口する。

しかしアンストンはそう思わなかった。

「馬鹿馬鹿しい。異教徒に援軍があるなら逃げ出す事もあるまい。大方、異教徒らしく汚い罠でも仕掛けているのだろう」

アンストンは逃げ帰った部下の曖昧な報告に見向きもしなかった。妙な男の放つ魔法にやられたなど信頼性に欠ける。

そもそも放つ魔法が離れた位置から人の体に穴を開けるなど信じられない。

「アンストン卿！丘を御覧ください！」

アンストンは突然の声に思考を止めて丘を見る。

そこには妙な格好をした男が一人立っていた。

「ほう、なるほど、奇妙な姿だな・・・だが！」

アンストンは剣を振り上げ前進を命じた。

「そんなこけ脅しに屈する私ではない！」

その様子を見ながら高橋は背後から近付いてくる音を聞きながら、目の前の集団に向かって銃を構える。

「どうやら、こちらの勝ちの様だな」

高橋の自信にミューリが不思議そうな顔をする。

先程は逃げるのに必死で高橋たちがどうやって騎兵を追い返したのかは分からない。

だが、あれだけの数を前に何故ここまで落ち着き払っていられるのか？

そして段々と近付いてくるこの音は何だろうか？  
だが、今ミューリに言える事はただ一つ。

この人たちなら・・・どうにかしてしまいかも知れない。

そんな気になった。

「全軍、突撃いいい！」

アンストンが突撃を号令する。

それに伴い300もの騎兵集団が一気に丘を駆け上る。

そして高橋の元に向かい殺到してきた。

それこそが高橋の罠とも知らずに・・・。

「ははは、本当に横陣を取らずに来やがった・・・」

笑いと共に高橋の作戦が上手く機能していることに井上はそら恐ろしささえ覚えた。

「あいつが敵じゃなくてよかったあ」

井上の呟きが終わった直後、高橋が合図の銃弾を放った。

僅かな後に騎兵の先頭集団に正面とその左右から銃撃を喰らわせる。教科書に載せたいほど理想的な十字砲火だ。

2方向からでも十分な攻撃力を発揮する十字砲火は、射線が丁度十字を描くように行う。

これにより本来、線にしか発揮出来ない攻撃力を面で行える。これが3方向ともなると逃げ場さえなくなる。

この中に入り込む事は死地に飛び込むのと同義になる。

そして、それはアンストンの騎兵集団で現実の物となった。

「なんだ！？なんなんだ！！」

アンストンが怒声をあげる。

アンストンの騎兵部隊が為す術なく打ち倒されて行くのだ。辺りは一気に悲鳴の嵐を巻き起こす修羅場となっていた。

「み、味方が！」

騎兵の一人がそう言った瞬間、頭を撃ち抜かれて地面へと落下する。アンストンは何も出来ない状況に怒りを露にした。

「えええい！進め！進まんか！進まぬなら私が斬る！」

そう叫ぶと前に行こうとしない部下を切り捨てる。

「進め！それ以外に神の信徒たる我々を取るべき途はない！」

このままではただ殺されてしまう。

しかしだからといって味方に殺されたくはない。

萎えた戦意を奮い立たせて騎兵は丘の上をひたすら目指した。

味方の死体を文字通り踏み越えて……。

だが、それは更なる絶望へと繋がる事になる。

流石に高橋たちの所持弾薬から言って300の騎兵と正面切って戦う事は不可能だ。

このまま前進されれば高橋たちこそが為す術なく蹂躪されるだろう。だが、既に高橋たちの直ぐ背後に援軍が駆けつけていた。

『こちらワルキューレ、目標を捕捉した。これより攻撃を開始する』

爆音を轟かせて姿を表したのは陸上自衛隊の多用途ヘリコプター、UH-1J「イロコイ」だった。

ベトナム戦争に初登場し以来、世界各地で現在も活躍している多用途ヘリコプターだ。

UH-1J「イロコイ」は固定武装を持たない。

逆に言えばある程度武装を自由に選べると言うことだ。

そして、今飛んでいるイロコイは機体左側面にM134ミニガンを積んでいた。

本来、自衛隊はミニガンを装備していなかったが、一緒に転移して来ていた在日米軍（彼等の現在の後程）から供給されたのだ。

そしてイロコイが左側面をアンストンの騎兵隊に向ける。  
そこから突き出ているミニガンが凄まじい勢いで銃弾を吐き出した。  
その瞬間、アンストンの目の前で騎兵が馬もろとも肉片へと姿を変えていった。

アンストンはまるで悪夢を見ているかの様な心境だった。

### 撃退3

アイン、シャイン、ミューリの三人は目の前に繰り広げられる光景に唖然としていた。

高橋たちが剣でも槍でも、ましてや弓でもない武器を使い騎兵を離れた位置から攻撃したのにも驚いたが、見計らった様に背後から現れた箱の様な空飛ぶ存在が騎兵を肉片へと変えていたからだ。

まるでドラゴンが人間を蹴散らすように見える。

その空飛ぶ存在、多用途ヘリコプター、イロコイはホバリングしながらミニガンを騎兵集団に打ち続けている。

「・・・なんて、力だ・・・」

300もの騎兵が為す術なくただ一方的に殺されるなど、あり得る事ではない。

アインは呆然としながら、それが当たり前の様に見ている高橋たちに恐怖心を抱いた。

それはシャインもミューリも同じだ。

シャインは魔力を感じない事から魔法ではないと気付いたが、魔法でなければなんなのか？

と思っていた。

魔法を使う訳でもなく、このような真似が出来るなど聞いた事がない。まるで悪魔の所業と言えるではないか。

気づけば体が小刻みに震えていた。

もしかしたら、自分たちはとんでもない存在と関わってしまったのではないか？

そんな思いがしていた。

また、ミューリも怖れていた。

シャインと違い震えは無かったが、目の前で人を肉片に変える力を

持った人たちに助けを求めたのは早急だったのではないか？

もし、彼等が自分たちの生存を認めなければ……。

と考えてしまう。

だが、その反面、自分たちを常に迫害してきた王国の兵と言えど、ああも無惨な最後を迎えている様には哀れみがあった。

三人は複雑な心境にあったが、高橋たちからすれば危ないところだった。

もし、騎兵集団が最初から横陣を取っていたら？

もし、援軍が来る前に弾が切れていたら？

どれも「if」でしかない。

だが、高橋たちが無事なのは運が良かった。ただそれだけだ。

高橋が取った1人だけ姿を見せ、相手に油断してもらった策も、相手が慎重であったなら意味は無かっただろう。

知るよしは無かったが、アンストーンが部下の報告を無視したことも幸運だった。

それらを考えると高橋はギリギリだったと思う。

もつと違ったやり方があったのでは？

とさえ思える。

しかし、今生きている事が重要であるなら、結果が全てであろう。どう言う形であれ高橋たちは1人の犠牲も出ていないのだから。

ふいにミニガンの射撃が止まった。

弾が切れかけたのだ。

イロコイには固定武装が無いので、後は持ってきた89式小銃だけだ。

しかし、もう必要は無くなっていた。

何故ならば騎兵はすでに兵力の多くを失い、戦意も砕け逃げ出していたからだ。

指揮官らしき立派な鎧に身を包む男が何やらその場に止まりどなり散らしていたが、誰も見向きもしない。

アンストンは部下の逃走を押し止めようと怒鳴り、剣をふり、信仰心を求めたが、最早叶わぬことだった。

恐慌を来たし、戦意が挫けた今となつては如何なる名将であつても崩壊を止める術はない。

ましてや、勇猛さしか持ち得ないアンストンの力では尚更不可能だ。結果、気付けば戦場にただ1人残されていた。

頭上にはこの惨劇を生み出した悪魔が未だに浮かび、前には得体の知れない異教徒。

こうなつては撤退もやむ無しなはずだが、アンストンは討つべき異教徒に背を向けて撤退を選ばなかった。

いや、選べなかった。

それを選ぶにはアンストンは狂信と言える程の信仰心と騎士たる自尊心が強すぎたのだ。

「く、くくく……こうなつたからには……1人でも多く道連れにしてやる！」

何故、己が破れたのかと言う理由を無視し、道連れを作れると思えた思考を誰も知りたいとは思えない。

しかし、アンストンは出来ると思ひ込んでいた。

いや、ただ単に目の前で行われた事を認めたく無かつたのかも知れない。

「私を！ファマティー神の忠実なる僕しもへを討てるならば討つてみよ！」  
そう大声を張り上げるとアンストンは1人丘の上に駆け出した。

だが、やはりそこにたどり着く事は出来なかった。

高橋たちは最後まで残つた指揮官を生け捕りにしようとは思つたが、その為に仲間を危険に晒すのは苦しい。

だから、高橋は自分の手でアンストンを撃つた。



銃弾は剣を振り上げて馬の陰からでていた胸を、心臓を鎧ごと容易く貫いて行った。

（わ、私は・・・神の下へ・・・）

それがアンストンの最後の思考だった。

地面に倒れている最後の騎兵に高橋たちは囲むように、慎重に近づく。

そして井上がその体を足で突つついた。

「・・・もう、大丈夫だ」

その一言に緊張の糸が切れた一同は安堵の溜め息と共に座り込んでいく。

如何に実戦を経験し、心が強くなってもそれは戦っている間だけだ。戦いが終われば1人の人間に戻ってしまう。

「俺ら・・・人を殺したんですね・・・」

佐藤の力ない呟きは、誰しもが同感だった。

人を殺す。

必要であれば躊躇わないでやれるだろう。

だが、覚悟はあっても実際にやる時が来るとは思っていなかった。そして来ても欲しくなかった。

「まだ全部が終わった訳じゃない。呆けるのは後にしろ」

気丈に振る舞う井上であつたが、やはり顔色は良くない。

それでも残っていた義務感が彼等に再び立ち上がる力を与えた。

そう、難民達を設営途中とはいえ基地まで誘導するために・・・。これが後の日本にどのような影響を与えるかは誰にも分からない。

### 撃退3（後書き）

第4話しゅうりょうです。

ちよつと駆け足過ぎたのを反省中。

と言う訳で今回はココまでです。

次回はもう半分以上出来てますので直ぐに書き込めると思います。

では、またお会いしましょう。

## 選択と行動（前書き）

難民を保護し、新しき世界の文明を持つ国家と戦った日本。  
その両方に難問を抱えたままでありながら日本は次の一手に打って  
出る。

それは日本に存在する因縁との惜別のための決断だった。

第5話・・・「選択と行動」お楽しみください。

## 選択と行動

5月20日、日本内閣総理大臣執務室

難民の保護、及びホードリー王国と呼ばれる国家との交戦についての報告書を読み終え、鈴木は疲れた目に手をやった。

いくら何でも早まったか？

だが、鈴木は即座に思い直す。

日本を救う為には鬼にならねばならないと自身で誓ったからだ。

「難民の処遇だが、どうする気だ？」

鈴木から読み終えた報告書を受け取りながら伊達が鈴木に尋ねた。

日本は元々難民や亡命を原則的には認めていない。

もしくは受け入れない様にしてきた。

それは元々の世界における地理的位置関係と国土面積や人口の観点から、やむを得ない処置と言える。

当時は移民をもっと受け入れろ、と言うのが多かったな。

鈴木は思い返して少しだけ当時を懐かしんだ。

だが、いつまでもそうしては居られない。

やる事は山積みなのだ。

「取り敢えず、方針が決定するまでは現地で保護をつづけさせる。

必要な物は送ってやってくれ」

鈴木の判断に伊達が口を挟む。

「ただ飯食らいを養う余裕はないぞ？ただでさえ食い扶持が多いんだぞ」

伊達は立場上、苦言を言わねばならない。

鈴木の判断を両手を挙げて受け入れてはならないのだ。

それを分かっている鈴木は苦い笑いをしながらも、現地の情報料代わりとしてくれ。

とだけ言った。

「それならば仕方ないな。それに情報と引き換えならただ飯にはならんしな」

伊達も正直強弁がすぎると思ったが、それしか無いのでそれに従った。

「まあ、後々は現地で普通に働いて貰うさ。彼等に日本の下に付く気があれば、だがね」

鈴木自身抱えている疑念をそのままに告げる。

「考え過ぎだ。彼等の話じゃ行く当てもないらしいし、普通に日本の保護下に入るさ」

そう言つてやや樂觀的な意見を伊達は口にした。

しかし、次に鈴木が口にした疑念は伊達だけではなく閣僚全員を悩ますことになった。

「日本国民と現地人の扱いをどう区別するかだよ」

この一言に伊達も体が強ばった。

「・・・それは・・・難問だな」

伊達はそこまで考えてなかった自分の迂闊さを呪った。

「もし彼等が日本の保護ではなく、日本の市民として生きる事を選択したとして、国民とするのか在外外国人とするのかが問題だ。国民とするのは間違いなく現在の在外外国人と摩擦になるだろう。そして在外外国人とした場合は今度は日本人との間に摩擦が生まれかねない。最悪、不穏な在外外国人と組まれでもしたら現地から追い出される可能性もある」

鈴木の追い討ちとも取れる話に流石の伊達も声を失った。

転移前から日本には在外外国人と呼ばれる人々がいた。

日本が転移した為に祖国に帰れなくなった在外外国人の中には、暴動を起こすものがいた。

その為、現在は在外外国人の帰化制度の停止、取り分け特定アジア出身者に対しては秘密裏に監視対象にさえしていた。

残念な事に特定アジア出身者がもっとも暴動などを含めた各種犯罪を多く起こしていた為だ。

酷いになると、配給制にした食料、燃料を強奪したり、保管庫に押し入ったり、はたまた、それら盗品を闇市で売りさばこうとしたりした。

それらは何とか食い止めたが、氷山の一角であるのは明白だった。

「はつきり言つてどっちを取つても問題しかないな」

伊達はその言つて日本に巣くう獅子身中の虫の大きさに辟易とした。

「伊達の台詞ではないが、ただ飯食らいの厄介者を飼う余裕はない」腕を組ながら冷たい感じでいい放つ鈴木に、伊達は一瞬強ばる。

こいつはこう言つのがあるから侮れん。

率直かつ、長年親交を持つた伊達ならではの心中だった。

「いつそ、適当な土地を与えて独立でもしてもらうか？」

鈴木が続け様にいい放つた言葉に伊達も絶句してしまった。

「日本と共に生きる気がないなら日本に居て欲しくない。そもそも、我々から居てくださいと願つた訳じゃない上に不法入国者の子孫が大半なんだからな」

本来、公然の秘密である在日外国人（取り分け特定アジア出身者）をはつきりと厄介者としたのだ。

だが、確かにいい案でもある。

問題は、転移して大変ではあるものの、住みやすい日本を大人しく離れるか？

ではあるが・・・。

「国民が、と言うよりマスコミや野党が煩いんじゃないか？」

鈴木の前を恐るべき発言に伊達は心胆寒からぬ思いをしながらも、今後、に禍根を残すのではないか？

と思ひ、伊達には珍しく慎重な意見を述べた。

「なに、元から存在しない禍根をさもあるように作り出して来たんだ。今更新しい禍根など・・・それに、嫌われ者の私を更に嫌われ者にしようと嫌われ者には変わらないさ」

大した事でもないと言つ鈴木の姿に、本来在るべき公僕を見た氣になつた伊達だつた。

## 選択と行動2

だが、伊達が考えるより鈴木は更に辛辣な事を考えていた。それは鈴木自身に取っても……。

「まあ、私は独裁者らしいからね。その独裁者の決定なら仕方ないだろう。私の後に総理になる人には全責任を私だけに被せる様にしてもらえば禍根は私だけに向かうからね」

自虐的でも、悲観論でもなく、ただ将来を考えて自分を生け贄にしようとしていたのだ。

「ちょ、ちよつと待て！それでは名誉の回復など出来んぞ！」

慌てた様子の伊達を珍しい物を見た様な目で見ながらも鈴木は、その覚悟の下に判断している。

そう言つてのけた。

「……まあ、その時は付き合う、と言うか付き合わせろ」

伊達は鈴木の奥底にここまで深く、悲しい覚悟がある事を見誤っていた。

そう言う意味でも鈴木の判断に任せようと思った。

同日、大陸調査派遣隊基地。

先日の戦闘から今日で5日目。

今のところホードラー王国に目立った動きはない。

明確な線引きはされていないが国境と思われる（戦闘のあった丘）辺りには監視塔や簡単な陣地、そして警戒の為に一個小隊が配置されていた。

しかし、高橋たちは基地内にいた。



先の戦闘に伴う一連の行動や言動に問題があるとして取り調べを受けていたのだ。

そして、一連の行動は高橋だけの行動とされ、槍玉にあげられ拘束、査問委員会まで行われていた。

今日はその査問委員会の最終審理の日だ。

「・・・以上の事から自衛官として不適切な言動、行動があったとされます。また、明らかにこれは一方的な虐殺に等しく、厳しい処分を降すべきと判断されます」

外務省から派遣されている官僚の一人が声高く発言する。

正義感に溢れ、自身の主張に間違いはない、と言う自信の現れた態度ではあったが、高橋自身、概ね間違っていないと思えた。

「異議あり。高橋一等陸士は政府から全権委任された外務省の北野氏公認の下に行動したのであり、そこに何ら問題とすべきものはありません。ましてや、こちらの話を聞かずに仕掛けて来たのは向こうです。高橋一等陸士の責任とするには強弁がすぎると思われます」  
弁護に立った若い弁護士が真っ向から官僚と対立する。

この二人のやり取りを聞きながら高橋は好きにしてくれ、と思い始めていた。

何せ平行線をそのまま引き延ばしているに過ぎないのだ。  
いい加減うんざりしてくる。

「自衛官は自衛隊に所属し、如何なる場合においても日本国憲法、及び日本の法律に従わねばならない。全権委任などがあっても自衛官は日本の法に従わねばならない」

官僚は弁護士に法と言う盾をかざした。

ただ、法律の専門家である弁護士相手に使う物ではないのでは？  
高橋は先日 of 戦闘の時とは打ってかわって暢気にそう思った。

「これは緊急避難を適用出来る案件です。ならば法から外れても問題は無いと判断できます。また、あなたは高橋一等陸士は日本の法に従い、無抵抗で戦死すればよかったと言いますか？」

弁護士が極めてキツイ口調で反論する。

（半分挑発じゃないか？）

自分の弁護をしてくれてる弁護士に対し、心のなかで突っ込みを入れる。

「それは極論です。例えどの様な状況であれ自衛官は法に従わねばなりません。また、それが死ぬ事に繋がってもそれもまた任務であると言えます」

流石に自分で反論したい思いに駆られたものの、一応弁護士と相談して対処を決めていた高橋は自身の憤りを押さえ込んだ。

「では、高橋一等陸士のみならず、同僚及び難民にも犠牲が出るとしても、それでも無抵抗であれと言うのですか？」

ようやく官僚から反撃の機会を得た弁護士は意気揚々と用意していた対処をする。

しかし、外務省官僚も負けじと反撃していた。

「それは推測であり結果ではありません。本査問委員会は結果についてのは是非であり推測に対してのは是非ではありません」

冷静を装いながらも、僅かに動揺している様が見て取れる。

ここまで来たら高橋は両者どちらが勝つかと他人事の様に観戦する一人になっていた。

「結果だけで言うならば与えられた任務をこなし、更に難民、同僚にも犠牲者を出さなかった彼の判断を尊重し、評価すべきです」

これで詰みだ！と言わんばかりに弁護士が切り込む。

流石の官僚もたじたじになっていた。

だが、勝敗は決まらなかった。

外務省調査派遣隊責任者の北野が来たからだ。

「茶番劇もいい加減にしなさい」

冷徹な目が査問委員会に注がれる。

北野は官僚から問題とすべきだと言われ、やりたきや勝手にやれと

答えていた。

しかし、延々と引き延ばされる査問委員会に、貴重な時間をかけてる場合じゃないと考えてここに北野だ。

最も、問題とすべきだと主張する部下の能力を把握する意味でも有効ではあると思っていたのも事実だ。

「本査問委員会は私の権限により終了とします」

北野の一方的な宣言に部下の官僚は不満を露にする。

弁護士は弁護士で不完全燃焼気味だ。

「しかし！これでは政府の統制が！」

食い下がる官僚に北野は冷たくいい放った。

「君はバカか？いや、アホだな」

北野の言葉に査問委員会に沈黙が支配した。

### 選択と行動3

北野の歩き査問委員会の審議室の中を歩きながら話を切り出した。

「いいかね？現状の我々に裁判ごっこなどしてる余裕はおるか人材だつてない」

完全に場を支配した北野の部下の官僚に向き直ると鋭い眼差しを向ける。

官僚はその冷たい表情に膝が震えだしていた。

「そもそも、私は内閣総理大臣と外務大臣の両人から調査派遣における事態に対する全権委任を受けている。その私が許可し、そして認可した行動はどのような結果であれ政府の承認の下のものだ」

高橋は北野を一種の役者として見ていた。

おそらく、この機会に調査派遣隊の意思を完全に統一する気なのだろう。

その気になればそのまま独立してしまえるぐらいに。

「つまり、今回の彼の行動を認められない場合は本国より私の全権委任取消しが通達されてしかるべきだ。それがなされないのであれば許容範囲と言うことになる」

官僚は上司たる北野の主張を前に沈黙していた。

しかし、何かに気付いた様に反論を試みる。

「では、相手国の者に対してこの辺りは日本の領土と言った事はどうなりますか！？それに相手国の人を虐殺したことは！？」

これならどうだ、と官僚が勢い良くまくし立てる。

だが、それを聞いても北野は何とも思わなかった。

それどころか官僚に対する視線が更に厳しい物になった。

睨まれた官僚は、血の気をひいて小さな悲鳴を上げた。

「貴様は本当に無能だな。我々は日本が存続するための手段を求めてこの地に来たのだ。お友だち探しではない」

普段は隠れている冷徹な顔が表に現れている。

これは温室育ちの人物では立ち向かうのが困難なものだった。

伊達や酔狂で20年以上も外交畑に居たわけではない。

その差がここに現れていた。

「ここら辺は何処の国の領土でもない。日本が領有を宣言して問題があるのかね？そして、ホードラー王国とやらが日本の存続を邪魔する障害となるのなら、滅ぼすのもやぶさかではないのだよ」

公式の場では無いが日本政府の見解をはっきりと示すのはこれが初だ。

官僚はそれを聞いて、軍国主義だ、と呟いた。

「ほう？君は日本に住む全ての人に皆と仲良くして餓えて死ねと言うのだね？いや、こんな無能が部下とは情けない。荷物をまとめておきたまえ。私の部下に外交がなんたるかを理解出来ない無能は要らん」

この言葉を聞いた官僚はその場で卒倒した。

「弁護・・・では無いでしょうがありがとうございました」

伊藤と北野に調査派遣隊基地の小会議室に呼ばれた高橋は最初に感謝を表した。

とは言え、伊藤や北野が善意でやった訳ではないのは分かっている。

「まあ、気にしないで下さい。実際、優秀な人材を無意味な事に割く余裕はありませんから」

北野が人懐っこい笑顔を向けてくる。

これは油断できない。

北野は幾つもの表情を使い分けているようだ。

「取り敢えずかけてください。折り入って頼みがあります」

そう言われ高橋は断れないのを理解した上で席につく。

「頼みと言つのは他でもありません。実は保護した難民の処遇について相談したかったのです」

意外な要請に高橋は首を傾げる。

そんな事を自分に相談なんぞしなくても良いだろうに。

と思ったが、どんな裏があるのか興味を引いた。

「貴方もご存知の通り我々と彼等の間の常識はかけ離れています」

北野の話に高橋は頷けると思った。

彼等は高橋たちの時代から見ても随分と前の、以前、佐藤から聞いた中世の初期ぐらいの文明しか持たないからだ。

中世と現代の常識はほとんど180度方向が違う。

「このまま保護するよりは他所に行つて欲しいのですが、彼等は我々に保護を求めています。彼等と直接関わった軍曹の意見を聞きたいですよ」

北野の話聞きながらなるほど、と思いながら聞きなれない物を聞いた高橋は思わずおうむ返しに聞いてしまった。

「軍曹？」

高橋の疑問に伊藤が答えた。

「この度、階級の呼称を旧軍の物にしたのだ。語呂も良いしな」

笑いながら言う伊藤ではあったが、高橋には更に別の疑問があった。

「・・・だとしても私はせいぜい上等兵ですけど？」

この質問には北野が答える。

「なに、単なる昇進ですよ」

笑顔で言われたが、逆に不安感が増した様な気分になる。

「それは兎も角、どうですかね？貴方はどう思いますか？」

北野に先の話の意見を求められた高橋は少し考え込んだ。

そして、自分の主観を元にした意見ですが、と前置きしてから発言した。

「日本の保護下に居たいならそうすべきです」

打算や計算ではなく、率直に人情から高橋はそう答えた。

今まで思想などの事から辛い思いをしてきた彼等に、受け入れてくれる場所がある事を教えたいのだ。

「日本が今後も存続出来るかは、この世界に日本がどれだけ順応出来るか？ではないかと思えます。幾ら食料や資源を得ても日本が交流を持たず存続する事などあり得ません。長い目で見ればゆっくり

と衰退するだけです」

そう言った高橋だったが、正直政治の絡む話はほとんど分からない。これが正しいのか、間違いなのかさえもだ。

だが、日本が何処とも交流せず、単独で存続するのは無理があるとは思う。

交流を水の流れに例えれば国は大きな水溜まりだ。

水溜まりは単独では単なる水溜まりでいずれ蒸発して消えてしまう。しかし、これに細くともつながりが出来れば？

水溜まりがやがて池になり、湖になり海になり得る。

そして何より流れのない水は澱み濁り腐る。

今回の難民保護、いや難民を難民ではなく日本の保護下にある一市民とするなら、彼等の世界を知り交流の源に出来ると考えたのだ。

「しかし、そうすれば争う事もあり得ますよ？特に南にあるらしい国家とは特にね。交流が必要なら彼等を引き渡して話し合いで交流の道を作れると思いますが？」

高橋の話に北野が疑問をぶつけてくる。

その内容に高橋は受け入れ難いものがあつたが、北野の本心ではないと感じ続けた。

### 選択と行動3（後書き）

まだ続きますよー。



## 選択と行動 4

「いえ、先程北野さんが仰いましたよね？お互いの常識がかけ離れていると・・・」

高橋の言葉に北野が沈黙した。

その表情は先程と打って代わり真剣なものだ。

「彼等難民と常識がかけ離れていても理解はし得ます。しかし、これが国家と言う組織同士なら？無理ですね。利益や主義、また難民の話から宗教的な問題からも理解し合えませんか」

北野は目を閉じ、ただ静かに高橋の話を聞いていた。

その静かすぎる様子が不気味に感じたが今更だろう。

「ですが難民を市民とすればそこから市民同士で交流を行えます。

つまり経済の繋がりでです。そうなれば如何に主義が合わずとも利益の点では国同士で交流も可能になります。宗教に関しては・・・すみません。どうして良いかまだ解りません」

自分の学の無さが恨めしく思えた。

こんな事なら大学へ行っておけば良かったと真剣に悩んだ。

だが、北野はニヤリと笑みを浮かべた。

「・・・なるほど、頭でっかちの無能なんぞと比べるまでもありませんでしたね」

北野の真意が分からず高橋は動揺する。

「貴方ほどしっかりと考えられる物は政治家や官僚にもそうは居ませんよ。合格ですね？」

北野が伊藤に向かって言う。

伊藤は腕を組ながら頷いた。

二人の様子から高橋は自分が試された事と嵌められた事だけは理解出来た。

「我々も概ね貴方と同意見です。細かいところは違いますが許容範囲内です」

いたずらっ子の様な北野の態度に内心、頭を抱えてしまう。

「私の部下として外務省に来ませんか？貴方ならかなりやれると思いますよ？」

唐突な北野のスカウトに伊藤が異議を唱えた。

「私の部下を引き抜かないください。将来有望なんですから」

笑顔で言つてのける伊藤に北野は、残念、と言つて笑いだした。

その二人を前に高橋はかなり厄介な事をさせられる予感に捕らわれた。

むしろ予言でも決定事項でも良いぐらいだ。

「さて、良い人材を得ましたし、早速仕事の話しましょう」

机の上に資料を載せながら北野がうきうきとした表情になる。

「高橋軍曹、たった今より曹長に任官する」

伊藤はそう言つて敬礼する。

思わず条件反射で高橋は敬礼し、拝命してしまった。

「それに伴い、貴官を特別任務部隊の指揮を任せる。詳しい任務は後日になるが、取り敢えずしばらくは人員の選定及び通常訓練に重ねて指揮官らしくなつて貰う為に色々学んでもらうぞ。まあ、明日は休めるがな」

敬礼したまま高橋はとんでもない事になつた自身の不幸を呪つた。

こんな事なら査問の方がまだ良かったとも・・・。

その日から高橋は気苦労の絶えない日々を送ることになった。

#### 選択と行動4（後書き）

はい、第5話終了です。

私自身、政治とか経済に疎い上に国同士の付き合いなんか全くわかっていないのですが如何だったでしょうか？

ハッキリ言って良いのかこれ？

とか思いましたが、まあ、私もお花畑な人間と言う事にして下さいわいw

ご意見ご感想がありましたらどんどん書いてくださいね？  
批判でも要望でも構いません。

ご期待に沿えるかはわかりませんがねw

では、第6話で会いましょう。

## 共存への出発地点（前書き）

日本は保護した難民に生活のための支援を開始する。

それは難民達の想像を遥かに超えた能力を示すことになる・・・。

それが作り出すのは恐れか？

それとも・・・？

第6話「共存への出発地点」

お楽しみください。

尚、本話から投稿文字数の増減が激しくなりますw

## 共存への出発地点

日本に保護された難民たちは保護された日からずっと圧倒され続けていた。

彼等の為に自分たちの住居さえまだ出来ていないのに、1日と掛からずに自分たちの住居（プレハブ住居）を建ててしまい、更に食事も与えてくれた。

今までの自分たちには考えられない事ばかりだ。

そして、一番の驚きは火を使わない明かりだ。

彼等にジエイタイと呼ばれる軍人の一人は「デンキ」と説明してくれた。

最初はデンキが恐ろしい魔法なのかと疑ったものの、笑いながら使い方を説明してくれた軍人が実演し害が無いことを示すと物珍しさもあつて着けたり消したりを繰り返してしまった。

更に、翌日には集落となった所の真ん中に井戸を掘ってくれた。

何もかもがあつという間にやってしまう自衛隊は魔法使いの集団なのかとさえ思う。

しかし、逆に何故こんなに親切にしてくれるのか？裏があるのでは？と疑ってしまった。

今まで迫害ばかり受けてきた人々に取って同じ仲間以外から親切にして貰う事など無かったからだ。

だが、ここに来て幾つかだが理解した事もある。

自衛隊は規律正しく、そして礼儀を持って接する事が出来る極めて優れた軍隊だと。

そして数日がたった今ではこう言える。

彼等自衛隊、日本人は馬鹿がつくほどお人好しで優しく、親切な人々なのだ・・・。

でなければ自分たちさえ大変な状況でここまではできない。

そう言う意味では彼等難民たちは初めて救われ、初めて対等に付き

合ってくれる国と出会えたのだ。

そんな彼等が日本に一時的な保護ではなく、日本と言う国で生きていきたいと思うことは決して不思議ではない。

5月28日調査派遣隊基地・・・近郊

この日、高橋たちは自分たちが保護した難民の集落を訪れていた。高橋たちにとって貴重な休日ではあったが、あれ以来難民たちと接する機会がなかったのだ。

今どうしてるか？ときになり行ってみる事になった。

「高橋さん、井上さんようこそ！」

簡単な柵で囲まれた集落の入り口付近でミューリが出迎えてくれる。

「ありがとうミューリちゃん」

井上が普段の暢気さと調子の良さを発揮する。

そんな井上にミューリも笑いながら答えた。

「皆さんどうぞゆっくりしてってください」

ミューリはそう言って二人を集落に案内する。

集落では難民たちが持ち出せなかった農具などを近くの森から伐採した木材などを使って作っていた。

その様子を見た高橋は、複雑な物では無いものの、自分たちで物を作る彼等を凄いと思った。

「こちら辺は水捌けも良いし日当たりも良いので畑を作るのに絶好の場所です」

明るく言うミューリの姿は少女らしい本来在るべきの姿があった。

難民たちは種籾や苗などは少数だが何とか持ち出す事は出来たらく、それを元に作物を作る事にしたのだ。

しかし問題もある。

井戸から水を運び出すのは効率が悪い。

しかし、この辺りに川があるかも分からないのだ。

その為、家庭菜園程度の耕作面積しか維持できない。

「まあ、何とか食べて行けると思いますよ」

そうは言われたが、このままでは不味いと思ったのか、高橋は持っていた無線機を使う。

「あーこちら特別任務部隊の高橋だ」

高橋の突然の行動にミューリが何をしているのかと目を白黒させていた。

そんなミューリに井上が丁寧に説明してくれる。

「高橋は無線機と言う道具で離れた人と会話しているんだ」

それを聞いて驚く表情を見せた。

初めてあった時は魔法を使っていたのかと思ったが、井上は魔法ではない科学技術だと言うのだ。

それはつまり、資質が無い誰でも使い方を知っていれば使えると言うことになる。

「ミューリちゃんたちには魔法に見えるだろうけど、俺らはミューリちゃんの友達のシャインちゃん見たいに魔法は全く使えないからね」

事も無げに言う井上の話にミューリが真剣に頷いた。

こう言うのを見ると、日本と言う国がどれだけ並外れた存在であるかが分かると言うものだ。

「・・・では、その様に手配してください」

話終えたのか高橋がミューリに向き直る。

「一応近くに川があるから、そこから水を引くよ」

高橋はあっさり言ったが、ミューリからすれば大変な作業に思えた。

「そんな・・・川があるなら私たちが何とかしますよ?」

どうせ手が空いてるのだ。

何日かかろうと水を引く為の水路ぐらいは自分たちでやろう。  
ミューリは村人たちはきつとそう言うと思いき高橋に提案した。

だが、高橋はそんなミューリの頭を撫でながら笑った。

「なに、手が空いてる施設科連中が簡単な水路ぐらいは直ぐに作ってくれるよ」

高橋は笑っていたが、ミューリは笑えなかった。

何せ本来なら数日かかる住居の建築を数時間でやり、一週間以上はかかる井戸堀を1日でこなす彼等なら、それこそ瞬く間にやってしまうと思ったからだ。



## 共存への出発地点2

そんなミューリの眼差しに井上が苦笑いを浮かべた。

「いや、流石に今日明日じゃ出来ないから。一週間は見て貰わないと・・・」

とは言うものの、それでも早い。

川までの距離にもよるが数日で出来るなんて魔法の様だ。

だが、高橋が井上のセリフを訂正する。

「井上、そんなレベルじゃない。二、三日もかからん。施設科舐めんなよ」

最近、様々な科の事も学ばされている高橋は知ったばかりではあったものの、施設科の並外れた気合いと根性と情熱（施設科責任者談）から、奴等ならやる。と断言した。

「・・・なにその愛と勇気な物語は？」

呆れた様な井上の様子に高橋が施設科がそう言っていたと告げた。

「ええ〜い！日本の技術者魂は変態か！」

説明を聞いた井上が叫ぶ。

そんな井上を見たミューリは全力で引いていた。

「ほら、アホな事は良いから仕事だ」

高橋の言葉に井上が啞然とする。

「え？今日は休みだよ？仕事なんか無いよ？」

ふざけた調子の井上を叩きながら高橋は良い笑顔を浮かべた。

「たった今仕事が出来た。なんで休み返上で働け」

悪魔の様な話に井上はただ呆けるしかできなかった。

「施設科が来る前に村人と何処にどう水路を掘りたいのか確認する事、並びに耕作地の確認だ」

休みで暇だったとは言え、ホイホイと高橋に着いてきたのが間違이었다と井上は後悔していた。

「俺の休みはどっちだ・・・？」

井上のぼやきに答える者は居なかった。

高橋は村人（難民と呼ぶのも悪いと思った）から希望する畑の規模や水路の配置を確認している。

紙や鉛筆を使い簡単な概略図を使つての説明に、村人たちは頻りに感心していた。

高橋たちにとっては紙や鉛筆は子供のお小遣いで気軽に買える代物だが、彼等にとってでは凄まじく珍しい高級品だ。

そもそも紙は羊などの皮を使つた羊皮紙（正確には獣皮紙）で、かなり高級な代物だ。

そして鉛筆などは存在せず、墨や顔料、染料を使つた混合物のインクを羽ペンなどにのせて使う。

だから、削つただけで物が書ける鉛筆は王侯諸侯でも持つてはいない。

そんな本来の目的からずれた光景に高橋は教育が重要だと再認識した。

「取り敢えず大体は出来ましたね」

簡単ではあるが大まか水路の配置と畑の耕作面積から高橋は大規模な工事にはならないと判断した。

だが、いずれはしっかりとした工事をして面積拡大も視野に入れなければなるまい。

それは治水、つまり水害対策の観点からも必要な事だった。

「何から何まですみません」

村人の代表である長老が高橋に頭を下げた。

彼は支配者がその支配する民衆にこう言つた事業をする事などまず無かつた為、高橋たちの施しの厚さに恐縮していたのだ。

「いえ、市民に最低限の生活を保証するのは国の役目です。日本の市民になりたいと言う皆さんの申し出からすればこれぐらいは当たり前です」

信じられない話ではあったが、高橋の話聞いて長老は納得できた。日本はそうやって発展してきたのだろう。

支配者が民衆を支配して搾取するのではなく、民衆が富めば国も富むを実践してきた。

だからこうも手厚く接してくれるのだと・・・。

「まあ、流石に即完成、とは行きませんが近日中には形になると思います」

高橋の柔らかい物腰にだんだんと信頼が寄せられて行く。

狙ってやっていないのが高評価につながっている。

「それまでは取り敢えず開墾して置いてください。農業支援もそれまでに来ますから」

先日決まった調査派遣隊の規模拡大と増員に伴い、高橋は北野を通して支援体制の確立を要請していたのだ。

単に食わせる為の支援ではなく、自立して生活する為の支援は必要な事だった。

「農業支援・・・ですか？」

長老の疑問に詳しくは後日になりますが、と高橋は前置きした。

「肥料や作物の苗、種や農具の一部、そして効率の良いやり方などです」

高橋は彼等村人たちにより収穫が望めるやり方がある事を説明した。これには調査派遣隊に追従してきた専門家が協力してくれる事になっており、日本からの支援が到着しだい指導する事が決まっていた。そんな中、村人の一人が不安げな表情で高橋に聞きたい事があると声をあげた。

「税はどのくらいですか？」

その村人の言葉に誰もが騒然となる。

確かにこれだけの援助をされたら、徴収される税は半端なく高くなる。

今までの支配者とは違うとは分かっている、やはりそこは気になる事だからだ。

### 共存への出発地点3

彼等の認識からすれば普通、税は6公4民、酷いところだと7公3民以上と言う物だ。

噂では5公5民、4公6民の所もあるらしいが、極めて稀と言える。しかし高橋は税金について分かっていない。

正確には日本の様に税金（金銭的）ではなく税（作物など物質的）なのだ。

これでは税金がどうなるかはわからない。

「そうですね・・・本国でも考えられていますか・・・」

言葉を濁す高橋に不安がどんどん広がりはじめた。

このままでは亀裂を生むかも知れない。

それでも高橋は慌てなかった。

これも既に決まっていた事案だからだ。

「少なくともここ三年間は支払う必要がありませんね。また、比率も本国と税金形式が統一されてませんのではつきりとは言えませんが、3公7民かもう少し下ですね」

高橋は日本の税金制度との違いから断言を避け、やや割高の税を挙げた。

万が一、予想より高い税金なら騙されたと感じるだろう。

だからこそ実際にはそこまで行かないと分かっているながら高い税を提示したのだ。

ただし、高橋に取っての誤算は村人たちにとって3公7民は格安過ぎた事だった。

「そ、それが正しいとして・・・国は大丈夫なのですか？」

「援助に対して安すぎませんか？」

「後から根こそぎなんて無いですよね？」

余りにも自分たちの常識を超えた高橋の話に、逆に不安感を与えてしまったのだ。

「大丈夫です。そんな事態にはなりませんよ」

なったとしたら大問題で政権が吹っ飛びかねない。

村人たちの不安を日本が実践できないのを高橋は知っていた。だから落ち着いて対処できたのだ。

「税が安くても払う人が多かつたら？」

「援助は貸付ではありませんから税として回収はありません」

「根こそぎなんてやったら次から税が入りませんよ」

どの不安にも投げやりにならずに一つづつ解消していく。

そうする事で場は段々と落ち着きを取り戻して言った。

「我々が皆さんに望む事は特別な事ではありません」

高橋一人に視線が集中するのを感じながら、演説するかの様に理解を求めた。

「我々が貴殿方に求めて居ることは、一つ、一生懸命働くか？二つ、援助や支援無しでの自力生活をやれるか？三つ目、幸せに生きていくか？以上ですよ」

部屋の中は静まりかえっている。

高橋の話に半信半疑なのもあるが、日本と言う国がそこまで厚い情を持って居る事に感動していたのだ。

もともと、日本としても感謝して欲しい訳ではない。

何だかんだ言って打算と計算があつての事だ。

全てが善意や厚意な訳ではない。

彼等を利用していると言われればその通りだろう。

それでも村人たちは日本に大きな感謝をせずには居られなかった。頭を下げて礼を言われた高橋はむず痒い思いをしていたが、彼等の明るい表情を見て自分がやるべき物をはっきりと認識できた。

「作業開始！」

施設科の号令の下、施設科の人員が一斉に作業に入っていく。その中には普通科の連中や、村人たちの姿もある。

調査派遣隊の誰もが彼等との共存を願い、村人たちも調査派遣隊に全てを任せず、自分たちにも出来る事があると言う思いからだ。そこに世界や人種、思想の違いはない。

ただ共に働き、共に汗を流し、共に生きるためにやっているのだ。

本来在るべき支援とはこう言う物だ。

北野は遠くからその様子を眺めながら思った。

物や資金だけを渡して支援とは片腹痛い。

支援とは物や資金だけでなく、こうやって一緒に働き、技術を伝え、そして彼等自身の足で立つてもらう手伝いをする事なのだ。

「・・・総理はやはりただ者ではないですね」

北野は日本がある東に向いた。

今も鈴木は総理として困難な茨の道を歩んでいるだろう。

だからこそ北野はここに来たと言えた。

しかし、その北野に報告に来た部下が告げた一言は北野を苛立たせた。

だが、来るべき物が来たただだと自身に言い聞かせると調査派遣隊本部へと足を向けた。

「奴等が障害となるつもりなら、容赦なく更地になってもらう・・・」

断固たる思いを胸に北野は北野の戦場へと歩んで行った。

この日、日本国調査派遣隊にホードラー王国からの外交使節が来た。それは日本とホードラー王国の間における新たな戦いの予兆を孕んでいた。

### 共存への出発地点3（後書き）

さて、漸くココまで着ました。

ここから物語りは大きく動いていきます。

ホードラー王国の思惑は？

それに対する日本の対応は？

そして、遂に日本は抜かすの刃を・・・。

次回をお楽しみに！

## 開戦へ（前書き）

ホードラー王国より来た特使が日本に戦雲を巻き起こす。  
その要求に日本は太刀がる決断をする。

第7話「開戦へ」

お楽しみください。



## 開戦へ

5月29日、調査派遣隊本部

北野は会議室にてホードラー王国より派遣されてきた外交使節を名乗る一団と接触していた。

どんな話になるかは予想は着くが、予断は許されない。

ここで日本の立場を明確に示さねば、今後この世界における日本の立ち位置が大きく揺らぐ事になるのだ。

「ホードラー王国、国王陛下より貴公等日本に告げる」

外交使節代表バルト・カストイーア伯爵が高圧的態度で文書を読み上げる。

その様子は日本を格下と見下した意図が見えるが、北野はそんな事はどうだって良かった。

そして、彼等ホードラー王国からの要求はこうだった。

一、アルトリア領域（日本が確保した辺りはアルトリア領域と呼ばれていた）における貴国の領有を認めない。

二、貴国に逃げ込んだ異教徒の身柄を即刻引き渡す事。

三、貴国が行った王国将兵に対する殺害行為における実行犯、並びに責任者を引き渡す事

四、前述の王国将兵殺害に対し賠償金500万マティール金貨を支払う事。

五、日本は直ちに我がホードラー王国の支配を受け入れる事。

六、それに伴い、ホードラー王国より派遣される総督に従う事。

七、総督は貴国の最高責任者となり、内政、外交の決定権の保持を認める事。

八、日本はその軍事力を解体し、ホードラー王国に編入させる事。

九、日本は毎月一定額の税収をホードラー王国に納める事。

十、以上これらの要求すべてを受け入れ無ければファマティー神とホードラー王の名の下にその命を持って償わせる。

要求と言うより脅迫の類いだな。

北野はたちの悪いチンピラを見るかのような目をしていた。

「以上の要求はファマティー教大司教たるハーマン卿承認の下にある。よって貴国は速やかにこの要求に従う義務がある」

はつきりとした口調で堂々と述べた。

対する日本の回答を今か今かと待つカストイアは北野の返答に言葉を失う事になった。

「日本政府からの回答を行います。・・・どの要求も断る」  
ねじはねてからいえ

まさか拒否されると思っていなかったカストイアは顔を赤くして憤怒した。

「き、貴様等はファマティー神の意を拒絶すると言う気が！」

絶叫に近い怒鳴り声に北野は耳が痛かった。

しかし、海千山千な北野も負けじと反撃に移る。

「我が日本には信仰の自由が政府により保証されており、そちらの信仰する神様の命令を聞き入れない自由もあるんだ」

北野の衝撃的な発言にカストイアは不信心者め！と怒鳴り付けた。  
「ましてや、日本の象徴たる天皇陛下は神道の権威でもあらせられ

る。そちら風に言えば教皇なんだよ。神道は八百万神やおろすのかみが居てね、君らのファマティー神とやらもその内の一人に過ぎんだ。よって君らの神様に従わねばならない義務はない」

カストイーアは理解し難い北野の話を聞き、自分たちが信仰するファマティー神と蛮族の神を同列に扱われ憤った。

「貴様らの蛮族の神とファマティー神を同列に扱うなど不敬の極み！即刻取り消せ！」

最早交渉でもなんでもない。

北野はチンピラ以下の知能しかないカストイーアに引く気は更々なかった。

「断る。言つたはずだ。我が日本は信仰の自由を保証している。如何に神道でも特別扱いはせん」

極めて冷たくいい放つ。

宗教が絡めば冷静さを失う事があるのは元の世界の歴史を見れば良くわかる。

だが、カストイーアは自らが冷静さを失ったとは思っていない。

何故、ファマティー神の教えに歯向かうのが理解出来ないのだ。

「先の要求は我が日本に属国になれと言うことの様だが、我が国は主権ある独立国家である。何処の国にも従わねばならぬ義務はない」北野ははっきりと拒絶の意を示すと更に、逆に日本からの要求を突き付けた。

「日本は貴国、ホードラー王国に以下の要求を通告する」

一、異教徒として民間人に対する迫害、虐殺を即刻止める。

二、先の難民発生の責任を認め、難民に対する保障を行う。

三、日本との対等な国交を結ぶ準備会の設立と、それに伴い法整備を行う。

たったこれだけだった。

ホードラー王国の十ヶ条の要求に比べたらささやかな物だろう。

だが、北野は確信していた。

これらたった3つの要求のどれも認められまい、と……。

彼等は日本と言う国を知らずに要求を突きつけてきた。

だが、日本は事前に集められる情報はつぶさに集めてこの場に望んでいる。

その差がここにあるのだ。

ホードラーは比較的歴史の浅い中程度の国で、異教徒討伐で成り上がった国だ。

故に経済、文化など国力は思ったほどではない。

たがらこそうやって高圧的に相手を従わせて来たのだ。

だが、軍事力を盾にただけの外交など、北野の前では児戯にも等しかった。

軍事力を振りかざす、もしくはちらつかせるのは外交において最後の手段なんだよ土素人め。

北野の辛辣な思いとは裏腹に、カストイアは侮辱と受け取り、怒り心頭のあまり手にしていた杖を北野に投げつけた。

外交官として最悪の行動だ。

投げ付けられた杖は北野に直撃する事なく、となりに座る伊藤が受け止めた。

「特使殿、冷静になられては如何ですか？」

伊藤は手にした杖をカストイアに渡す。

カストイアはカストイアで怒りを押し殺し、目だけで圧倒的な迫力を見せる伊藤に何も言えなかった。

## 開戦へ2

「取り敢えず、交渉の余地は無さそうですね・・・では、お引き取り願いますか？」

北野はそう言つて話を切り上げた。

そこにカストイアが待て！と制止をかけたが、北野は部下たちを引き連れ退室していった。

ホードラー王国が日本に対し膝を屈しろとした要求を聞いた時点で交渉など不可能だった。

彼等は妥協する気は全くなく、ただ子供の我儘の様に振る舞うだけだ。

これでは交渉どころではない。

彼等が冷静になり、日本に対する戦争行為が無意味なものと認識出来ない以上、北野は話し合う気はなかった。

後に残されたカストイアたち外交使節と、警備の為に残った自衛隊員とでにらみ合いが起きたが、カストイアたち外交使節は大人しく国外へと退去していった。

「やれやれ、まさかこれ程無茶苦茶な要求が来るとはね」

伊藤が北野にぼやく。

結構な無茶は言つて来ると思ったが、まさか隷属せよとは・・・。

これは外交などではなく、自分たちの力を過信し、そして相手を知ろうと、理解しようとする気のない無知だと言えた。

「政府への報告、どうしますか？」

伊藤の質問に北野はその目に珍しく怒りの色を表していた。

「可能な限り大規模増員を要請します。これは最早、国同士の利益を巡る衝突、紛争ではありません」

北野はそう言つて彼等外交使節が渡してきた十ヶ条の要求を机の上に放り投げた。

「これは日本と彼等王国との存続を賭けた戦争です」

北野の言葉に伊藤は諦めにもた胸中になる。

だが、それも致し方ない。

ホードラー王国は日本を属国にする気にいる。

そんな事はさせない。

その為に自衛隊は存在するのだから。

「施設科の一部を除いて総員に召集をかける。デフコン4を発令、警戒を厳とせよ」

伊藤は司令室に電話をかけると北野に敬礼した。

「これより我が調査派遣隊は有事に備え行動します。また、増援が到着次第指揮権を引き継ぎます」

北野がこの場における実質的最高指揮権を有するため、こう言う形になったが、北野は餅は餅屋に任せる気だった。

むしろ幕引きの見えない戦争になるのは予想できる。

ならばその幕引きをするのは自分だ。

と思い、伊藤の後ろ姿を見送った。

同日、日本国内閣総理大臣官邸。

北野から即座に届いた事態の推移とホードラー王国の要求に関する報告は、鈴木を悩ませた。

だが、それでもまだ想定範囲内だ。

「向こうさんはやる気だな」

伊達の言葉に橋波があわてていた。

「落ち着いている場合ですか？戦争ですよ!？」

慌てても仕方あるまいに・・・と橋波の様子を見ながら阿部は考えた。

「だから全権委任なんてしたくなかったんです!」

今更ながらに主張する橋波を横目に伊庭は取れる手段を考案してい

た。

その伊庭のとなりでは橋波が鈴木に責任の追及をしていた。

「総理！あなたがこんな事態を招いたんですよ！どうするのですか！」

全権委任をした以上、橋波も責任を免れまいに……。

伊庭はもうこの人には何も期待出来んな。

と思った。

「責任云々以前に、奴等が日本に突き付けた要求を読んだのか？」

伊達が睨み付けると橋波は読みましたよ！と怒鳴る。

「難民なんか保護するからです！」

橋波の心無いセリフに遂に伊達が怒りを露にした。

「ふざけるな！難民を見殺しにしろとでも言う気か！」

激しい怒声に橋波の身がすくむ。

それだけの威圧感があつた。

「例え難民を見殺しにしても、遠からず我々の存在に気付くだろう。

そして同じように隷属を要求してくるのは目に見えていたさ」

落ち着いた鈴木 of 言葉に伊達は怒りを押さえた。

「早いか遅いかの違いでしかありませんからね」

伊庭が鈴木に同調する。

それが今更戦争だから何だと言うのだ。

戦争回避の為に日本を日干しにするつもりなのか、と問い正したくなる。

「それと発表だが、国民にはありのままをつたえよう。恐らくそれが一番いい」

鈴木はそう言つて椅子にもたれかかった。

伊達はそんな鈴木 of 判断に対し、それしかあるまい、と考えていた。  
「ついでに橋波、君はしばらく休め……これ以上は精神的に持つまい」

更迭宣言を受け橋波は項垂れた。

平時における外交手腕は決して悪くなかった。

だが、こう言った難しい局面に耐えられるだけの許容力が橋波に無かったのだ。

鈴木は最後にすまん、とだけ言った。



### 開戦へ3

「そうか、我らの慈悲を拒否したか・・・」

ホードラー王国、国王であるフリーエ・ホードラー四世はただそう言った。

カストイーアは自身の力無さを詫びるため頭を垂れている。

「まあ良い、我が王国の力を見せてやろうではないか」

王の言葉に玉座の間にいる騎士たちが雄叫びをあげる。

如何に騎兵300が葬った力を持つと、ファマティー神の加護ありし王国軍を前にしては人たまりもあるまい。

そう思うとフリーエ王は立ち上がり宣言した。

「兵を集めよ！諸侯に召集をかけよ！神と王国の力を蛮夷どもに見せ付けてやろうぞ！」

王の宣言に將軍が我も我もと先陣を願い出る。

その前にハーマン大司教が歩み出てきた。

「陛下、我がファマティー教も僅かながらではありますがお手伝いさせて頂きます」

ハーマンはそう言つと、教団より届いた書状を手渡す。

その内容を読み終えたフリーエ王は明るい顔を上げた。

「おお！ファマティー教より聖堂騎士を派遣してくださると！？」  
フリーエ王の言葉に勝利が決まったかの様な歓声が挙がる。

「この戦は聖戦に認定されるのですか！？」

將軍の一人がハーマンに詰め寄る。

ハーマンはそれに頷き、ファマティー神の御心です。  
と祈りを捧げる。

感極まった様に玉座の間は熱気に包まれた。

そして国内に早馬が駆け巡る。

異教徒を庇いし悪魔の国、日本を討つ！

と言う檄文がホードラー王国内を駆け巡っていった。

戦争の機運が高まり、国外よりも傭兵が集まるのにそうは時間はいからなかった。

一方の日本はというと、戦争になると言う鈴木 の発表に騒然となるも、突き付けられた要求に国民の多くが憤りを見せた。

しかも、その様子を撮った映像が公開されるとホー ドラー王国に対する怒りが多くを占めた。

本来ならば他人事の様に海の向こう側の事と無関心であ ったかもしれない。

しかし、転移して不安ばかりの中でも政府は国民生活を守るための努力を続けていたのは国民の知る所となっていた。

それでも一部野党やマスコミはこぞって反戦運動を展開したものの、目立った効果が無いまま自衛隊の大規模導入が決定した。

限りある資源の問題から、言うほどの数ではないが、一個師団、一個旅団に匹敵する動員は戦後日本に取って初めての事だった。

日本は決断した。

抜かずにいた刃を抜くと言う決断を・・・。

それは戦後、眠っていた日本の魂を呼び覚ます事になった時と言われた。

### 開戦へ3（後書き）

はい、これで第7話終了です。

ちよつと無理矢理な展開だった気がします。

もうちよつとのんびりやっても良かったかな・・・とw

なにはともあれ皆さんお疲れ様です。

私も2話続けて書いてちよつと疲れましたw

では、第8話でお会いしましょう。

## 圧倒（前書き）

さて、8話目になります。

ついに衝突する日本とホードラー王国。

数で勝る王国軍は、自衛隊を打ち破らんと挑んでゆく……。

今回の第8話、ちょっと長くなります。

では第8話「圧倒」お楽しみください。

## 圧倒

6月5日アルトリア領域ホードラー王国国境付近。

高橋たち特別任務部隊、総勢30名が早期警戒部隊として派遣されていた。

ここは初めてホードラー王国の騎兵と戦ったところだ。

「またここに来ちまったな」

ちよつとした要塞の様になった丘を懐かしそうに眺めた。

本の二週間ばかり前に来たばかりだったはずなのに、ずいぶんと訪れていない様な気分になる。

それだけ今までか充実していたと言う事だろう。

だが、高橋たちはまたここに立っている。

それもホードラー王国からの攻撃を食い止めるために・・・。

ホードラー王国との交渉決裂（交渉ですら無かったが）により、いつ軍勢が押し寄せて来るか分からない。

その為にここには特別任務部隊以外にも多数の部隊が展開していた。丘の後ろには特化大隊が展開し、丘の稜線沿いには89式装甲戦闘車四両、丘の中腹には高橋たち特別任務部隊の他に三個普通科大隊が配置についている。

更に平地にはクレイモア対人地雷が設置されている。

流石に戦車は燃料の問題から来てはいないが、この戦い如何によつては今後の行動はますます難しくなるだろう。

それでもやらない訳には行かない。

ここでホードラー王国軍を壊滅状態にしなければならぬからだ。

「奴等・・・来ないな？」

M24狙撃銃を手に井上が愚痴る。

いつまでも来るのを待つくらいなら此方から攻めた方が有利なのだが、あくまでも先制攻撃は向こうにさせなくては国内の反対派がう

るさいのだ。

下らない形式だとは思うが、一度でも攻撃を受ければ逆撃し逆に敵地に取り込める。

「油断するなよ。奴等も軍勢は揃えているはずだ」

高橋はそう言って双眼鏡を片手に森を眺める。

さすがに森の中を見通せる物でも無いのだが、何となく何かしてないと不安なのだ。

「しかし、特別任務部隊と言ってもやることは普通科と同じですね  
分隊支援火器M I N I N Iを拭きながら佐藤は不満げだった。  
もつと別の任務になると思っていたのだ。

「そりゃあ仕方ないさ。本格的に稼働する前だったんだから」  
そう良いながら特別任務部隊の任務について思い返していた。  
与えられる任務は司令部よりから直接与えられる。

つまり司令部直轄の実働部隊なのだ。

多分、一番厳しい状態の所に送られるんだな。  
と諦めた気持ちになっていた。

「その代わり優先的に補給を受けれるんだから感謝しよう・・・」  
微妙な顔になっていたが高橋はそう言っ自分をも誤魔化した。

「そうだな、おかげさまでまともな狙撃銃が支給されたし」

井上は陽気に支給されたM 2 4のスコープを覗いた。

その時、各所に配置された無線のスピーカーが敵の襲来を告げる。

「センサーが多数の移動物を探知、総員配置に着け」

後方の指揮所からの報告に全員が塹壕に入り込む。

「安全装置解除、井上たちは後ろから指揮官を見付け次第優先的に  
排除、佐藤たちは敵の突出に備えろ」

高橋の指示にそれぞれが素早く移動する。

高橋たちのいる敵正面はもつとも激しい攻撃さらされるだろう。

だが、相手を攻撃可能範囲まで入れるつもりはない。

此方は持てる火力で相手を粉砕する。

高橋はそう思いながらも、本当は戦いたくない思いに駆られていた。

前方に目的の丘が見えてきた。

以前、今は無きアンストン卿が初めて日本と接触した地だ。

その敵を今こそ討たん。

ホードラー王国先陣4000を率いるラーク・カドミック子爵は決意していた。

「どうやら奴等は既に布陣していたようです」

配下の報告にラークは丘を見る。

なるほど、総勢800程度の兵が見えた。

実際にはまだ居たのだが、塹壕に隠れていて見えていないのだ。

「ふむ、数が少ない様だが・・・伏兵か？」

ラークは慎重に辺りを確認するが、伏兵らしきものが居るとは思えない。

「周辺を偵察しましたが、特にそう言った物は確認出来ません」  
言われてラークは少し警戒した。

アンストンは隠れていた兵により討たれたと聞いていたからだ。

「よし、先ずは一度当たって様子を見るか」

ラークは自分の判断を即座に実行させた。

様子を見るために動かされたのは1000名程の民兵と、1500

名程の傭兵部隊だ。

「弓兵は如何しますか？」

配下の話にラークは頭を横にふった。

800程の弓兵の弓では射程が短く届かない。

「ここで使うよりは後で使おう。先ずは小手調べだ」

そう言うのと右手を行け、とばかりに振る。

それを見た各部隊の隊長がラッパを吹かせた。

辺りにラッパの音色が響き渡り、その音色を合図に民兵が槍を構え前に歩き出した。

「横陣か・・・中世ヨーロッパみたいだな」

高橋はホードラー王国軍の動きを見て以前の騎兵の突撃よりはマシだと思った。

「まだ撃つなよ・・・」

その指示は高橋自身にも向けられていた。

この距離でも当たるが、相手にそれを悟らせない為だ。

と、突然民兵の一角で爆発が起きた。

どうやらクレイモア対人地雷に引っかけた様だ。

爆発のあった箇所では大半が死傷していた。

彼らの戦い方の常識がどうなのかは分からないが、密集していたのが仇になっている。

爆発に民兵や傭兵に動揺が走るが、後退指示はなかった。

そして今度は盾を構えて注意深く接近を再開する。

だが、今度は二発のクレイモアが起爆され、更に多数の死傷をだす。



## 圧倒 2

その光景にどんな魔法を使っているのか、と思ったラークは後退の合図を出させた。

「どうも、相手の動きが分からない。今のは何だ？」

ラークは腹心の魔術師に尋ねたが、肝心の魔術師にもあんな魔法は知らないと言われ頭を悩ませた。

「一発の魔法で2、30人は吹き飛んだぞ」

ラークの言葉に魔術師が唸る。

日本の魔術師の姿が見えない事から立て籠る陣地からだと思うが、何分距離がありすぎる。

「射程の長い魔法でも25ファナ（1ファナは約2m）程度です。

それ以上となりますと儀式魔法クラスでないと・・・それでもあの威力は・・・」

魔術師が自らの知識では正体不明と伝えた。

その答えにラークが唸った。

「どうやらあの国は我々の想像力を越えた何かがある様だな」

冷静に場を分析したラークは、本体到着まで動くのは危険と判断し、全軍に防御体勢を取らせた。

ホードラー王国軍の慎重な動きに陸上自衛隊のホードラー方面派遣隊指揮官、森光輝大佐は舌打ちした。

「もうちよつと踏み込んで来ると思ったが・・・中々に慎重だな」

後方の指揮所に届いた報告から、どうも先の戦闘から多少なりとも学んだのではないかと危惧せざる得ない。

と危惧せざる得ない。

「相手が慎重だと此方から踏み込むのは危険かな？」

先任の指揮官だった伊藤に尋ねた。

しかし、伊藤は積極的な攻勢もありだと思っていた。

「一応、相手から踏み込んできた以上は先制攻撃を受けたと解釈されます。なのでここは先に仕掛けては如何でしょうか？」

ホードラー王国の出方を見定める事にも繋がる、と伊藤は主張した。「つまりは威力偵察か・・・ふむ」

森は腕を組みながら唸る。

如何に有能な人物でも初めての実戦なのだ。どうしても消極的になってしまう。

「やるにしても規模は？一応、数だけなら向こうの方が上だぞ？」

森は犠牲を並べく出したく無かったのもある。

勿論、誰でも犠牲は無い方がいいのだが、あまりにも初戦から圧倒的にやりすぎると後々国内がうるさいのでは？

森の危惧はそこにあつた。

「まあ、取り敢えず相手も初戦なので様子見でしょう。なら、下手に手の内を晒す必要もありますまい」

かきのひさし  
柿野久司中佐が助言した。

柿野としては戦術の基本である各個撃破をすべきだとは思ったが、今回に限りは集結した王国軍を正面から撃破し、王国軍の戦意を砕く事を考えていた。

ホードラー王国が頼みとする軍事力が日本に通じず、一方的に壊滅させれば今度がやり易くなる。

柿野の考えた対王国戦術はそれだった。

「うん、取り敢えずはその線でいこう」

相手の出方を見る意味でも森は柿野の意見を取り入れた。

森は正直怖かったのだ。

この世界の軍が中世レベルなのは分かっていたが、それは自分たちがいた元の世界での話だ。

もしかしたら想像も付かない戦力があるかも知れないからだ。

だから森は積極的になる気は無かった。

その頃、前線では互いににらみ合いを続けていた。

はつきり言って、自衛隊側はこの距離（約300m）でも普通に交戦出来たが、ここで目に見える敵性戦力を叩いてもあまり意味がない。

下手に森に逃げ込まれるよりは、狭い平地に誘い出したいのだ。

「暇だな」

井上がぼそりと呟く。

隣では狙撃手となった井上の専属観測員が缶飯を開けていた。

「井上さん、暇な方が良くないですか？」

観測員は缶飯に食い付きながら井上の普段の行動からそう言った。

「バツカ、俺は暇だと死んじゃうんだ」

笑いながら井上は観測員が広げていたレーションをつまむ。

「ま、しばらくはにらみ合いだ。楽させて貰おうや」

ホードラー王国軍側からも炊事の為の煙が出始めたのが見えた。

どうやら今日は何も無い。

やるとしたら夜だろうと井上は思った。

さて、夜間戦闘は此方の得意分野になるぞ？

相手に見える訳ではないが、井上は挑発な眼差しをホードラー王国軍に向けていた。

### 圧倒3

ホードラー王国軍先鋒を任されておきながらラークは目立った戦果も無いことを部下から突き上げられていた。

親が貴族と言っただけで粹がる子供の相手などしてられないラークは、ひたすら聞き流すだけにしていた。

「ラーク騎将！夜襲を仕掛ければ勝てます！」

若い騎士が血気にはやった目でラークに詰め寄るが、ラークは相手にしない。

その代わり部下の魔術師が答えていた。

「夜襲をするにしても、隠れる所など無いぞ？夜陰に紛れたから夜陰になる様なものではない」

夜襲は相手も警戒していると魔術師は主張したが、若い騎士たちは、蛮族にそんな知能はない！と言っただけで聞き入れない。

その様子にラークはいよいよ我慢が限界に近付いていた。

「ラーク騎将！やるべきです！偉大なるファマティー神が我等の信仰心を試しておられるのです！」

神の名を盾に主張する若い騎士をラークは睨み付けた。

はつきり言っただけでラーク自身は神がどうのこうのなどどうでもよかったのだから、神の名を出されて何もしなければ異端者扱いされかねない。

何せ今回はファマティー教から聖戦認定された戦争だからだ。

しかし、だからといって無駄に消耗させる訳には行かない。

「よからう、やってみるがよい」

ラークの言葉に若い騎士たちは喜び勇んだ。

「ありがとうございます！」

若い騎士はそう言い、取り巻き連中も自分たちの意見が通じて浮かれていた。

が、ラークはそこまで甘くない。

「ただし！気取られるといかん。君らの部隊だけだ」

ラークの通達に数が足りなくなり、今度は一斉に不満を言い出す。

コロコロ変わる態度に疲れながらラークはそれ以上は認めなかった。

「大勢で奇襲なんて無理だ。攻撃も一撃離脱に努めよ」

有無を言わさぬ迫力に若い騎士たちは押し黙ったが、その目には不信感が宿っていた。

もつとも、そんな事は知ったことではない。と言った風に背中を向けたラークを恨めしい目で見ながら彼等は天幕を出ていった。

「よろしいのですか？」

配下の魔術師がラークの意思を確認する。

そのラークは、せいぜい痛い目を見れば身の程がわかると言うものだ。

と冷たく突き放した。

「あの臆病者め、俺らで戦功を挙げて目にもの見せてやる」

若い騎士たちは口々に不満を口にし、ラークの消極的態度を批判した。

結局、若い騎士たち率いる500の兵が夜陰に紛れて自衛隊の陣地へと密かに動き出した。

しかし、その動きは自衛隊に筒抜けだった。

どんなに注意して隠密行動を取ろうと、事前に設置されていたセンサーや暗視装置で警戒されていれば丸見えも良いところだ。

しかも、狭い平地にはクレイモア対人地雷がまだまだ残っている。

森はその様子をカメラで見ながら飛んで火に入る夏の虫だな、と言った。

即座に戦闘配置が連絡され、全員が攻撃体勢に入る。

高橋は暗視ゴーグルを着けて銃を構えた。

「まだ撃つなよ。引き金に指はかけるな」

静かに指示を出し、ホードラー王国軍部隊の動きを見る。

約500人程の歩兵を中心とした部隊が平地の草地を慎重に進んで

来ていた。

しかし、そこはクレイモア対人地雷が大量に配置されている。

中には遠隔起爆形式でタイミングを見計らって起爆できるものも混ぜられていた。

そして、遂に引つ掛かった者が出る。

炸裂音と共に悲鳴がこだました。

死ねた者はまだいいだろう。

だが、中途半端に怪我をした者は長く苦しみながら息絶えて行かねばならない。

「くっ！またあの魔法か！？」

クレイモアが存在など知るよしもない騎士たちは魔法の餌食にならない様に身を伏せた。

しかし、魔法ではないので身を伏せたから大丈夫と言うものでもない。

暗視ゴーグルを着けた井上は、同じように狙撃任務を負った少数と同じように射撃許可のもと正確に騎士や兵士を撃ち抜いて行く。

最早一方的な殺戮の様相だ。

## 圧倒4

隠れる場所もない平地で我先に逃げようとする王国軍兵士は、容赦なくクレイモアと狙撃の餌食となっていく。

特に騎兵などは良いだった。

他より目立つ分、狙いやすく撃ちやすい。

指揮官を重点的に狙っていたが、流石に完全な見極めなどできない為、誤認された不運な騎兵が狙撃で馬上より叩き落とされていく。最早夜襲どころではなくなった王国軍部隊は散り散りに逃げ惑うしなくなっていた。

結局、王国軍は戦果を挙げるところか、ただ損害を増やただけで終わった。

その報告を受けたラークは損害の多さに絶句していた。

主だった面々は軒並み討ち取られ、500の兵も陣に戻って来たのは僅かに80名程だ。

実際の損害はそこまでないとしても、初日だけで4000の戦力の1割が失われたのだ。

「・・・奴等は悪魔なんて生易しい物じゃないぞ」

ラークは口を重々しく開いた。

余りにも常軌を逸した損害に目が眩む思いだった。

「日本と戦争したのは間違いだったかもしれないな」

自分の配下しかいないのもあつて憚る事なく言う。

勿論、異を唱える者はいない。

誰もが同じことを考えていたからだ。

これは・・・王国は自らの滅びを選択したのかも知れない。

ラークの中に芽生えた日本に対する恐怖心は、ラークに予感めいた

物を感じさせた。

翌早朝。

まだ日も出ていない時間帯でありながら森の中に動くものがあつた。王国軍が来る前に森の中に潜伏したレンジャー部隊だ。

彼等は無言で森の各地に掘られた蛸壺陣地から這い出ると素早くホードラー王国軍の陣地に近付いていった。

あまり接近しすぎて発見される愚は犯さず、ただ所定の位置に着くと素早くL16 81mm迫撃砲を組み立てた。

このL16はイギリスで開発された物を日本がライセンス生産していた物だ。世界各国に採用されるほどで、何よりも81mmクラスでありながら36.6?と言う圧倒的な軽量さがある。

日本の64式81mm迫撃砲が52?ある事からもその軽量さは断トツである。

その軽量さを生かしてレンジャーは敵地にありながら逆奇襲のためにL16を持ち込んでいた。

あつと言う間に組み立てられたL16は、事前に行われた調査を元に射角を調整し射撃体勢に入る。

無言で81mm迫撃砲弾を数発撃ち込んだレンジャーは組み立てた時と同じ様に解体して森の奥へと姿を消していった。

その頃、まだ眠りに付いていたラークは激しい爆発と振動に慌てて剣を持ち天幕を飛び出した。

何度か起きた爆発により辺りは血と肉片と死にきれなかった負傷者のうめき声や悲鳴が支配していた。

無事だった兵士が負傷者を救助に向かうが、中には兵士が眠る大型の天幕を吹き飛ばした物もあり、その被害は相当なものになっていた。



## 圧倒5

暫くして損害の調査結果が来る。

しかし、ラークは見る気にもならなかった。

たった数回の爆発で100人以上が死傷し、すでに士気は崩壊寸前だった。

たった1日で戦力の大半が使い物にならなくなった上に、圧倒的な力の差を見せられたのだ。

これがアンストンを葬った者たちの力が・・・。

頼杖をつきながら悪魔以上の存在と真つ向からやり合う羽目になった自身の不運を呪いたい気持ちだった。

「・・・一応、確認しておきたいが・・・」

重々しい空気の中、ラークは集まった将を前にして重い口を開いた。「この期に及んで彼等日本が弱小な蛮族と侮る者は居るまいな？」

聖職者たるハーマンが聞いたら異端審問会にかけられかねい発言だったが、誰もが日本の力を目の当たりにし意気消沈していた。

これで勝てるなら神に生け贄として捧げられてもいい。

そうとさえ思えるのだ。

「我々は本隊到着まで現状を維持する。また、日本の奇襲に備え警戒を厳重にせよ」

ラークは自分たちの部隊が如何に奮闘しようと日本の自衛隊の陣地には入り込む事が出来ないと判断した。

よしんば入り込めても、間違いなくあの見えない攻撃を前に殲滅される。

そう考えた時、ラークは敵とするより味方とする方法は無いかと考えていた。

それは暗闇の中に一縷の光を見つける様な物だが、それでも探してみたいと思った。

## 圧倒5（後書き）

第8話終了です。

如何だったでしょうか？

正直、ちよつと不完全燃焼気味な感がありますが、最初からアフターバーナー全開にはできませんのでこんなので勘弁してくださいw

単に私の文章力が拙いだけとは思いますが・・・w

では、こちら辺で今回はお別れします。

次回もよろしく願います。

追伸：ご意見ご感想お待ちしております。

## 思惑（前書き）

第9話です。

早いのか遅いのか・・・w

まあ、何はともあれお楽しみください。

## 思惑

アルトリア領域南部での戦いは以外な事に膠着状態に陥っていた。圧倒的な戦力を持ちながらも、一度の戦いでホードラー王国軍主力を完膚なきまでに叩きたかった日本。

そして本隊を待ち、その本隊到着を待つて攻勢に出ようとするホードラー王国軍。

両者の奇妙な膠着状態は3日続いた。

その間も自衛隊は毎度毎度嫌がらせ的ゲリラ戦術でもってホードラー王国軍を翻弄していた。

だが、自衛隊側も苦しい状況だった。

どんなに圧倒的戦力を持つと武器弾薬には限りがある。

日本本国より補給は来るが、海という存在が補給を難しくしていた。何より、海に隣した調査派遣隊基地には未だに港湾設備がなく、荷の上げ下ろしに一苦労なのだ。

そのため、3日間の間は日本は補給、ホードラーは本隊を待つ為に互いに陣に引きこもっていた。

「ホードラーの本隊が到着する模様です」

森に潜伏するレンジャー部隊からの連絡に指揮所の空気が引き締まる。

これから始まる戦いの凄惨さを想像したのだ。

「やつと来たか。機動力が悪いのだな」

現代戦術から考えれば先鋒軍の展開もそうだが、戦力の展開が想像よりも遅くなる。

「それは仕方ないでしょう。基本的に軍のあり方が我々とは異なるのですから」

森の言葉に柿野が答える

「我々は緊急展開を常に準備してきましたが、彼等は開戦が決まっ

た時に兵と物資を集めます。そして移動は基本的に徒歩ですから」  
戦国時代の戦術、戦略をつぶさに研究してきた柿野ならではの答えだ。

この答えはその場の全員に自分たちは反則している気持ちになった。何せ此方はある程度ではあるがホードラー王国軍の動きが予測できる上に、中世レベルの戦力を相手にするのだ。

現代知識や装備を持った自分たち自衛隊はオーバースペックどころか、最早、反則<sup>チート</sup>ではないか？と思えるのだ。

「さて、取り敢えずホードラーの主力が合流した様ですが、一気に踏み潰しますか？」

柿野の提案に森が首を横に振った。

「何があるか分からない以上は無駄に弾薬の消耗はすべきではない。万全の体勢を取るためにも補給を待ってからやりたいな」

慎重になり過ぎれば臆病者呼ばわりされかねないが、展開する自衛隊員を預かる森は慎重に慎重を期したかった。

森の言葉に伊藤は即時攻撃で相手を付け上げる隙を与えずに戦意を挫いた方が良いと思った。

が、やはり森の判断を尊重した。

伊藤は勇猛ではないがやるべき時は徹底的に、が持論だ。

されど今回ばかりは慎重の方が良いと考えた。

何せ先日、保護した村人のなかにいた若者が食料を運ぶ手伝いをしてくれたのだが、その中のシャインと言う少女が魔法の存在を教えてくれたからだ。

呪文の詠唱で何も無いところに炎を産み出したりするその力を前に自衛隊の幹部のみならず、魔法がおとぎ話でしか存在しないと思っていた日本人は驚愕していたからだ。

この時ばかりはシャインは自衛隊でも知らない、もしくは使えない力があると知り得意になっていた。

そのシャインから魔法を使える人は素質の問題から極めて少ないが、国がそれなりの数を抱えていると言った。

射程はそれほど長くない様だが威力は侮れなく、この情報により下手な接近は無用な犠牲を強いると判断されたのだ。

また、中には治療の力もあるらしいので、万が一にも発見した場合は本人の意思にもよるが積極的に確保したいと思っていた。

## 思惑2

その頃、ホードラー王国本陣では慌ただしく攻撃準備を行っていた。全軍の指揮を取る事になったレオル・ヴァスター公爵は陣中に集まった将たちを前に軍議を開いていた。

軍議は意外にも難航し、幾つかの方法を巡って紛糾していた。

これは、ラークより報告された「見えない攻撃」と「予兆なしの爆発」と言う未知の魔法が問題視されたからだ。

「正面攻撃で十分」とするハーマンたち教会派と「迂回し側面を突く」とするアトレー將軍派、そして少数だが「情報を集め慎重に行動すべき」とするラークら先鋒派が争っていたのだ。

初戦から痛い思いをしたラークらは経験からまともにやりあつては勝てない、と学んだものたちの意見が最初は重要視されていたが、ハーマンが「異教徒相手に背を向けてはならない」と言う主張から徐々にラークらの意見は押され、やるからには弱い側面を突くべきだとアトレー將軍が主張した事により方針が定まらなくなったのだ。「公爵閣下、奴等が如何に強力な魔法を使ったとしても所詮は異教徒。神の加護受けし我々が破れる道理はありません」

ハーマンは神の加護を強調して主張するが、それにアトレーが異を唱えた。

「破れる事は無くとも犠牲が増える。見たところ側面にはそれほど戦力はいない。ここは少数でも側面に廻すのが戦術と言うものだ」

アトレーは歴戦の將軍で、数々の戦場を渡り歩いた経験から、力押しが駄目な時は策を用いる事を知っている。

しかし、ハーマンはアトレーの主張を一笑に伏した。

「神の信徒が異教徒相手に小細工を弄するなどあつてはなりません。私は教会から派遣された従軍司教です。言わば教会の代理人です。その私の言葉を聞けませんか？」

自らに軍事的才能が無いにも関わらず、自らの存在をアピールする



ためにハーマンは教会を傘に主張した。

流石にこれは集まった將軍や將を無視する物になる。

だが、ハーマンは自分の主張こそが正しいと信じて止まなかった。

「・・・ハーマン大司教、お気持ちには分かりますが無為に將兵に犠牲を強いる訳には・・・」

遠慮がちにヴァスターがハーマンに進言する。

これではどちらが総大将なのか分からなくなる。

しかし、それでも気が収まらないハーマンは誰も異を言わなくなる切り札を口にした。

「私の言葉が聞き入れて頂けないのであれば聖堂騎士を引き上げて聖戦認定を取り下げねばなりません」

この一言にヴァスターは青くなつた。

聖戦認定がされればその戦争は正当な戦いとなり、得たものは全て正当な戦利品になる。

しかし、聖戦認定が無ければその戦争は不当な戦いになり、得たものは終わり次第返却せねばならない。

しかも認定無き戦争を行った場合、異端認定されたり、破門されたりしてしまう。

そうなると周辺の国々が例え同盟、婚姻関係にあつても敵となつて攻め寄せてくる様になるのだ。

そうやってこの大陸ではファマティー教が平和を保ってきたのだ。

ある意味、権限のみで平和を保ってきた事は、その実績から国連よりも高い水準にあると言える。

しかし、反面として異教、異端認定された側からすれば奴隷より酷い扱いとなり地獄の様なものだった。

しかし、そうやって大きな争いをコントロールして押さえる事によりこの世界のこの大陸は比較的平和が持続していたとも言える。

ある意味で、この世界に日本が転移してきた事により保たれていた平和を壊してしまったとも言える。

だが日本に責任はない。

日本とて転移したくてした訳でも、この世界を選んで転移した訳でも無いからだ。

とは言え、教会の持つ役割が大きく影響を与えるこの世界において、その教会から支援を打ち切るとなればホードラー王国その物に与える影響は計り知れない。

### 思惑3

しばらく揉めた軍議ではあったが、ハーマンの説得きようはくによりハーマンの主張する正面攻撃が決定された。  
内心、不満や怒りが沸き上がっては来るが従わぬ訳には行かない。

『神の威を借る小人め』

誰もがそう侮蔑の視線を向けていた。

しかし、ラークは自分の部隊の再編が済むまで戦力にならない事を理由に参加を免除された。

これにはハーマンも認めない訳には行かなかった。

何故ならば主力の本隊到着までに自衛隊の嫌がらせ攻撃に晒されたため、半数近くが負傷や戦死で戦力がボロボロだったのだ。

これでは足手まといにしかならない。

そしてラークはこの機会に何とか日本と接触出来ない物かとあの手この手で動く事になっていた。

正午前、自衛隊ではホードラー王国の慌ただしい動きに攻撃があると推測し、早めに食事などを取らせ迎撃準備を終えて配置に着いていた。

そこに第一報が入る。

「調査派遣隊基地より入電。油田と思われる場所を発見!？」

突如入った情報に指揮所が騒がしくなる。

それが事実なら今後の補給も望める事になる。

そうなればここで大量に燃料を消耗しても何度でもなる。

雰囲気が一気に明るくなり、騒がしさは歓喜になっていく。

だが、そこに一喝が入った。

「浮かれるな馬鹿者!」

森の怒声に指揮所が沈黙に包まれる。

「まだ油田と正確に決まった訳でもなし、例え確定でも採掘が始まるのはまだ先だ！」

浮かれてしまった一部の者が恥ずかしさのために下を向く。

それだけ石油資源の確保は渴望されていたのだ。

「そうですね。それに自衛隊よりも先に民生を優先せねばなりません。なのでまだしばらくは節約に勤しまねばなりませんまい」

伊藤も同調し、柿野も同意見だった。

しかし、これが確定情報なら日本に明るい兆<sup>きざし</sup>が見えた事になる。それはこの世界で初めて見た光明だ。

「諸君、現状では詳しい調査も試掘も難しい。ならばどちらにせよホードラー軍を一気に撃破し調査、試掘を進める手助けをすべきではある」

森はそう言って一同を見回した。

「賛成です。彼等の主力も到着してますので良い機会かと・・・」

柿野はそう言うのと陸揚げ中の増援を一部投入することを進言した。

それは多目的ヘリコプター「イロコイ」だ。

「ヘリボーンで後方を遮断、潜伏するレンジャーと共同で補給路を封鎖しよう」

柿野は後方を遮断された時の心理的效果を狙ったのだ。

「ヘリボーンの場合、武装の面で厳しくはなりますが、幸いにも負傷者輸送用に確保していた輸送ヘリが二機あります。一機に補給物資を積んで行けばホードラーが補給路確保に動いても持ちこたえられます」

伊藤が補足する様に告げると森は満足そうに頷いた。

「それで行こう。燃料の心配は相変わらずだが、相手の主力を叩き切ればしばらくは時間を稼げる」

作戦はこれで決まった。

後は相手が動くのにあわせて此方も動けばいい。

森はそう判断すると即座に行動を開始させた。

ホードラー王国軍の補給路などには現地に詳しい者の協力は不可欠

だが、幸いにして協力者は即座に現れた。

そのために自衛隊は十分にホードラー王国軍の攻勢に遅れをとらずに即座の反撃を開始できた。

そう、ホードラー王国軍はその日の内に攻撃を開始したのだ。

大半の兵士は楽な戦いになると飲んでかかって・・・。

### 思惑3（後書き）

第9話終了。

ちよつとトラブルから書き込みが短くなりましたが・・・申し訳ないといしかいえません。

ですが今後も何とかやっていきますのでご支援をお待ちしています。

## 作戦開始（前書き）

ついに決戦の火蓋が落とされる。

しかし日本は既に2手3手先を見ていた・・・。

そして、日本は遂に・・・。

第10話「作戦開始」お楽しみいただけると幸いです。

## 作戦開始

ホードラー王国軍は総勢3万を駆り自衛隊の丘を目指した。

途中、狭い平地でクレイモアが炸裂し将兵を吹き飛ばしたが、あまりにも多くの兵士が殺到してくるためその勢いもあり心理的效果は一部分にとどまってしまう。

だが、自衛隊もクレイモアだけで撃退出来るとは元から思っていなかった上に、この機会にホードラー王国軍を壊滅させようと図っていた。

「撃ち方始め！遠慮は要らん！ありったけ撃ってやれ！」

伊藤が丘の上に設置した砲撃観測所より指示を飛ばす。

脇に控えていた64式81mm迫撃砲から次々に撃ち出された迫撃砲弾が殺到するホードラー王国軍に降り注ぎ吹き飛ばして行く。

更に接近を阻む様に各塹壕にこもりし自衛隊員が手にした89式小銃やM16、更には後方に配置した155mm榴弾砲がホードラー王国軍を逃がさぬようにその退路に容赦の無い砲撃を行った。

開始から一時間経たずに接近出来ないホードラー王国軍は自衛隊に良いように攻撃され後退も出来なくなっていた。

アトレーの近くに着弾した迫撃砲弾がアトレーを守る護衛兵をバラバラにする。

そのおかげもありアトレーは無傷だったが、アトレーは全身に土と血と肉片を頭から被っていた。

見事な意匠を凝らされた白銀の鎧は無残にも赤黒く汚れていた。

「な、何なんだ！？一方的過ぎるではないか！？」

ある程度の力があるとは思っていたが、見ると聞くでは違い過ぎる。自衛隊の圧倒的な火力の前にホードラー王国の精鋭軍が手も足も出ない。



「こ、これでは・・・虐殺ではないか！」

アトレーの例えは正しい。

だが、今までやる側だった者が今更自分がやられる側になったからと言って非難できる立場ではない。

それでも彼等の中ではそれが「正しい」のdarou。

そんな彼らに降り注ぐ弾丸と砲弾は今まで好き勝手やってきた彼等にたいする裁きの様だった。

逃げ惑う者、果敢に攻撃に向かう者、ただ呆然とする者、神に救いを求め祈る者・・・。

それぞれが等しく死に直面し、そして惨劇の煙幕により塗りつぶされていく。

それを行いし自衛隊もまた苦しんでいた。

初めての戦争が一方的虐殺の様相になったため、攻撃を行いたくないものが続出したのだ。

ある意味、戦後日本の最大の弊害である「自分だけは正義の味方である」的な思考だ。

それは平時においてはうっとおしりだけの存在だが、この様な殺るか殺られるかの状況では足を引っ張る。

案の定、一部で攻撃が弱体化し、その分ホードラー王国軍が突出してきてしまう。

だが、89式戦闘装甲車の35mm機関砲が接近してきたホードラー軍を軒並み吹き飛ばしてしまう。

目の前で自分達が作り出した惨劇に耐えられる者はともかく、耐えられないものは発狂してしまったり、戦闘拒否して自らの行いに統帥していた。

そんな彼等は気付いていないのだろうか？

彼等の肩に乗るものは決して軽いものではない。

保護した村人の命、日本国民の生命と未来を背負っている事を・・・。

彼等が戦わねばそれらが犠牲になると言うことを……。

だが、自衛隊は軍隊だ。

名目では軍ではなくても軍隊なのだ。

だからこそ、例え虐殺の様になっても、自らの主義主張と違えども所属する以上は軍人なのだ。

そして日本と言う国家そのものを背負った防人<sup>さきもり</sup>なのだ。

だから……だからこそ、意思ある者は最後まで気を緩めず引き金を引き続けた。

例え殺人者、虐殺者と言われても国を守り、国民を守れたなら本望と言わんばかりに……。

結果、ホードラー王国軍はこの日の攻撃を諦めた。

否、壊走した。

圧倒的な火力を前に3万の兵力による総攻撃も一日で崩壊し、戦う何どころでは無くなっていた。

日本が唯一の一回の戦いで戦争に勝った瞬間であった。

しかし、まだ王国内には戦える力がある。

逃げた兵もまた集い（強制的に集結だが）、牙を剥くだろう。

それを防ぎ、王国の戦意を根本から打ち砕くために高橋たち特殊任務部隊は協力者たるアイン、シャイン、ミューリと作戦に参加する将兵と共にレンジャー部隊と合流し、後方を遮断していた。

## 作戦開始2

ホードラー王国軍の後方遮断の為、ホードラー王国領内に侵入した高橋たち特殊任務部隊とレンジャー部隊は、ホードラー王国に取っては辺境たる廃村にやってきた。

ここはかつて、今は日本の保護下にある村人たちが住んでいた村だった。

高橋たちが来たとき、村は焼け落ちており、木材で建てられていた家の残骸が虚しく転がっていた。

しかも、ここは一時的な補給物資の集積所になっており、少数だが兵が配置されていた。

「さて、佐竹大尉どうしますか？」

村からやや離れた森の中で高橋はレンジャー部隊の隊長である佐竹さたけのふゆきの信行に相談をもちかけていた。

「今後の事を考えて弾薬は消耗したくないが、時間もかけたくないわがままな話ではあるが、実際に時間も弾薬も余裕があるわけではない。」

「まあ、何とかなるって」

井上が89式小銃にスコープを着けた簡易狙撃銃を構える。

スコープの先には数人の兵が見てとれた。

「簡単に言うな」

高橋が井上の頭を小突いた。

「あの、私が何とかしますか？」

突然シャインが声をあげた。

一斉にシャインに視線が集まる。

「姿を隠す魔法を使えば多少は何とかなると思いますよ？」

その提案に高橋と佐竹が相談を始めた。

「姿が見えなくなるなら何とかありませんかね？」

実際に体験した事がないので何とも言えない顔で高橋が佐竹を見る。

「ふむ、姿が見えなくなるなら我々でどうにかできると思うが？」

佐竹たちレンジャーは隠密行動のプロだ。

ある意味、日本における特殊部隊だ。

即席特殊（任務）部隊の高橋たちがやるより確実だ。

「そうですね、それなら我々はこちらから見える連中を始末しますの  
で、見えない位置に隠れている連中を頼めますか？」

佐竹は、了解、と答えるとシャインに魔法を使ってもらい姿を隠す  
とレンジャーを率いて即座に動き出した。

目の前で姿が見えなくなった佐竹たちを見たときはさすがに驚いた  
が、驚いてばかりはいられない。

佐竹たちの行動に合わせて高橋たちも小銃を構えて村跡を狙う。

「減音機装着後、各員目標の重複に注意して攻撃せよ」  
と言うと村の周囲に展開する警備を狙い撃ちした。

突然、目の前で仲間頭を横殴りされたようにして崩れ落ちたのを見  
た兵が駆け寄る。

仲間の兵は先程まで会話していた表情のまま頭から血と白い何かを  
流して死んでいた。

思わず悲鳴を上げようとしたその兵も喉に何かが当たり声が出せな  
くなる。

吹き出す鮮血が自分のものと認識出来ないまま、訳も分からず意識  
が薄れて行った。

二人一組で警備していたホードラー王国軍兵士は、突然仲間が倒れ  
出した事態を把握できずにいた。

「何が起きてる！？」

守備隊長のセオドルが天幕内で酒を飲んでいた時に伝えられた事態  
に八つ当たり気味に怒鳴りだす。

「は、はっ！味方の兵が次々と倒れまして・・・何が起きているの  
か分かりません！」

セオドルはその報告に部下を殴り飛ばした。

「馬鹿者！敵襲だろうが！」

殴り飛ばした部下にそう怒鳴ると剣を手に天幕を出ようとした。

その時、天幕の一部を切り裂き顔を黒く塗った奇妙な姿の者が侵入してくる。

「くっ！蛮族か！」

侵入してきた何人かの内の一人に剣を降り下ろした。

奇妙な姿の男は手にした黒い塊で剣を受け、そのまま剣撃の勢いを横に反らす。

思わずバランスを崩してしまったセオドルの隙を逃さずに首筋に冷たい何かが差し込まれた。

「・・・・！！？・・・・！！」

声にならない叫びをあげようとしたセオドルは、佐竹が銃剣を引き抜くともがく様に地面に転がる。

倒れる時に地面を真っ赤に染めて・・・。

佐竹が油断なく天幕を見渡すと既に天幕の中に動く者は佐竹たちレオンジャーだけだった。

次だ。

声を出さずに手で合図するとまた佐竹たちは天幕を抜けてまた動き出す。

夕闇が迫るなか、この村跡は100近い警備の兵が居たにも関わらず、時間にして30分かつらずに制圧された。

### 作戦開始3

制圧された村跡に終結した高橋たちは直ちに始末した兵士たちの遺体などを片付ける。

それを手伝いながらミューリは悲しそうな表情を見せる。

「あんなに平和だったのに・・・」

元々この村出身のミューリからすれば今の村の有り様は余りにも酷いと思った。

皆静かに暮らしていた。

なのにファマティー教を受け入れなかったという、ただそれだけの理由でこの有り様だ。

この大陸ではそれが常識なのかも知れないが、異なる者や異なる思想はそんなに許されない事なのだろうか？

高橋たちを始めとする日本と言う存在と出会う事でその思いは益々強くなっていく。

その時、頭にポンツと手がおかれた。

「そんなに思い詰めるな」

優しい手の感触に思わず顔が赤くなる。

「あ、いえ・・・」

言葉に詰まるミューリに高橋が優しい表情を見せてくれた。

「昔から住んでた村の有り様に色々思うところはあるだろうけど、皆無事だったんだろう？それだけでも良かったじゃないか」

高橋はそう言うとう優しく撫でていた手をよけて作業に戻って行った。ミューリはその後ろ姿に何か熱くなる物を感じずにはいられなかった。

「後は・・・」

井上と佐藤は自分たちの作業が終わり周りを見渡した。  
大体片付けた村は何事もなかった様になっている。

しかし、これから撤退してくるホードラー王国軍がここを目印にやってくるだろう。

統率が取れていないなら各個撃破だが、統率がまだ残っているならレンジャー部隊と共に後退を阻止、自衛隊の追撃と合わせて挟み撃ちにして壊滅させる。

それがこの任務だ。

「レンジャーは村の外にクレイモアを仕掛けてるみたいですね」

佐藤がぼー、としている井上に声をかけた。

井上はそうだな、と言うとホードラー王国軍の補給物資、食料を見してみた。

小麦や干し肉などを中心とした食料だが、中には少数ながら生鮮食品もある。

「これ、使えないかな？」

井上の呟きに、傍に来ていた高橋が答えた。

「食品は食うぐらいにしか使えないだろ？」

本来あるべき食品の姿を口にするが、井上は別の考えがあった。

「いやさ、これは一応3万の兵隊に食わせるだけの量だろ？なら食料でも苦勞してる日本に役立たないかなあ・・・と」

いくら目処は立っていても食料生産は一日にしてならない。

やはり現状はギリギリの日本に取って少しでも必要なんじゃないかと思ったのだ。

その井上の考えに高橋が驚いていた。

「・・・お前でも真面目な考えをするんだな」

酷いと言えはあまりにも酷い言葉に井上はがっくりと項垂れた。

「お前、俺を何だと・・・」

「聞きたいか？」

即座に答え様とする高橋に井上はごめんなさい、と何故か謝っていた。

「まあ、このまま焼き捨てたりするよりはマシだろう」

はつきり言って日本から食料を送って貰わないと食って行けない調

査派遣隊がこれらを手に出来れば日本の負担を幾らか押さえられるだろう。

「その為にもここで連中を潰さないとな」

高橋はそう言つて塹壕を掘る手伝いを井上に指示した。

「よし、食い物の為にもここは死守するぞ」

張りきりだした井上に呆れながら高橋は現金な奴、と感想を持った。

「なあ、アンタらはいつもこんな旨いのを食つてるのか？」

ホードラー王国軍の撤退を無線で聞いた彼等は、ホードラー王国軍が来る前に食事を取つていた。

その時にアインが自衛隊の携帯食料レーションの沢庵を食べながら聞いてきた。アインの言葉に自衛隊の面々は顔を見合わせる。

たしかに元の世界のレーション関連では世界的に旨い分類に入るが、彼等自身はそれほど美味しいとは思わなかった。

ただ、以前サマワに派遣された事のある高橋と井上は米軍連中の食べてたレーションを交換して食べた事がある。

その時の不味さに比べたらたしかに日本のレーションは旨いのかも知れない。

もつとも、あの不味さから考えたら何処の国のでも旨いのだろうが・  
・。

「・・・一度、日本に飯屋に連れて行きたいな」

井上はこの程度で喜ぶアインに呟く。

「・・・普段どんだけ不味いものを食べてんだ？」

逆に高橋はこれで美味しいと言うアインに、レーション交換して喜ぶ米軍兵士を思い出した。

今は在日米軍として来ていたはずだが会う機会は無かった。

「え？なにその反応？」

アインは楽しそうな井上と哀れみの表情の高橋の表情に戸惑いながら次のレーション、鯛飯に手を出していた。



### 作戦開始3（後書き）

第十話終了です。

凄惨な戦いとそれに伴い新たに巻き起こる戦い。  
その合間の一度の急速をイメージしてみました。

それはさておき記念すべき第十話です。  
如何だったでしょうか？

正直、この戦いは日本に取って必要なのか？  
別のやり方もあったはずでは？  
と書きながら思っていたりします。

しかし、彼等は生き残るためにも戦いを選択した（させてしまいました）  
以上は中途半端な終わりは許されません。

次回からはそんな彼等の苦悩も上手く書ければ、と思います。

では次話でお会いしましょう。

## 勝者と敗者（前書き）

王国軍の総力を挙げた戦いは日本の圧勝で幕を閉じた。  
だが、明暗を分けた戦いもまだここで終わってはいない。

第11話「勝者と敗者」お楽しみください。

## 勝者と敗者

闇が下り、辺りが静けさに包まれる。

そんな中を疲れきった表情で兵士たちは歩いていた。

その兵士たちは元はきらびやかな青い鎧を着ていたはずだが、今では血や泥で薄汚れていた。

ファマティー教の聖堂騎士たちだ。

あの一方的な殺戮の場から一足先に逃げ出していたのだ。

ハーマンはその様子に何故こうなったのか分らないと思う。

信心厚き自分たちが何故こうも無残を晒しているのか？

神は我等を見捨てたもうたのか？

そんな疑問を思いながらハーマンは聖堂騎士に守られる形でホードラー王国王都シバリアへと向かっていた。

「大司教様、味方の陣が見えて来ました」

1人の聖堂騎士が疲れた様子のハーマンに伝えた。

それを聞いたハーマンは前を見る。

木々の間から松明の明かりがちらほらと見えている。

ようやく休める。

そう思いハーマンは安堵していた。

そこには自分たちを待ち受けるものたちが居ると思わずに……。

「一足先に行って食事を用意させなさい」

ハーマンは聖堂騎士に命じると少しでも早く休みたいと願った。

聖堂騎士の1人が走って陣に向かって行くが、突然その聖堂騎士が力なく崩れ落ちる。

何が起こったのか分からない様子のハーマンを訓練を積んだ聖堂騎士たちが壁となり守りの体勢を取る。

だが、飛んできた何かが爆発しその壁をなぎ倒した。

爆音と同時に森のあちこちから断続的な小さな破裂音が響き、直後聖堂騎士たちがバタバタと倒れて行った。

「て、敵襲！」

「ハーマン大司教を守れ！」

「何処だ！何処にいる！？」

口々に叫びながら倒れていく聖堂騎士たちは為す術がない。

「あ、ああああ！わ、私を護れ！護るんだ！」

馬上から必死の形相でハーマンがわめき散らす。

しかし一際高い位置にいて目立つハーマン程狙いやすい目標はない。しかも大声を出すので誰が指揮を取っているかバレバレである。

「準備よし」

静かな口調で高橋の部下がいつでも撃てる事を報告する。

「よし、あの煩いのを黙らせる」

高橋の指示に84mm無反動砲を構えた部下が照準を合わせる。

この84mm無反動砲、元はカールグスタフと呼ばれる物でスウェーデンで開発された物だ。

無反動砲は発射と同時に後方に向けて同質量の物体、もしくは発射ガスを後方に噴射して発射時の反動を押さえた携行式の砲だ。

砲弾も対戦車榴弾から榴弾、照明弾、発煙弾と幅広い。

その性質上発射時に後ろに居たら危険極まりなく、またこの84mm無反動砲は発射時に後方に噴射ガスを出すので夜間であれば爆炎等で目立つ事この上ない。

しかし、一撃で彼等を無力化させるのには都合がいいのも確かだ。  
「了解」

84mm無反動砲を構えた部下は答えると即座に無反動砲を発射する。

激しい爆音と共に打ち出された榴弾は真っ直ぐにハーマンの足元付近に向けて飛翔し、壁となっていた何人かを貫き爆発した。

ハーマンは悲鳴をあげる間もなく馬と聖堂騎士と共に吹き飛び、そ

の肉片を辺りにばらまいた。

「だ、大司教!？」

生き残った聖堂騎士たちはハーマンの姿を探すが原形を止めぬ程にバラバラになったため、ハーマンを見つけることは叶わなかった。そして、追い討ちの様に飛来する銃弾の前に聖堂騎士たちも直ぐにハーマンの後を追うことになった。

「状況終了、次に備えろ」

動く者が居なくなつたところで高橋は次の王国軍迎撃の準備をさせる。

おそらく此方の存在には気付いているはずだからだ。

生き残る為に必死になるであろう彼等を相手にせねばならないが、挟み撃ちになっている事実を知らしめる為には必要な事だった。

## 勝者と敗者2

「今の音は・・・？」

自衛隊と戦っていた時の爆発音に似た音が前方から聞こえてきた事により不安が広がる。

それはヴァスターも同じだった。

不安な心中を表さないだけまだマシかも知れない。

「公爵！奴等が回り込んだのでは！？」

配下が公爵の身を心配し迂回した方が良いと進言する。

その進言を受け入れたヴァスターは迂回しようと兵を森に進めた。だが、既にそこは罠が待ち受けていた。

（やれ）

佐竹が部下に目で合図する。

それを見た部下が手にした起爆装置のレバーを回す。

直後、一部の木々が爆発し森に入ってきた兵士たちがその破片を浴びて地面を転がる。

死にはしなかった兵士も少なくなかったが、木片が体に食い込み地獄のような激痛を味わうよりは素直に死んだ方が良かっただろう。

更に爆発により幹を削られた木が彼等目掛けて倒れていく。

逃げ切れなかった何人かが木に押し潰されたり地面との間に挟まれた。

「おお！？これは！？」

ヴァスターが恐れあまり取り乱す。

流石に夜に森の中で奇襲されるとは思わずにいたのだ。

「まさか、我々の動きが見抜かれているのか！？」

底知れぬ日本に恐怖を感じずにはいられない。

だが、だからと言ってこのまま引き下がれない。

「突破するんだ！突破しなければ生き残れん！」

ヴァスターは必死になって兵士たちに声をかけた。

兵士たちも生き残るために森を突破しようと闇雲に前進を始めた。

それは統率なき生存への行動であるが、烏合の衆と化した状態で何処にいるか分からない敵を相手にするのは得策ではない。

案の定、森の各地で悲鳴や断末魔の叫びが巻き起こる。

クレイモアや爆薬の起爆、そして銃撃と迫撃砲が彼等を森の中で追いつめていく。

最早、軍として機能していない。

ヴァスターは必死に逃げ回るが、ついに捕捉され、単騎で森をさ迷う内にレンジャー隊員に捕縛される事になった。

一方、ラークは自衛隊の追撃を振り切れずに降伏していた。

アトレー将軍も先の戦いの混乱の中、あえない最後を迎えておりラーク以外の将もその多くが命を落としていた。

ラークは最初は味方の後退を助ける為に果敢な攻撃を行ったが、接近も出来ずに一方的に攻撃されては堪らない。

その為、味方の背後を守るように戦場を後にしたのだが、金属で出来た怪鳥（多目的ヘリコプター）を前に逃げ切れず、また手勢を僅か100名まで打ち減らされやむ無く投降した。

（せめて、接触の機会を得られたと思うしかあるまい）

ラークはそう思いながら部下の安全も忘れずにいた。

このラークの行動が逆に自衛隊の足を止める事になったのだが、高橋たちの活躍もありホードラー王国軍は3万の精鋭を一度の戦いで喪い、今や国の戦力は極めて少数になっていた。

### 勝者と敗者3

「貴方が指揮官ですね？」

森が連れて来られたラークを前に聞いてきた。

ラークは奇妙な格好の兵士にも驚いたが、指揮官たる物も相変わらず奇妙な姿なのには驚いた。

何よりも自分を誇示する様に意匠を凝らした甲冑などを着込まず、一般の将兵と変わらない姿をしているのだ。

「貴方が日本の將軍ですか？」

ラークは森の立場を知らないため將軍と思い込んでいた。

「いえ、私は1部隊を預かる立場です。將軍ではありませんよ」

笑いながら答えた森にラークは、1部隊に負けた事実をその時初めて知った。

二人は互いに自己紹介をすると席についた。

「日本の指揮官に尋ねたい」

最初に切り出したのはラークだった。

どうぞ、と言われラークは日本は何処にあるのか？と聞いてみた。

「そうですね、船で1日ぐらい海を渡れば着きますよ」

森の答えにラークは疑問が浮かんだ。

アルトリア領域は未開の地ではあるが海ではたまに船が通る。

だが、島一つ存在しない海域で、しかもそこに国があるとは聞いた事がない。

「失礼ながら、そこは島すらないはずですが？」

森は何と答えて良いか分からなかったが、どちらにしても隠す事でもないので答える事にした。

「今から一月前に別の世界からこの世界に転移して来ました」

森の目は真剣だったが、ラークには信じられない事だった。

「転移？異界からですか？」

聞いた事もない事態にラークは混乱する。



「信じられないでしょうが事実です」

ラークには森が嘘を言っている様には見えない。だが、信じる根拠がない。

その板挟みに頭を抱えたいとさえ思える。

「我々は別に貴方の国に興味はありません。ですが、貴方の国は我が国に対して非礼にも程がある態度を取りました」

森の言葉にラークは何も言えない。

始めはラーク自身、それが当たり前だと思ったからだ。

「また、我が日本国は人道上、貴国のやり方を認める訳には行きません」

森は先日の子人保護の話をする。

「しかし、異教徒は・・・」

ラークはファマティー教の教えである異教徒討伐が定められている旨を主張したが、その言葉に森は声を荒げた。

「異教徒だから殺しても良いとは思いません。彼等もまた人間です。異教徒であっても救うのが神様では無いのですか？」

その言葉にラークは衝撃を受けた。

ラーク自身ファマティー教徒ではあるが、それが当たり前の世界に生まれたのだ。

だが、それとは別の価値観を突き付けられた時、ラークの中にあつた信仰に揺らぎが出来た。

「我々は貴殿方の信じる宗教を否定しませんが、ですが受け入れる事も出来ません。何故なら異教徒だからと言って迫害する様な宗教などあつてはならないと思いますから」

そう言われたラークは森が偉大な存在に感じられた。

宗教という垣根を越えてこの男は物を見ている。

そして、隔てなく人々を守るのが宗教だと言われた時、これこそが本来あるべき宗教の姿ではないのか？  
と思ひだした。

「まあ、私達の方が本来この世界では異端なんでしょう。ですが一

つの主義主張や宗教が正しい訳ではありません。こう言う考えもある、とご理解ください」

会談はここまでだった。

だが、ラークに取って得られた物は極めて大きい。

彼等ともつと接する事が出来ればもつと変わるのではないか？

ラークは今までの自分が矮小な存在に感じられ、そこから抜け出すには日本をもつと知る事が必要ではないか、と考えていた。

### 勝者と敗者3（後書き）

第11話終了です。

突っ走って急ぎ足でココまで着ましたが如何だったでしょうか？

さて日本の圧勝に終わった戦いですが、まだまだこれからが本番です。

果たして日本はどうするのか？

次回をお楽しみに。

ご意見ご感想心よりお待ちしております。

## 王国領へ（前書き）

ホードラー王国軍を打ち破った自衛隊は当初の予定に従い王国領内に歩を進める。

一方のホードラー王国の王宮では日本に対する対応が協議されていた。

徹底抗戦か？降伏か？講和か？

選択しだいで国が滅びる瀬戸際で彼等がとった方法とは？

第12話「王国領へ」お楽しみください。

## 王国領へ

日本、内閣総理大臣官邸。

記者会見を終えた鈴木が疲れた体を倒れる様に椅子に預ける。

連日の激務もさる事ながら、油田発見？の報に色めきたつ国内をまだ確定ではない、として宥めるのに四苦八苦していたからだ。

「どれだけ石油に依存していたかが明確になるな」

鈴木は一人部屋の中で呟いた。

石油発見と決まれば次に必要なのは採掘だ。

数年はかかる物を半年で何とかせねばならない。

一応、何時でも採掘施設を造れる準備はしているが、それでも無茶と言えば無茶な話でもある。

だが、やらねばならない。

でなければ日本が持たないのだ。

備蓄原油のタイムリミットは来年の3月と見通しはあるが、今でも不足が目立つのだ。

「確定してもまだ埋蔵量がはっきりせんうちは・・・安心できん」それが鈴木たち閣僚が出した結論だ。

更に日本が確保した広大な地域、アルトリア領域の南にあるホードラー王国との戦争をどうにかせねばならない。

「・・・完全に制圧すべきか、それとも和平か・・・」

目下、鈴木之苦難はまだまだ道半ばだった。

ホードラー王国王宮では先日行われた会戦で王軍3万とファマティ教から派遣された聖堂騎士500が壊滅し、聖堂騎士に至ってはハーマン大司教を含む全員が戦死したと言う報に慌てふためいていた。

「徹底抗戦あるのみ！」と主張する者や「講話すべき」とするもの

が衝突し、結論が出ないままになっていた。  
何より、教会への報告を行わねばならない。  
これも頭の痛い問題だ。

「まだ我が王国は戦える！」

「集められる軍勢の大半を喪ったのか？」

「それよりも講和して・・・」

「講和など蛮族が認めるとは思えない！」

「左様。何より教会も認めますまい」

「そうだ、ハーマン大司教や聖堂騎士を皆殺しにされているのだからな」

「では奴等により王国が蹂躪されるのを受け入れよ！？」

「周辺国から援軍は・・・？」

「無駄だ。周辺国は我が国に従属していた国ばかり。この機会に反旗を翻す動きさえある」

「このような時に・・・」

「やはり何とか講和せねば・・・」

「だから無理だと言っている！」

結論の出ない水掛け論を前に宰相カルタス・ラ・キュレーは王国が崩壊する様を見た気になっていた。

どちらの言い分も分かるのだが、どちらにしても王国が存続するのは難しい。

徹底抗戦すれば王国は灰になり、講和してもその力を大きく奪われるだろう。

そして、座視すれば今まで虐げてきた周辺国が王国に攻めいる。

これは誰の目にも明らかだ。

しかも密偵の報告では日本と接触しようとする動きさえある。

八方手塞がる思いだ。

戦うにしてもアトレーを始めとして名だたる將軍の多くが戦死、もしくはヴァスターやラークのように囚われの身になっている。

まだ軍の指揮を取れる者はいたが、近衛だったり地方の守備につい

ていたりで動かせない。

講和するにしても外交的接触は初期の頃に自ら断っている。

また、日本と言う国が突然現れている為に中立国を介しての対話もない。

普通なら教会を通して講和の場を持つのだが、日本はファマティー教を信仰してないと聞く。

これでは教会は協力どころか日本を制圧しろとしか言わない。こうなつては手の打ちようがないのだ。

「最初の交渉から我等は失敗していたのだろうか」

宰相たる立場にある身で、交渉内容に関わりあるカルタスは我が身の不明に敢えて言及した。

その言葉に会議に出ていた諸侯がカルタスに視線を向ける。

「我々のはかの国を蛮族としてしか認識していなかった。それがそもその間違いだったのだ」

カルタスが疲れた様にため息を吐きながら言つた言葉に反論は一切でない。

いや、出しようがない。

何故ならその場にいた諸侯誰もがカルタスと同じ様に見下していたからだ。

「この上となつては国王陛下を守り王家の存続を最優先としたい。

何か言うべき事はあるか？」

カルタスの言葉にやや遅れて発言があつた。

## 王国領へ2

「宰相閣下、王家の存続に異存はありませんが、問題はどうかやって存続させるかです」

子爵位にある一人がそう発言すると周りも同調しだす。

「他国に避難しては国内に対する影響力を失います」

諸侯の誰もが王家の影響力が失われた場合、自分たちの権益の保証も失われる事を危惧していた。

他国に亡命し捲土重来けんとうじゅうらいを図るのも手だが、日本の力を見る限りそれとて困難だ。

だが、カルタスの目には諸侯が別の思惑を持っている様に思えた。ここに至っては王家を生け贄に自分たち諸侯の持つ権益を維持しようと言うやり方だ。

おそらく、日本が国内に来た場合、抵抗などしないで降伏し、日本に積極的に協力して己の保身を図るのが見え見えだ。

「いや、王家の存続を考えれば他国に亡命するしか手はない。それにファマティー教さえ認めなかった彼等が我々の存在をそのままにすると思つかね？」

カルタスは諸侯の逃げ道を塞ぐつもりで言ったのだが、日本がホードラー王国を支配下に置いた場合、それは正しいと言えた。

日本がホードラー王国を領土にした場合、日本の法を王国内に適用することになる。

その場合、諸侯の領土の存在を私有財産と認めても徴税権は認めない。

そうなると領民は土地を借りている存在となる上に、土地を借りている借用料に制限が課せられる。

その結果、諸侯は今まで好き勝手に設定し徴税し、王家に支払う一定額との差額で豪華な生活を送っていたのが難しくなる。

更には私有戦力、つまり私兵の所持の禁止、並びに武装の完全な解



除を行うだろう。

諸侯は収入を大きく削られ影響力も力も失い、ただの土地を持つ地主になってしまう。

こうなれば諸侯は自分たちの権益の大半をただ削られて利益がなくなってしまうのだ。

「王家さえ存在していればいずれは取り戻せましょう。だが、王家が失われればその機会は永久になくなる」

カルタスの脅しとも取れる発言に王家を生け贄に、と考えていた諸侯が慌てだした。

自分たちの目論見など日本には通じない。

そう言われたからだ。

はつきり言えば甘い認識と言わざるを得ない。

「では、王家をフアマティー領域の教皇領にお逃がしするしかない」と？」

諸侯の問いかけにカルタスは頷く。

「貴公らも王と共に行かれる準備をした方が良いのではないか？」

その言葉を合図に急に場が騒がしくなる。

一刻も早く逃げ出そうと言っただろう。

「ですが、宰相閣下は？」

慌てず騒がずに落ち着いた様子の男爵がカルタスの言葉にカルタスは逃げないと言う意志が見えたため、気になり尋ねた。

「私は残るよ。言うほどの財産もないし、せめて私が残って責任を取らねば日本も剣を納めまい」

愉快そうに笑うカルタスに男爵は自身も責任を取るべく残る意志を固めた。

場は、既に逃げ出す準備の為に自身の領に向かう諸侯で騒がしい様相を醸し出していた。

ホードラー王国は上へ下への大騒ぎだった。

王家が国外に逃げ出し、諸侯もそれに続くと言う噂が流れたからだ。

その噂はカルタスにより意図的に流された事実だったが、民衆は自分たちも逃げねばと混乱していたのだ。

王は既に国外へと向かっていたが、一部諸侯や民衆が混乱していればその分遠くへ逃げれると考えたのだ。

日本がそこに来てても混乱を納めねばならない上、まだ残っているであろう諸侯を征伐し国内を平定する時間が必要になるからだ。

ただし、カルタスにも誤算があった。

王や王妃は逃げ出せたが、一部王族が混乱の中に捕らわれ、身動きが取れなくなっていたのだ。

しかし、カルタスがその事実を知るのはずっと後になってからだっ

### 王国領へ3

調査派遣隊の対王国方面隊は森の指揮の下、補給を受けて王国領内に部隊を動かしていた。

目的はホードラー王国を降伏させ、アルトリア領域の安全確保、並びにホードラー王国内における異教徒、つまりファマティー教を信仰しない人々の保護である。

始めは賛否別れていたが、今後もこの世界に日本が存在する以上は日本の立場を明確にし、日本が存続するためにはこの世界の住人の協力が不可欠だからだ。

最悪、王国を併合しアルトリア領域の安全を確保し、アルトリア領域を開発、発展させることも視野に入っている。

その際には封建制度は撤廃し、王族は君臨すれども統治せず、と言う形でホードラー王国を民主化させる必要がある。

だが、ここに来て想定外の事態に巻き込まれていた。

なんと民衆を保護し守るべき立場にあるはずの諸侯がこぞって逃げ出したのだ。

しかも、自衛隊が小さな村や町に立ち入ると人々は困窮していた。

話によると王族が国を捨て逃げ出し、それに従って諸侯も逃げ出し、最悪な事に諸侯は根こそぎ物資を略奪していたのだ。

これには自衛隊も困り果て、日本に当座の食料を含む民生品を要請せねばならなかった。

だが、日本にも余裕はない。

その為に自衛隊は自分たちの食いぶちを削って人々に食料などを渡すはめになった。

まるで焦土戦術だ。

しかも極めて効果的な焦土戦術と言える。

だが、だからと言って立ち止まらない日本はホードラー王国の首都を目指して進んでいく。

「そこまでだ！武器を捨てて投降しろ！」

ホードラー王国領内に入って3日、もう何度目の降伏勧告だろうか？  
いい加減代わり映えしない貴族のやり口に高橋も苛立ってきた。

「ひい！や、やめろ！」

立派な身なりの貴族が慌てて地面に平伏す。

「い、命だけはお助けを……」

頭を擦り付ける様に懇願する様には何とも言えない苛立ちだけがある。

「よし、コイツらを拘束しろ」

井上も嫌悪感を示しながら武器を一ヶ所に集め、地面に座らせていく。

たまに抵抗する者もいたが、大抵はろくな抵抗もしない内に実力で制圧、もしくは射殺されて終わる。

中には懐柔しようとする者もいたが、これもあっさり制圧してしまう。

貴族連中は何も理解していない。

そう言った行為は野心溢れる侵略者になら効果的だったろう。

しかし、高橋たちは侵略者は侵略者かも知れないが、それでも日本人としての誇りは持っていた。

その誇りが彼等の様な卑屈に媚びるのを許さなかったのだ。

「貴君らは民間人への暴行、略奪の容疑で拘束される。だが、我々も貴君らに構ってられるほど暇ではない」

高橋は貴族を解放すると伝えた。

「あ、ありがとうございます！」

大袈裟に喜ぶ貴族だが、次に高橋が口にした言葉を聞いて凍りついた。

「ただし、これら武装の所持は認めない」

高橋たちは乗ってきたトラックに剣や槍や鎧を次々に放り込んでいく。

その様子に貴族が慌てて懇願を始めた。

「せ、せめて身を守る手段を！」

だが高橋たちはそんな貴族を冷たくあしらった。

「貴殿方は身を守る必要があるのか？その必要があるとは我々には思えんが？」

自衛隊は武装解除はしても保護するのは捕虜や民間人で、解放した者に対する責任はない。としていた。

「この辺りには非武装の民間人しかない。安心して帰りなさい」  
そう言つて高橋たちがトラックに乗り込むと略奪の対象となつていた民間人が彼等を取り囲んだ。

その目は怒りと憎しみに満ちており、いままでの統治がどれだけ酷かつたかを物語っていた。

だが、高橋たちは敢えてそれを放置した。

その結果を知っていたが、高橋たちは統治の為に来たわけではない。それは後続の役目だ。

だからそのまま次の目的地を目指し移動を開始した。

そしてその背後で後に残された貴族たちに民衆が殺到していった。  
貴族たちが悲鳴をあげたが、高橋たちの耳には届かなかった。

### 王国領へ3（後書き）

第12話はここまでです。

正直、読み返すと「説明とか蘊蓄<sup>うんちく</sup>長すぎじゃないか?」と思ってしまいました。

正直どうですかね?

他の人の作品を読んで勉強してみましようかね。

と、言う訳で今回はココまでです。

ご意見ご感想<sup>ご</sup>どころよりお待ちしております。

## ミューリの活躍（前書き）

第13話です。

一つ一つが短いのに良くここまで来たものです。

まあ、私の話はどうでもいいのでw  
本編をお楽しみください。

## ミューリの活躍

「・・・いい加減休みが欲しい」

夜営の準備をするため火をおこしていた井上が何の前触れもなくぼやく。

佐藤も気持ちは一緒だったが、それよりも任務でしょ？と井上のぼやきに返す。

「ここんところ働きずくめだ！いい加減休みてえよ！」

井上の愚痴に高橋がため息をついた。

確かに働きずくめだった上に、どうしようもない連中に接して来たのだ。

肉体的と言うより精神的に疲れたのだろう。

「首都を落とせば休めるさ」

気休めにもならない言葉だが口にせずにはいられないのは高橋も疲れているからだろう。

「大体よう、上は俺らを便利屋か何かと勘違いしてんじゃねえか？」

井上の言葉に高橋が動きを止める。

そう、基本的に特殊任務部隊は自衛隊に取って構ってられない様な事柄を解決するために作られたと言っても過言ではない。

高橋にはそれがわかっていたのだ。

「そ、そんな事はないと・・・思うよ？」

あからさまに怪しい態度に井上が何かを察した。

「デメエ・・・知ってやがったな？」

唐突に井上が殺気立つ。

不味い、こいつ本気だ。

とは思ったが後の祭りである。

「知ってて俺らを・・・」



ゆらりと立ち上がると井上は89式小銃を手を取った。

「待て！早まるな！」

慌てた様子の高橋にじりじりと井上が近付いて行く。

完全に戦闘体勢だ。

「それに昇進したじゃないか！？」

高橋が必死の説得を続けるが井上の心には届いていない。

「日本でなきゃ使えないのに昇進して給料増えてもうれしかねえよ！」

後は取っ組み合いである。

お互い気心が知れた仲であるので、あくまでもふざけているだけなのではあるが、この部隊に案内役として共に行動するミューリには不思議な光景と言えた。

「喧嘩するならご飯あげませんよ？」

子供をたしなめる様に言われた二人はようやく大人しくなった。

「10歳は離れた女の子に叱られるなんて・・・自重してください」  
佐藤が止めを刺した。

見事な一撃に二人は本気で膝をつき頂垂れた。

その様子に他の仲間が笑っていた。

食事を終わると後はトラックの周辺で交代で見張りをしながら翌朝まで待機だ。

ただしミューリだけは一人トラックで一晩中休める。

冒険者として活動してきたと言ってもやはり高橋たち自衛隊と一緒にでは疲れが溜まる。

高橋たちは大丈夫でもミューリの様な少女には厳しいのだ。

「あの子は寝たみたいですよ」

一回りしてきた佐藤が焚き火に辺りながら言う。

高橋と井上はそうか、と言うと佐藤にコーヒーを渡した。

「頑張るな・・・あの娘も・・・」

井上がミューリの働きを感じた様子で誉めていた。

「・・・色々思うところがあるんだろ」

高橋はミューリが案内役として着いてくると言った時、やっぱりな、と言う感想を持っていた。

「ずっと彼女や彼女の村を迫害してきた王国がボロボロになっていくんだ。ある意味復讐のつもりなんだろ」

日本なら、あの年頃の女の子は友達と遊び、おしゃれを楽しむ。

もしかしたら恋人とかも居たのかも知れない。

だが、彼女は村の為に金銭を稼ぐため、危険の中に自ら飛び込んで行っていた。

その身の上を聞いた彼等はいたたまれない気持ちでいっぱいだった。それでも気丈に頑張る姿に高橋たちは出来る限りの力になってあげようと思う。

「宗教が違っただけで哀しむ事になるなんて・・・酷い世の中だよな」

井上は隠して持参したウイスキーを一口含む。

それを咎める気は誰にもない。

皆出来れば酒でも飲んで忘れたかったからだ。

「だが、忘れちゃならない。この世界ではそれが正しいんだ。むしろ俺達が間違っているんだ」

高橋の話に納得なんかできない。

井上はそう思いながらも高橋もまた心を痛めているのを知っていた。

「だから、傲慢かも知れないが俺達が新しい価値観を作るんだ」

その瞳に宿りし決意の強さは誰もが知っている。

だからこの隊の仲間は高橋に着いていこうと心から思っていた。

## ミューリの活躍2

翌朝、早くに行動を開始した高橋たちは見渡す限りの平原に存在する城壁を見付ける。

「あれは城壁都市レノンです」

ミューリが自身の知る知識を持って高橋たちに説明する。

「レノンは城壁に囲まれた都市ですが、今では城壁も古く駐留できる戦力も限られて戦略的意味が無くなってますね」

ミューリの説明に佐藤がなるほど、と頷く。

「城壁は街そのものを守るには向いてますが発展性が限られますからね。結果、昔の状態からほとんど発展出来てないのでしょう」  
流石に歴史に強いだけあって佐藤の知識はここでも力を発揮できている。

そう言う意味では佐藤の様な人間が一番適応する世界とも言えた。

「でもよ、城壁が邪魔でもその周りを開発すりゃ良いんじゃない？」

佐藤の説明を聞きながら井上は思った疑問を口にした。

「言うほど簡単じゃないですよ？城塞都市は防御を考えた作りです。でも、更に周りに街が広がったらそれを守る為にまた城壁を築かないと意味がなくなりますから」

高橋はその話を聞いて考えていた。

今の高橋たちからすれば城壁は何の役にも立たない。

火砲で吹き飛ばせば良いからだ。

しかし、この世界において日本以外の国に火砲はない。

ならば、自分たちが使う分には強力な陣地になるまいか？

「また高橋が難しい事考えてるぞー」

井上があきれた様に言った。

「真面目過ぎんだよ」

笑いながら言う井上に高橋が反論する。

「お前は不真面目すぎる」

高橋の切り返しに周りで笑いが起きた。

佐藤も笑いを堪える様にしてるが漏れているようだ。

「俺が考えてたのはさ、俺らなら城壁をどう利用するかだよ」

「やっぱり真面目な話か、と井上は天を仰ぐようにぼやいた。

「いやいや、考えてみるよ？この世界じゃ発展性のない一時的な陣地にしかないだろうけど俺らが関与したら？」

その高橋の言葉に佐藤がハツとなった。

「成る程、僕たちなら城壁と言う形に拘りませんからね。それをやれば街は発展性を維持しつつ要塞になり得ますよ」

一人で納得する佐藤の首に腕を回しながら井上はどう言う事が聞いた。

「簡単です。城壁じゃなく水路なら？水運を利用して発展出来ますし、城壁の様に資材集めしなくていいんですよ」

佐藤の答えに井上が成る程、と頷いた。

自衛隊は接近戦をする必要がない。

それなら下手に視界を塞ぐ壁よりも視界が確保でき移動を制限できる水路は最良と言えた。

また、レノンの近くには大きな河があるのでそれを利用できる。

「まあ、あのレノンは自衛隊の基地にするには良い位置にあるしな」  
そう言いながら高橋は部隊にレノン入りを指示した。

ここの諸侯は情報によれば既に街を捨てているらしい。

略奪もせずに慌て逃げ出している様なので食料配布などもない。  
今回ばかりは楽に行けそうだと樂觀していた。

だが、そんな予想とは裏腹に意外な事態が巻き起こる。

「・・・誰だよ、楽なもんだと抜かしたのは」

トラックの周囲に展開しながら井上が愚痴を言う。

「まさか、こんな抵抗を受けるとはね」

高橋も自分たちの見通しの甘さを痛感していた。

彼等の目の前には武器と言うにはお粗末過ぎるものが手にされてい

た。

木の棒にナイフなどをくりつけた槍とか、こん棒、そして農具を持った人々が城門の前に陣取り、高橋たちの侵入を拒んでいた。

「・・・さすがに民間人相手だト・・・」

佐藤も想像していない事態に顔面蒼白だ。

ここに来てまさか民衆が彼等に抗戦しようとする等考えもしていない。

「しばらくはにらみ合いだな」

高橋が諦めた様に呟いたが、流石に民衆を相手に武力でどうこうする訳には行かない。

だが、高橋は何故民衆が自分たち自衛隊、いや、日本を拒むのか？ 多少なりとも情報が欲しいと思った。

### ミューリの活躍3

問題はどうかやって情報を集めるか？だった。

普通に考えれば付近の住人なのだが、その付近の住人が武器を持って高橋たちに立ちあはだかっているのだ。

これでは情報など集められない。

だが、ここでミューリが提案する。

「私が中に入って情報を集めます」

その提案に高橋は難色を示した。

曰く危険過ぎる。

もしバレれば民衆の様子からまず無事ではすまない。

また、潜入と言っても城塞に囲まれた街では侵入も容易ではない。

「高橋さん、私は皆さんと出会う前はそれを仕事にしてたのですよ？」

ミューリは真つ直ぐな目で高橋を見る。

高橋はその目に見られると何も言えなかった。

「わたった・・・」

苦渋が滲む表情ではあったが高橋はミューリの提案を受け入れる事にした。

「・・・ミューリちゃん、使い方は教えたよな？」

その様子を見守っていた井上がミューリに9mm拳銃を手渡した。弾倉も3つ。

「万が一の時は何としても脱出しなさい」

佐藤も心配そうにしながら閃光手榴弾と煙幕手榴弾を一発づつ手渡す。

「本来、君は案内だけでこんな仕事をさせるのは不本意なんだが・・・」

高橋も愛用のナイフを手渡す。

このナイフは自衛隊に入隊した時に購入した米国製のナイフで、元

特殊部隊出身の兵士が特殊部隊で使うのに一番向いている物として産み出されたものだ。

「あと、万が一逃げ切れないと思ったたら上に向けて使いなさい。最悪、実力で突破して助けに行くから」

高橋は照明拳銃、つまり信号弾を手渡した。

「ありがとうございます。でも使わないで済むと思いますよ?」

自信ありげな様子ではあるが年端も行かない少女にこんなことを任せるのは心苦しい。

「ああ、それを信じるよ」

高橋はミューリの頭を優しくなでる。

夜の闇が辺りを覆うのを待ってミューリはレノンへと向かって行った。

その後ろ姿を心配する高橋たちを残して……。

ミューリは暗がりを利用して城壁に近付いていく。

正規の守備兵がいないのか、周辺の警備はザル同然であった。

ミューリは自前のナイフを取り出すと古くなって隙間がある城壁に差し込み、足場を作りながら登っていく。

しばらく慎重に音を立てないように上り、ようやく城壁の上にたどり着いた。

城壁の上には人は居らず、警戒体制が極めて甘いのが手に取る様だった。

だが、ミューリは安心せずに即座に城壁の内側に降りていく。

建物の陰から陰へと静かに移動する様は下手な特殊部隊顔負けだ。

ミューリはそこから木の上に登ると建物の屋根に飛び移り周囲を見渡す。

街中に松明が焚かれている明かりがちらほら見えるが、その数から見張りはほとんどいない様だった。

ただし、一際立派な領主の館だけは明かりが多く、その規模から厳

重な警備が敷かれている様だ。

「情報を集めるにはまず人のいる所から・・・が基本よね」  
ミューリは呟くと領主の館に向かって行った。

領主の館にはまともな鎧を着込んだ兵士が詰めており、極めて少数だが騎士らしき者も見えた。

しかし、その騎士の姿はミューリが目を丸くする風体だった。

「近衛騎士？それも上位の？」

立派な鎧を着込んだ騎士は、油断なく周囲を警戒していた。

あれの近くには行けそうにない。

と判断したミューリは、裏手に回り込むと手近な木から館の敷地へと侵入を果たす。

そのまま暗がりを移動し、警備の目を盗んで館に入り込むとちよつとした部屋に入り込む。

そこは使用人の控え室だ。

そこでミューリは一計を案じた。

翌朝、警備の兵士たちは休みに入り、代わりに街の住人が警備を行っていた。

城門前では未だににらみ合いが続いている様だ。

そして館では警備に着いていた兵士に食事が宛がわれていた。

「君は、見掛けない顔だな？」

しつかりとした礼儀を身に付けた兵士たちの一人が使用人の少女に声をかけた。

「はい、私にも手伝える事が無いかとお願いしましたらこちらのお手伝いをするようにと・・・」

少女はそう言つて緊張していた。

兵士は笑いながら謝ると、食事を受け取り食べ始めた。

使用人の少女は兵士たちの間を歩きながら食事を宛がう。

その少女はミューリの変装した姿だとは誰も気づかなかった。



## ミューリの活躍3（後書き）

もう一個続きます。

## ミューリの活躍4

そのままミューリは兵士たちの話に耳を立てて情報を集めつつ、更に厨房などを行ったり来たりしながら隙を見て館の間取りを頭の中に入れていく。

こう言うのは彼女が昔からやっていた仕事柄、得意中の得意な事柄と言えた。

とは言え、余り時間もかけられないので水汲みに行かされたついでに館内を探索してみた。

そうすると館の一角だけがやけに警備が固く近寄り難い箇所を発見する事ができた。

今まで集めた情報から推測するに、逃げ出した領主以外の人物が指揮を取っており、自衛隊を釘付けにしつつ脱出するための準備中であると言う話らしい。

そして、街の人々が守りたいと思えるだけの器量を持つその人物は王族関係者であると言う話も聞いた。

詳しく調査したいところだが、いつまでも留まればその分危険が益す。

そして自分を心配してくれる人たちを早く安心させる為にも素早く離脱しなくてはならない。

(今夜にも街を出ないと・・・)

ミューリはそう判断した。

ミューリは夕闇が迫るなか、館の敷地の一角に潜んでいた。その時、近くで話し声が聞こえてきた。

「もうすぐだな」

「ああ、そしたら俺たちは降伏するんだっけ？」

「おう、一応庶民には寛容らしいからな」

「どうなるか怖かったと言えば見逃してくれるさ」

「どうやら警備についている街の人々が話をしている様だ。」

「姫様が無事逃げれるといいな」

「そうだな。王族でありながら俺達の味方だった方だしな」

ミューリは驚いていた。

まさか匿われている人物が王族関係者どころか王族そのものなのか、しかも姫様と言う呼び方からして考えると、思い付く人物は一人しかいなかった。

（これは・・・凄い話を聞いちゃった）

ミューリはそう思い夜の闇を待った。

日も暮れ、周囲が暗くなったのを見計らい館を脱出する。  
しかし、前日と違いやけに警備が厳しい。

（潜入がバレた？いやこれは・・・）

どうやら脱出が近い為にやや殺気だっている様だった。

これは脱出が難しくなる。

そう考えて暗がりを利用して街のなかを走り抜けた。

気配を消しながら城壁に近付いたが、脱出を目前にして油断したのか、それともしばらく落ち着いた生活が続いていたために腕が鈍ったのか分からないが発見されてしまう。

「誰だ！」

城壁まで後一步の所で発見されたミューリは背後から呼び止められたが、こうなれば、とそのまま城壁に向かって走り抜けた。

「待て！」

「侵入者だ！」

「逃がすな！」

後ろから追跡してくる人々の気配を感じる。

ミューリはそれでも慌てずに城壁に備えられた階段を一気にかけ上がると自分が侵入に使った足場を目指した。

しかし、そこには既に人が集まり足場には到達できない。

「しまった!？」

顔を隠した状態とは言え、正体を知られるのは不味い。

「もう逃げられんぞ!」

「おとなしくしろ!」

降伏しろと言わんばかりの怒鳴り声にミューリは沈黙しつつ懷に忍ばせた円筒形の物体を取り出す。

佐藤が持たせてくれた閃光手榴弾だ。

扱い方は一緒に居たときに教えて貰っている上、実際に使って（佐藤はそれで高橋に殴られているが）みた事もある。

夜の闇に目が慣れてる彼等には強力な武器になる。

ミューリはピンを抜くと懷から取りだし地面に転がした。

一瞬、ミューリを追ってきた兵士や住人の目が見たことのない物体に向く。

その隙を見逃さずにミューリは城壁の外に向けて走り出した。

「待て!」

男たちが制止をかけるが当然無視して鉤爪付きのロープを取り出す。直後、閃光手榴弾は炸裂し、激しい光と音で男たちの視界と耳を封じた。

「うああああ!」

「ひい!」

男たちは悲鳴をあげてその場に伏せる。

それを確認しないでミューリは鉤爪を城壁の縁に引っ搔けるとそのまま城壁の外に躍り出た。

一瞬の浮遊感の後、下に向かって落下するがミューリはロープを握りしめ、落下にブレーキをかける。

革手袋が摩擦で焼け付く嫌な音と臭い、そして両手が焼け付くほど暑くなるがかまわない。

だが、地面までまだ幾らかあると言うのにロープはそこまで届かない。

以前の冒険で短くなっていたのだが、補充する機会が無かったのだ。

だがロープの終点間近で完全に落下を止めると、そのまま手を離し下へと落ちていった。

## ミューリの活躍4（後書き）

第13話はココまでです。

今まで日本や王国の主要人物ばかりで影の薄いミューリを前面に押し出してみました。

もうちよいどころにかならんかったのか？

とも思いますが、まあ、勘弁してください・・・。

で、では次回またお会いしましょう！w

## レノン占領と王国の終焉（前書き）

今回で一区切りつきます。

レノンに潜入したミューリの安否は？

そしてレノンを確保したい日本はどうするのか？

第14話「レノン占領と王国の終焉」お楽しみください。

## レノン占領と王国の終焉

城壁が騒がしくなったのを察知した高橋たちは正面の部隊の指揮は井上と佐藤に任せておけば何とかなると思い、自分は数名を連れて城壁へと回り込む。

万が一の時は実力でミューリの安全を確保する気だった。

「隊長、左側の茂みに人がいます」

サーマルスコープを見ながら周辺を警戒していた部下の言葉に高橋は注意しながら進む。

89式小銃の安全装置を静かに解除し、茂みを目指し並べく音を出さないようにだ。

しかし、その警戒は杞憂で済むことになった。

「ミューリ！」

茂みに隠れていたミューリに気付くと高橋は彼女の下に駆け寄った。

「たか・・・はしさん・・・？」

傷だらけのミューリの様子に高橋はやはり行かせるべきではなかったと後悔する。

一応怪我の様子から命に別状ないとは思うが、高橋はミューリを背負って仲間たちの方向へ走り出した。

「戻るぞ！着いてこい！」

高橋がそう言う必要もなく部下たちは着いて来ていたが、後ろを振り返らなかつた為に気づいていなかった。

トラックまで戻ると即座に荷台を開けさせてミューリを担ぎ込む。

「高橋！ミューリちゃんは！？」

慌ただしい様子に井上が焦った感じで高橋に声をかける。

「怪我はしてるが無事だ！それより一旦後退しろ！ここじゃ落ちて着いて手当ても出来ない！」

高橋も荷台にミューリを横たえながら怒鳴る。



「了解！全員この場より後退する！着いてこい！」  
井上は佐藤にトラックを運転させると自分たちは周りを固めながら移動していった。

街から約1km近く離れると明かりを着けてミューリの傷の状態を見る。

傷の状態を見ると言っても高橋たちは医者ではない。

そこは衛生科から派遣されてきている医官、中田信次なかたしんじの定番だ。

隊の中では最も年長で、指揮権こそ高橋にあるが単純に階級だけなら高橋より上の大尉だ。

隊からは「先生」と呼ばれる中田は素早く怪我を見て応急処置を施していく。

「先生、彼女は・・・？」

高橋の問いかけに中田は怒鳴り付けた。

「隊長たるお前が慌ててどうする！落ち着け馬鹿者！」

普段は隊長たる高橋に部下として着いてきている立場として敬語を使う中田だが、珍しく狼狽える高橋を叱責して落ち着かせた。

「・・・大丈夫、打ち身や擦り傷はあるが命に別状ない。手の火傷もそれほどじゃない」

ミューリに薬を塗り手に包帯を巻く。

意識を失っていたが疲労からだろう。

「詳しい検査をしないと詳細は解らんが、少なくとも頭を打ったとかは無いようだ。少し休めば意識も戻る」

中田の説明に心配そうに見守る高橋や隊の皆から安堵のため息が漏れた。

そしてミューリが目覚めるのは夜明けになった。

ミューリは目が覚めた時、見慣れた天井に飛び起きた。

打ち身などで痛む体だったため、一瞬痛みに体を抱え込む。

しかし、ゆっくりと体を起き上がらせると荷台の後ろから顔をだし

た。

そこには寝ずの晩をしている隊の面々がいた。

ミューリがゆつくり休める様に誰もが周辺を警戒し、トラックに近づけない様になっていたのだ。

「お？もう起きたのか？」

陽気な様子の井上が声をあげた。

その声全員が一斉にトラックに集まってきた。

「大丈夫か？」

その中でもトラックの直ぐ近くにいた中田が具合を尋ねてきた。

「多少痛みますが・・・大丈夫です」

昔に比べたらこんなの慣れっこです、と答るミューリに一通りの診察をすると中田は大丈夫そうだった。

と言って皆を安心させていた。

「それよりも高橋さんは？」

ミューリはいつもいる筈の人がいないのに気付いた。

「ここに居るぞ？」

その声にミューリがふと横を見ると中田と一緒にトラックの近くにいたのか、トラックによしかかる様に立っている高橋の姿があった。それを見たミューリはまた会えた喜びを噛み締めていた。

しかし、それも呑気にしては要られない。

彼女は重要な情報を得てきていたからだ。

「高橋さん、街の人がどうして抵抗を示すのか、その理由がわかりました」

ミューリは自分が見聞きしてきたことを伝えようとした。

だが、高橋は頭を横に振った。

「まずは食事を取ろう？話はそれからでも大丈夫だから」

高橋の言葉にミューリは、はい、と短く答えた。

## レノン占領と王国の終焉2

食事の後にミューリから聞かされた情報は確かに重要な物だった。それが為に高橋は部隊を引き連れて街を一望出来る丘に上がりその様子を偵察する。

「なるほど、街の背後に色々集まっているな」

高橋は双眼鏡を覗きこみながら呟いた。

しかし、物資の集積が上手く行っていないのか、それとも別の理由でかは分からないが未だに脱出と言う事にはなっていない様だった。

「王族がいるなら確保した方が良くないだっけ？」

横の井上の言葉に高橋は頭を横に振る。

必ずしも王族の身柄は必要ない。

別に傀儡政権を打ち立てたり民衆を宿める道具にする気が無いからだ。

あくまでもレノンを素早く制圧し、西に睨みを効かせるのが目的なのだ。

実は日本は既に王都「シバリア」近郊まで進出していたのだが、シバリアから南と西において貴族諸侯が不穏な動きを初めて居たからだ。

南部はそれほど開発もされてない。

だが、西部は比較的开发が進んでいる。

しかも小国とは言え多数の隣国と接していた。

結果、援軍と称して外国の軍を招き入れようとしていたのだ。

今のところ動く国はまだない様だが、ここらで西に睨みを利かす拠点が必要だった。

そこで目を付けたのがレノンだ。

丁度、西部と隣するところに大きな川があり、城塞都市であることが万が一の時でも守りやすいからだ。

「少しでも早く此方の物にしたいんだろ」

高橋はミューリから情報を得て直ぐに後方の本部と連絡を取っていた時の事を思い出す。

「恐らく、降伏を勧告するんだろ。わざわざ王都目前なのに部隊の一部派遣を行うみたいだから」

高橋は最悪、民間人を巻き込んだ血泥の市街戦をすることになるかも知れないと思った。

「素直に降伏してくれるかね？」

自分たちが行った時でも抵抗を示したのだ。

井上がそう思うのは仕方がない。

「いや、あれは俺らが少数だったからだろ？それなりの部隊で退路を断てば降伏もありえるさ」

高橋はそう言ったが、井上は納得できない様だった。

「そりゃそうかも知れんが・・・もし最後の一人まで！て考えてたらどうなるよ？」

その問いかけに高橋は一言だけ答えた。

「その時は街が死ぬ」

その言葉は街そのものが廃墟となる事を示していた。

正午近くになったころ、上空からヘリコプター独特の音が聞こえた。

それも一機や二機ではない。

かなり多数の音だ。

「うわぁ・・・ヘリボーンかよ」

井上が上を通りすぎ、街を越えて背後に着陸していくCH-47チヌークを見ながら言った。

6機の子ヌークはレノンの後背に着陸すると即座に中に搭乗していた兵士を展開させる。

チヌークは輸送ヘリとして自衛隊に採用され、中に兵員30名を乗せる事が出来る。

つまり展開している戦力は高橋たちの5倍の150名。

更に4機が軽装甲機動車を1機が155mm榴弾砲を下ろしていく。最後の1機からは補給物資と共に数人の背広を着た人物が降りてきていた。

「どうやら交渉の為に外向いてきた外務省の官僚だろうと思った。

「まだ来るな」

高橋は上空に展開し街を見下ろすヘリコプターを見た。

UH-1Jが四機にAH-1Sコブラ二機だ。

「対戦車ヘリ、て、敵に戦車は無いぞ!？」

井上が思わず大声を上げてしまう。

AH-1S「コブラ」はUH-1J「イロコイ」と違い純粹に攻撃を目的とした攻撃ヘリコプターだ。

本来、そう言ったヘリコプターは攻撃ヘリコプターと呼ばれるが自衛隊ではコブラを対戦車ヘリコプターとし、AH-64D「アパッチ・ロングボウ」を戦闘ヘリコプターと呼称している。

その性質上、武装は凶悪で30mmM230チェーンガンにロケット弾、対戦車ミサイルを装備する。

もともと、見る限りミサイルは無く、チェーンガンとロケット弾、そしてミニガンポッドを積んでいる様だった。

どちらにせよ、それはレノンを瓦礫の山に変える事が可能な装備だ。

「奴さんが活躍しない事を祈るよ」

予想以上の空中に展開した部隊に井上は本気で祈りたくなった。

それは高橋も同様だ。

「せめて交渉が上手く行くことを祈るしかないな」

高橋の言葉に井上は頷いた。

レノンは突然やって来た空飛ぶ怪鳥の群れに騒然となっていた。次々にやって来て兵士や馬が無いのに動く馬車、そして細長い筒を備えた物……。

見たことの無いその異様な存在に住人は恐怖し、兵士たちは戸惑った。

同様に街の上空にいる怪鳥たちが更に恐怖を掻き立てる。

それは館でも一緒だった。

「脱出を目前にして・・・くそ!」

近衛騎士の一人が机に拳を降り下ろす。

「これでは脱出も難しいかもしれん・・・」

項垂れた騎士がそう言っ外の光景を見る。

街の動揺は押さえきれないだろう。

最悪、街と共に討ち死にしかない。

だが、一人上座に座る美しい女性が立ち上がると場の動揺は静まり返った。

「・・・脱出はもう無理でしょう。せめて街の人々だけでも救わねばなりません」

女性の言葉に騎士たちは色めき立った。

「姫様!我等が血路を開きます!ですから・・・!」

「そうです!姫様には指一本触れさせませぬ!」

口々に声をあげる騎士たちを頼もしく思いながらも、その身を案じる様子を見れば何故、レノンの住人が守ろうとしたのかが分かったと言ふものだ。

「いえ、私の身一つで皆の命が救われるなら私は本望です」

騎士たちは涙ながらに姫、カトレーア・フィン・ホードラーの言葉に項垂れた。

だが、カトレーアは正直怖くて仕方がなかった。

まだ17才と言う若さでしかない。

それが王女と言う立場だからと言って耐えられるものではない。

それが為にカトレーアは身体が震えていた。

異教徒と呼ばれる人々に迫害を続けてきた王家の自分が捕まればどうなるか分からない。

それが更なる恐怖を抱かせていた。

それでも、彼女は最悪自害も辞さない覚悟があった。

王家の誇りを守るためなら、自分に付き従う騎士や兵士、そして慕ってくれている街の人々を守るためならこの命は惜しくない。

カトレアはそう思い、降伏の宣言をしようとした。

その時、ドアを叩く音が響いた。

「失礼します。日本の代表で北野と名乗る者が話し合いの場を持ちたいと来ておりますが？」

報告に来た兵士に視線が集中する。

この後に及んで交渉？

日本は何を考えているのか？

その場にいた者の多くはそう疑念をもった。

「どれだけ連れて来ている」

万が一此方を油断させる為なら容赦しない、と言った雰囲気で騎士が尋ねる。

聞かれた兵士も困惑を浮かべながら答えた。

「は、はっ！ 当人含め三人です！」

その言葉に命知らずなのか？

それともそれで十分と考えたのか？

今一意図が読めず困惑が広がる。

「・・・会いましょう。ここに呼んでください」

カトレアはどの道降伏するのだから、その前に話ぐらいは聞いてみたいと思っていた。

「危険では？」

騎士が警戒すべきとして進言するがカトレアはそれを退けた。

「その気なら話し合いなどせずに踏み潰しているはずです。彼等にはそれが出来るのだから・・・」

そう言われては騎士も引き下がらざるえない。

そして、カトレアに促され報告にきた兵士はそのまま北野を呼び

に走り出した。

「はじめまして、日本国外務省調査派遣隊全権大使の北野武と申します」きたのたける

意外な事に礼儀を尽くす北野にざわめきが始まる。

「おや？如何なさいましたか？まさか蛮族には礼儀が無いと思つておりましたか？」

やや棘のある言い方に眉をひそめる者もいたが、カトレーアがそれを制した。

「失礼しました。私はカトレーア・フィン・ホードラー。この国の王女です」

カトレーアはそう言つて北野に着席を促した。

北野はそれに従い素直に着席する。

ただし、着いてきた二人は後ろに立つたままだ。

「話し合いと言いましたが、どの様な話し合いですか？」

間違いなく降伏を勧めにきたとカトレーアは思っていた。

しかし、北野は降伏は選択肢の一つとしか考えてない。

今まで外交と言う別の意味での戦争をしてきた北野はそこまで簡単な男ではなかった。

「まあ、降伏でも構いませんが、それはお嫌ではありませんか？」

北野の言葉に降伏させると言う意図が感じられずカトレーア自身戸惑いを隠せない。

「それは嫌です。ですが、貴方はそれを勧めに来たものではありませんか？」

北野はやっぱりそう考えていたかと内心ほくそ笑えんだ。

「いえ、降伏してもらつても構いませんが、逃亡して頂いても構いませんよ」

挑発ではなく、純粹にカトレーアたちに好きにきなさい、と言う意図を込めて北野は自分たちの考えを述べた。



### レノン占領と王国の終焉3

「何故ですか？」

残念ながら外交に疎いカトレーアはそのまま聞いてしまう。

だが、北野はそれを未熟とは思わなかった。

経験者ならともかく、外交とは無縁の身でありながら良くやっていると言う印象があつたからだ。

「当然ながら武装解除はして頂きますが、我々はこの街を確保したいだけですからね。そう言う意味では降伏でも逃亡・・・逃亡とは良い表現ではありませんね。ここは放棄としましょう。まあ、どちらでも構わないのです」

北野の話に騎士たちも騒然となる。

はつきり言えば「王族の身柄に興味がない」と言うのに等しいからだ。

「・・・それは私たちに誇りを失わせる不名誉な選択ですね」

敢えてこう言う事で北野の真意を引きずり出そうとする。

しかし、北野にそんな手は通じない。

「我々も名誉や誇りを大切にします。ですがそれは何に対して・・・かの違いではありませんか？」

北野はそう良いながら笑う。

その様子に、ある程度だがどれだけの修羅場を潜って来たのかが伺えた。

「名誉や誇りを守るのも重要かも知れませんが、その為に大局を身誤るのは如何でしょう？この場合、命と言う実を取ることも必要だと思えますよ」

そう言った北野をカトレーアは見つめる。

そこに確固たる意思が込められているように思えたのだ。

「我々が言いたいののはただ一つ、この街、レノンを我々に引き渡して頂きたい。その形がどうであれ我々は貴女方の身の安全を保証致

します」

驚きの提案であつたが、カトレーアは即答を避けた。不名誉な選択かもしれないが、北野の言う様に実を取ることも必要だ。

「では回答は皆と協議してからしたいと思いますが・・・よろしいですか？」

カトレーアの言葉に北野は勿論、と答えた。

「分かりました。結論はそんなにかからないでしょうが、しばらく別室にてお待ちください」

会見はここまでだった。

北野はどう言う形であれ無血開城がなつた事を確信し、カトレーアはどう言う形であれ自分の為に血が流れずに済む事を確信した。

しばらくたち、北野が再び呼び出された。

カトレーアたちが正式回答をすると言うからだ。

（・・・予想より早かつたな。これは最初から結論を出していた様だ。やれやれ、私もまだまだ甘い・・・）

北野は自分のやり方を反省しながらカトレーアの前に出た。

カトレーアたちの様子からして覚悟は決まっている様だ。

「私達の意味をここにお伝え致します」

ただ決まった事をそのまま伝える事務的な儀式の様だが、だからこそ形式は必要なのだ。

「私達は日本に全面降伏しこのレノンを引き渡します」

カトレーアの言葉に北野は放棄を選ばず降伏を選んだ意図を読む。

そうか、だからこそ慕われているのか・・・。

北野は街の住人を残し一人逃げるのを良しとしないカトレアに敬意を持った。

「分かりました。日本国は貴女方を含めこの街の住人に一切の危害を加えない事をここに誓約いたします。万が一の時は厳罰をもってあたります」

北野がカトレアに敬意を持って接する事で逆に信頼を持ってもらえる様に仕向けた。

あざといと言えばあざとい。

しかし、外交とはそういうものだ。

それに向こうがその真意に気付かなければ美談で終わる話だ。

「ありがとうございます」

端的に感謝の言葉をカトレアが口にする。

「では、降伏となりますと武装解除を・・・」

北野がそう言った時、騎士の一人が怒鳴り声を挙げた。

「姫様の身をお前らに任せよと言う気が！」

突然の事態に北野も面食らった。

だが、平静を装い冷静に場を分析する。

「お止めなさい。降伏した以上は仕方ありません。この上は潔く身を任せましょう」

カトレアの言葉に怒鳴り声をあげた騎士が大人しく引き下がった。

「では、武器などの引き渡しは・・・」

カトレアがそう言い出したのを制し北野が話をしだす。

「いえ、武装解除は兵士や民間人に限らせて頂きます。王女様やその護衛の方々はそのままで結構です」

北野はそう言っただけの非礼を詫びた。

万が一彼等が何かしらしようとしても、直ぐに鎮圧できるのもあったが、最低限の武装をしないとやはり安心出来ないからだろうと考えたからだ。

「お心遣い感謝いたします」

カトレアはそう言う頭を下げた。

「ご安心を、貴女方は我が国のお客様として丁重に扱わせて頂きます」

北野はそう答えると背後に立ったままの二人に自衛隊の進駐を指示した。

これを持ってレノンは日本の占領下になる。

そして、この日から2日後、何ら抵抗も受けずに王都シバリアを占領する事に成功した。

その日を持ってホードラー王国は歴史より姿を消し、大陸における日本の領土となった。

時に6月22日、開戦より約二週間の事であった。

### レノン占領と王国の終焉3（後書き）

やっと戦争が終わりました。

これで漸く国内となったアルトリア領域における開発に専念できそうです。

さて、ある意味これで一つの区切りになると思いますが如何だったでしょうか？

文章力が乏しいので読み辛い、分かりにくいとかあったと思います  
が、そこは今後の成長（作者的なw）を待ってください。

その上で皆様が楽しく読めたのであれば書き手としてこれ程喜ばしい事はありません。

では、次回でまたお会いしましょう。

ここまで読んでくれた皆様に感謝の言葉を！

ありがとうございます。

## 日本への帰郷（前書き）

第15話です。

ここから新たな展開を迎えます。

ホードラー王国は無くなり、日本はホードラーを含めた地域の開発を進める。

だが、まだまだ難問は山の様に残っていた。

第15話「日本への帰郷」お楽しみください。

## 日本への帰郷

ホードラー王国が地名を日本領ホードラー地区と名前を変えたのは王国滅亡から3日後の事だった。

これを持ってホードラーは地区の名前となり、シバリアも王都では無くなった。

しかし、まだ元王国南部は抵抗の姿勢を崩していないばかりか、西部に至っては隣国の動きの活発化により不穏な情勢が続いていた。西部の諸侯は隣国の動きに逃げられず、仕方なくそれぞれが独立の構えで動いたのだ。

結果、西部では小国が無数に誕生し戦国時代の様相となり、南部では南部諸侯連合が出来上がりホードラー、シバリア奪還の動きを見せる事になる。

しかし、一方の日本も動けなかった。

アルトリア領域の開発と資源調査、そして何より日本の備蓄資源の問題でこれ以上の軍事行動が取れなかったのだ。

その為、南部諸侯連合に対してはシバリア南部の森林地帯を境に防御線を構築、防御の構えを取り、西部に関してはレノン前の川「リバティ」を防御線にして同じく防御体勢を取るに留めた。

また、王国滅亡に伴い新たに法を制定、布告して治安維持を図った。王国滅亡に便乗して商人やファマティー教会が活発に動き、商品の値上がりや暴動が発生したからだ。

これに対して北野は商品の便乗値上げは独占禁止法を適用、教会の暴動に対しては首謀者たる教会関係者逮捕に留め、参加者たる市民に対しては寛容に努めた。

その為、シバリアは占領してから1週間で沈静化、商人は大人しくなり、教会の暴動も市民が参加しなくなり次第にその影響力を喪つていった。

また、北野は日本の法をほぼそのままに施行し、思想、宗教、信条

の自由を保証し、税も王国時代の6公4民から3公7民へと半減化させて不満の解消を行った。

そのかいあってか、異教徒弾圧、迫害は行われなくなった。

やったとしても新たに配備されたホードラー治安警備隊（日本の警察関係者を幹部に現地人で構成）によって逮捕、拘束され裁判にかけられる。

そう言った様々な手で民衆の信頼を得ると共に、不穏分子の排除を行っていた。

6月30日、東京内閣総理大臣官邸。

鈴木は一枚の報告書を手にわなわなと震えだしていた。

「油田が・・・確定した・・・」

久方ぶりの朗報だった。

戦争中に発見された油田は間違いなく油田として存在しており、しかも埋蔵量は日本がフルに使っても数百年かかると言う試算だった。その報告に鈴木は日本によくやるい兆しが見えた気になった。

しかし、まだ問題は山積みだ。

何せ採掘開始までまだ時間がかかる上に輸送手段がタンカーしかない。

そこで鈴木はパイプラインの製造を同時進行させる事にした。

とはいえ、正式な採掘さえまだなのに見切り発車過ぎるとの批判もあったが、僅かでも時間短縮になるなら、と油田から調査派遣隊基地港湾までのパイプラインを作らせた。

また、これに先だって調査派遣隊基地も名称をアルトリア基地とし、アルトリア領域を正式にアルトリア地区として制定した。

「日本に残った全能力をまず油田に傾けて、それ以外の資源は引き続き調査だな」

伊達が鈴木之苦労を労りながら言う。



「ああ、ただホードラーの鉄鉱山などから微々たる量でも入ってくるからな。しばらくは持つだろう」

所詮は先伸ばしだな。

と自嘲気味に言った鈴木は、それでも安定供給が可能になる努力は惜しむつもりはない。

「うむ、出来れば南ホードラーを完全に支配下に置きたいな。あそこはホードラーでも屈指の資源地帯らしいからな」

ホードラーの国力情報が揃いだした今だから言えるが、どうもホードラーは南部が資源地帯、東部が農業、漁業地帯、西部が畜産地帯と分けられていたのだ。

とは言っても、あくまでもそう言う形に旧王国がしていただけなので調査次第ではまだまだ資源があるかも知れなかった。

「現状は無理だな。これ以上は日本の寿命を縮めるだけだ。今ある領域を開発して力を持たなければならぬ」

鈴木という言葉に伊達は残念そうにしていた。

このまま南部も独立してもらい、対等な国交を持ち貿易、とも考えだが、南部の南部諸侯連合はあくまでもホードラーの奪還を掲げており極めて敵対心が強い。

これでは国交など結べない。

「西部の独立した諸侯も似たようなものだが、まだそっちは何とか交渉次第だな」

伊達はそう言って席を立った。

そろそろ記者会見しなくてはならないからだ。

「もうそんな時間か・・・よし、行こう」

鈴木はそのまま立ち上がると記者会見に望んだ。

日本国民にこの報告書にあった事を伝えるために、そしてその為の協力を求めるためだった。

## 日本への帰郷2

記者会見に望み、国民に報告し終えた鈴木に記者が一斉に質問を浴びせてきた。

埋蔵量は？

石油関連の統制は？

今後の予定は？

等々質問には暇がない。

しかし、この正式発表に伴い明るい兆しはまだ未開発のアルトリア地域へと意識を向けさせるには十分だった。

アルトリアと言うフロンティアを目指す動きは民間で大きな勢いを持つ事になる。

近い内に渡航を制限付きでも許可すべきかも知れないと鈴木は思った。

アルトリア地域への渡航許可は未だに無いが、これを機会に制限付きでも企業を中心に渡航が許可されだす。

その第一陣は月も変わった7月9日にアルトリアに向けて出発した。この第一陣が新たな出会いをもたらす事になる。

7月18日、アルトリア地区アルトリア基地。

アルトリア基地と名を変えた調査派遣隊基地は以前とは違い活発な様相になっていた。

久し振りに日本に帰れる高橋たちは一週間の休暇が与えられたのだ。「うーん！やっぱり日本に行けるとなると嬉しいねえ」

井上が久し振りのアルトリア基地に感慨を覚えつつも、一月以上離

れていた故郷に思いを馳せる。

「そうですね。何だか何年も離れていた様な気分ですよ」

佐藤もそう言って井上に同調した。

ただし、高橋はあまり気がない様だった。

「なんだ？日本が恋しくないか？」

井上がそう言って高橋の様子を不思議そうに見る。

「・・・別に、ただ帰ってもする事が無いだけだ」

井上はその様子に何かを察した。

だが、空気を読めなかった佐藤が、何故不満そうなのか分からないために言ってしまった。

「家族に会えるじゃないですか？」

井上が佐藤の不用意な言葉に、バカ！と言った。

「家族・・・家族ねえ・・・」

高橋のその様子に佐藤も漸く理解した。

高橋はその家族との関係に問題があった為に調査派遣隊に志願していたのを・・・。

その時後ろから声がかけられた。

「家族に何かあるんですか？」

振り向いた三人は、そこにシャインとミューリが居るのを見た。今聞いて来たのはシャインだな。

と井上は理解した。

好奇心が強いシャインは何にでも首を突っ込みたがるのだ。

とは言え厄介事には基本的に首を突っ込まないのだが、今回は何が厄介事なのか分かっていない。

「あ・・・それは・・・なあ？」

「僕に振らないでくださいよ！僕は事情を知らないんですから！」  
井上と佐藤が騒ぐが高橋はそれを無視した。

「俺の両親は・・・俺が兵隊やってるのを嫌がつてるんだ」

高橋の言葉にシャインは何故？と言う表情を見せた。

「高橋の両親は・・・平和市民団体のメンバーだからなあ」

井上も諦めた様に話し出した。  
そして説明する。

「それじゃ、ご両親は高橋さんが自衛隊なのを・・・」

佐藤はかける言葉が見付からなかった。

平和市民団体、と聞けば聞こえは良いが、内容は現実を知らない夢想集団と言えたからだ。

高橋はその両親がやってる活動に疑問を持っていた。

まだ小さい自分を保育園などの施設に預けて平和運動とやらに熱中する姿を見れば疑問も生まれよう。

常に家に居ない、学校の行事にも全く来ない、学校で作った物を見せて誉めて貰おうと思い持ち帰っても興味も持たない両親・・・。  
しかし、休みの日には家族で出掛ける事もある。

ただし、それは平和運動と言う活動に、ではあったが・・・。  
結果、高橋は高校までは両親の言う通り出た。

だが、大学には行かなかった。

両親は落胆したが、高卒でアルバイトなどでお金を稼いだした高橋に両親は熱心に平和とやらの話をした。

多分、そのまま自分たちの活動に息子である自分を引き込もうとしたのだろう。

だが、高橋は20歳を迎えた春、自衛隊へ入隊を決めた。

言わば両親への当て付けだ。

反対する両親に高橋はいい放った。

「子供を放置してやる平和運動は楽しかったかい？俺はあんたらを許さない。あんたらが反対するならなおのこと自衛隊に行く！」

当時の事は今でも思い出された。

あれから6年は経つが、両親から来る手紙は「早く辞めてくれ」ば

かりだった。

だから高橋は手紙は読まずに処分していた。  
読む価値がない。

万が一謝罪の手紙だったとしても、もうどうでもいいと思っているからだ。

「だから今さら日本に帰るにしても友人も居ないしな」

事も無げに言う高橋だったが、佐藤は何を言うべきか言葉が見付からない。

そんな佐藤に高橋が笑いながら、お前が気にしてどうする？  
と言った。

「まあ、なんなら俺の家に来いよ。妹を紹介するぜ？」

重たい話を聞かされたにも関わらず暢気に井上が言った。

もつとも、井上は知っていたから今更なのだ。

「紹介してどうするんだ？ 確か一人暮らだらう？」

井上の妹は確か今年で大学三年生のはずだ。

「何なら貰ってやってくれ」

馬鹿な事を言うなと高橋は頭が痛い思いで一杯だった。

何より井上を「お義兄さん」と呼ぶことにゾツとしかない。

「いいじゃ・・・」

「ダメー！ー！」

意外なところから反対意見が出た。

その出所に井上は、あれ？と言った感じだ。

佐藤は先程の重さからいきなり軽くなった場に着いて来れていない。

### 日本への帰郷3

「な、何が駄目なんだいミューリちゃん？」

嫌な予感を立て続けまさかとの思いで井上が聞いてみる。

「え？え〜と・・・」

言葉に詰まるミューリの様子に井上が殺気を込めて高橋を見た。

「？なんなんだ？」

高橋は何の話かさっぱり分からない様子だ。

だが、井上はそんな事にはお構い無しに笑顔で高橋に接近する。

「おいおい・・・一体な・・・ぐえ！」

高橋は何の話かを聞こうとしたが、井上は素早くヘッドロックをします。

「高橋く〜ん？どう言う事が説明してくんない？」

キモい言葉使いに佐藤がゾツとする。

「な、何の話だ！いた！いたたたたた！」

惚けた訳では無いが高橋のその答えは井上を刺激しただけだった。

「喧しい！チャキチャキ答えろ！」

高橋と井上はそのまましばらくそうやって騒いでいた。

そんな二人を見ながらシャインもミューリを苦笑いするしかなかった。

空港設備はまだ完成してはいないが、アルトリア基地は陸海空のどの設備もある複合基地となっていた。

その空港設備は未完成でも離発着が可能になっており、頻繁にC-130H「ハーキュリーズ」が発着陸を繰り返し物資を日本から運び込んでいた。

大半は油田採掘やパイプラインの資材などを運び、少数だがホードラーから運び込んだ 資源を積んで日本へ向かっていた。

高橋たちはその内の一機に便乗して日本へ向かう事になっていた。

現在アルトリアにおける貨幣は日本円だが、ホードラーにおいては銅貨や銀貨、金貨と言った代物な上、貨幣経済が上手く機能しておらず難航していたりする。

乗り込みを終えてC-130が離陸を開始する。

大半の隊員に取っては久しぶりの日本は帰郷の様なものだ。だが、高橋だけは気のない顔だ。

「いつまで不貞腐れているんだよ・・・」

井上の呆れた様な言い方に高橋も悪いとは思った。

「ま、買物でもして気を紛らわすさ」

そう答えて高橋は水を差さないように気を使った。

「しばらくアリスト村ともお別れですね」

保護した村人たちが再び生活を始めた村はアリスト村と呼ばれていた。

アルトリアに一番最初に出来た居住地と言う意味があるらしい。

「そうだな。また志願しなければ行くことは無いだろうけどな」

井上の言葉に誰もが口々に答えた。

また志願しますよ。

それは高橋も同じだ。

どの道、日本では駐屯地以外に行くべき所はない。

それを思うとアルトリアは新しい自分の故郷に思えた。

だからこそ思う。

またこの地に帰ってくる。

それまでは「いつてきます」と・・・。

### 日本への帰郷3（後書き）

第15話はここまでです。

殺伐とした物から一転し、暫くは内政に勤めることになると思います。

取りあえず短いですが、また次回でお会いしましょう。



## 日本での休暇（前書き）

日本に帰って来た高橋たちだったが思いがけない事情により休暇は・  
・・。

第16話です。

更新はちょっと遅れる予定です。

## 日本での休暇

――7月18日、日本海上空。

高橋たち特殊任務部隊は一週間の休暇の為に日本を向けてC-130Hにて移動中だった。

しかし、後一時間という所で想像もしない事件に巻き込まれた。と言うか事件が起きた。

貨物室で談話していた所に貨物室担当になっていた乗員が来たのだ。それ事態は普段からありえる事だが、その乗員が見慣れぬ荷物を見つけた事からそれは始まった。

「すいません、この大きな革袋は誰のものですか？」

その問いかけに答えられる者はいない。

皆、手荷物程度の物だからだ。

「日本に輸送予定の貨物じゃないのか？」

高橋の言葉に乗員が首をかしげる。

「いえ、今日の貨物はコンテナ一個ぐらいで他には・・・」

乗員の言葉に一瞬緊張が走る。

ホードラー制圧に抵抗するテロリスト！？

そう思うのは誰も責められない。

なぜなら、今は沈静化、と言うよりホードラーにおける弱体化しているファマティー教の教会が、以前より暴動を扇動し、テロリズムを展開していたのは記憶に新しい。

もしかしたらそのファマティー教のテロリストが何かしらの爆発物やそれに類するテロを実行していたら？

緊張した空気の中、高橋が油断なく革袋に接近する。

乗員を後退させて革袋の革紐を慎重に解いた高橋は、数人が周りで

万が一に備え待機したのを確認してから革袋を一気に開けた。  
その中身を見たとき、高橋のみならず全員が一斉に声をあげることになる。

「なにしとんじゃあああああ！」

それは非常に困った事であり、非常にどうしようもない事件だった。

同日、東京内閣総理大臣官邸。

「・・・話は聞いた、が、私にどうしろと言うのかね？」

鈴木は小松基地から防衛省に上げられた報告に頭が痛かった。

「どうしろ、と言う話ではない。どうしたらいいか、と言う話だ」

伊達も頭痛がする思いだった。

鈴木や伊達に報告した伊庭自身、これの対象に困っていた。

「テロ目的ではないと断言出来ますが、何分こんな事態は想定外でして・・・」

普段は冷静かつ合理的な思考をする伊庭でさえも想定外どころか思考の斜め上な事態に頭を抱えていた。

「単純な密航者、とは出来ないのが辛いな」

鈴木は報告書を机の上に放り投げるとため息をついた。

「現行法では日本領となってるアルトリア地域からの密航だからな。何よりこの連中と関わりが深い」

伊達は臨時編成である特殊任務部隊の面々が書かれたリストを見ながら言った。

「・・・下手に特例を認めるとわんさか来たりしかねないしな」

鈴木の脳裏に戦後直後の密入国者の問題が浮かんでいた。

実際はそこまでの能力は無いのだが、それが起きては面倒だ。との考えがあった。

「取り敢えず、搭載貨物に紛れ込んでいたのだから拘束の後に強制送還かな？」

これしか無いのではないかと伊達が言ったが、伊庭は別の方法を提示した。

「甘いかも知れませんが、敢えて向こうからの日本視察者、もしくは研修者扱いにすべきでは？一応報告ではかなり日本に協力してくれていますし……」

双方の意見を聞きながら鈴木は頭を抱えた。

流石に罰するのは不味い。

現地ではまだ施行していない幾つかの法令が混じっているため、現地に適用出来なかったのだ。

「……もういい、私の責任で対処するしかないな」

鈴木の諦めた様な言い方に二人も諦めた。

「伊庭君、研修者として扱ってくれ。色々法制上不味いのは分かるが今は下手に騒げない」

鈴木の判断に伊庭が善処します。とだけ答えた。

「馬鹿野郎！何て事をしてくれたんだ！」

小松基地の一室高橋が本気で怒鳴り声をあげる。

目の前ではミューリが涙目でうなだれていた。

これは周りも押さえようがない。

高橋たちはもう今更だから構わないが、可哀想なのは高橋たちを運んできたC-130Hの乗員だ。

安全航行の確認ミス、と言うことで地上待機を命じられたのだ。

これは確かに乗員にも不手際があった。

それは間違いない。

しかし、それとこれとは別だ。

「アルトリアじゃ多少の事は目を瞑れるが日本じゃそうは行かないんだ！」

高橋は本気で怒っていた。

ミューリが如何なる事情があろうと密航した事には代わりない。

それはかなり軽率で許されない行為だ。

故に他の隊員も庇うに庇えないのだ。

「・・・」

もうミューリは涙目どころか泣いていた。

流石に罪悪感があるがこればかりは高橋も押さえられない。

罪悪、自分の責任にしてしまつか・・・。

その実、高橋は全部自分が悪いと言う事にする気だった。

それでも難しいのは分かっていたが、こうでもしなければ助けようがない。

その時、部屋のドアが開いた。

「失礼します」

凜とした声と共に書類を持った女性自衛官が室内に入ってきた。

「この度の事態の解決に当たります四宮しのみやかなこ加奈子曹長であります」

ビジッとした敬礼をした四宮に高橋が答礼した。

「大陸でのご活躍は耳にしております高橋少尉」

四宮はそう言つとミューリに向かった。

## 日本での休暇2

ミューリは四宮のキツそうな表情に怯えた。

井上も内心、怖そうなネーチャンだ、などとは思っていたが表には出さない。

「さて、今回の事態に対しては既に箝口令が敷かれています。万が一にも洩らした場合は防衛機密に抵触し罰せられますのでそのつもりでください」

そう言ってから書類を広げる四宮はミューリを安心させる為に笑いかけた。

「大丈夫ですよ。一応お客様との扱いになりますから」

その言葉にこの事件に対してかなり上の方で対処されたのが分かる。ただし、まさか防衛省長官や内閣総理大臣や幹事長が関わっているとは思えないが・・・。

「これから提示する書類すべて一通りに署名捺印して頂きます。その上で監視付きでの行動を許可されました。つきましては・・・」この四宮の様子から長くなると悟った高橋はため息を付きながら温情措置に感謝した。

結局、高橋たちも動けるのは翌日になったが、ミューリの行動に対しての罰則はなかった。

ただし、C・130Hの乗員は規定の確認を怠ったとしての罰則（これも軽くなつた）、そして隊の責任者である高橋はしばらく基地から出られなくなった。

もつとも高橋はあまり外に出る気も無かったので、せいぜい1日でも出られれば色々買ってきて来れると考えていた。

一方のミューリは監視として隊の中からくじ引きで（誰が監視になるかで決着が着かなかった）二名が選出されミューリと行動を共に

する事になった。

くじを引いたのは井上と佐藤だ。

狙った様な選出に隊の誰もが「井上さんのイカサマだ!」と口にしたが、井上はくじを引く前に見抜けないのが悪い、と一蹴した。

「すみません、私のせいで・・・」

休暇で基地から出る他の面子を見送る為に高橋はゲート前に着ていた。

「・・・」

外出不許可になった高橋にミューリが頭を下げるが高橋は沈黙したままだった。

泣きそうなミューリの頭に高橋は手をおいて優しく撫でた。

「済んだ事は仕方がない。俺の事は良いから楽しんで来なさい」

泣きそうになったミューリに高橋はそう言った。

いつまでも引きずっても仕方がない。

むしろこれを口実に外出しなくて済んだ事を喜ぶべきかも知れない。

「佐藤、これ俺の口座から出して置いたからミューリの為に使ってやってくれ」

アルトリアに行っていた時の分の給与と手当て分の資金を佐藤に渡す。

「何で親友の俺にじゃないんだ?」

井上が不満そうに言ったが高橋は冷たく言いになった。

「お前は無駄遣いするのが目に見える」

その答えに井上が抗議してきたが無視した。

「いいんですか?」

佐藤の問いかけに高橋は頷いた。

「どうせ俺が使うにしても使い途は限られているんだ。構わないよ」  
むしろ使ってやってくれと思う。

もともと、色々物資が不足する中でどれだけ意味があるかは不確定ではある。

だから使いきってもいいぐらいだ。

「あ、あの・・・」

そんな高橋にミューリはおずおずと前に出てくる。

「いいから行きなさい。大丈夫、もう怒ってないから」

そう言つと宛がわれた一室に仕事があるので向かつていく。

「すみませんでした！」

ミューリが高橋の背中に向けて頭を下げた。

高橋はそれを振り返らずに手を振って答えると仕事に向かつて歩き出した。



### 日本での休暇3

それぞれがそれぞれの目的に一旦別れた後、井上、佐藤、ミューリの三人は取り敢えず井上の実家に向かって電車を使い移動を開始した。

ミューリは取り敢えず周りから奇異の目で見られない様に小松基地の女性職員から私服を借りて着ていた。

その手触りや感触、軽さから王族や諸侯が着る物より上等な物であると思つたミューリは目を見張ると共にそれが一般流通している事に驚いていた。

更に電車に乗つた時などは、何時の時代の人だ？と言つぐらいはしやいでいた。

これでは幾ら服装をそれらしくしても無意味だ、と佐藤は思つたが、電車内は限りなく無人に近かつた。

「資源問題の影響ですかね？」

佐藤は井上の意見を聞きたくてその方向に目を向けた。

井上はようやく使い道が出来た携帯をいじくりながら情報を集めていた。

「みたいだな。どうも企業は開店休業状態らしい」

井上の実家は小さな町工場だ。

だから仕事が無くなり倒産してるだろうな、と井上は思つた。

「・・・まさか天井からぶら下がって無いよな・・・？」

かなり不謹慎かつ不吉な事を口に出しているが、実際は結構心配だつたりする。

「・・・まあ、債権に関しては銀行も取引を停止してるみたいなので大丈夫だとは思いますがね」

佐藤の慰め、と言うより呆れた感じの言葉ではあるが、井上は幾らか助けられた感じがした。

「おお！元氣そうだな康二！」

井上の想像の斜め上を行った元氣な父、井上安平<sup>いのうえやすひら</sup>が出迎えてくれた。

「・・・親父、元氣そうだな」

安平は息子の帰還に喜び酒を取り出した。

この物資不足で色々統制されているなかで酒をどうやって調達しているのか不思議だった。

「なあに、自前で作っただよ」

堂々と密造酒宣言されて井上が啞然とする。

（なるほど、井上さんより井上さんのお父さんの方が遙かに上なんだ。・・・色々な意味で・・・）

佐藤が二人の様子にこの二人が親子であることを認識した。

ただし、井上の方がまだマシだと言う不本意な認識だったが・・・。

「ところでその娘さんは？」

安平が井上にミューリの事を聞いてきた。

「ああ、この子は・・・」

説明しようと井上が口を開いた時、安平が何かに気付いた様な表情をした。

「ま、まさか・・・」

何を言い出すか分からない父親だから「嫁か！？」ぐらい言つと井上は思っていた。

「大陸から拐つて来たのか！？」

余りにもズレた、と言つか斜め上の考えに井上がガツクリと肩を落とした。

（井上さんが・・・振り回されている）

滅多に見られない珍しいものを見た気持ちになつていた佐藤が代わ

りに答えた。

「詳しくは言えませんが一応お客様です」

佐藤は当たり障りのない様に説明する。

ミューリの立場は研修者と言うだけなら答えても良いとなっていたが、この人では変にばらされるところか誇張されて広められかねない。

だが、佐藤の考えとは裏腹に安平は腕を組み考えたした。

「おいおい、考え込む様な事かよ？」

井上が安平にそう言っただけならやめれ、と言った。

「康二、何か事情があるようだから何も聞かなかった事にしとくよ」  
真面目な返答に井上は遂にイカれたか？と考えてしまった。

「詳しい事情が話せないなら話さなくていい。だが、せつかく来たんだ。楽しんでいてくれ」

安平は非常識な人間だが、人の事については異常な程に察しが良いのだ。

普段の行動と言動が故に実の息子にさえ誤解されているが、ただ者ではなかった。

### 日本での休暇3（後書き）

まだ続きます。

## 日本での休暇 4

三人はそのまま井上の実家で安平の歓待を受ける事になった。

「明日からあつちこつち案内するよ」

初めて日本に足を踏み入れたミューリを井上は案内することにした。

同日、小松基地

小松基地では外出許可取消しを受けた高橋は、これを機会に特殊任務部隊によるアルトリア、ホードラー両地域の町や村を回る計画を立てていた。

ホードラー占領の当初より領主が存在しないため、野盗などに身を変えた傭兵や兵士に対する備えが甘くなっている。

ついては自衛隊の駐留が必要な主要地域を除いた集落に対し、自衛隊から幾つかの部隊が定期巡回する事になったのだ。

そして時と場合によっては野盗の根拠地に対する攻撃を行う事になったのだ。

元々はその仕事は休暇の後に行く予定ではあったが、思いがけずに時間ができたから丁度良かったと言えた。

「高橋少尉、お茶でも如何ですか？」

そんな高橋のところに四宮が来た。

「ああ、ありがとうございます」

高橋はそう良いながらも書類からは目を離さなかった。

今高橋は机を借りて書類を書いている。

案外書類仕事に向いているのかテキパキと仕事を進めていた。

そんな高橋を後ろから四宮は見ていた。

実は四宮は調査派遣隊に志願していたが、選定に漏れてしまいアルトリア（当時は呼び名が無かったが）に行くことが出来なかった。父親が大学で植物学を教えているのもあって、彼女も植物学を学んでいた。

それ故にアルトリア帰りの高橋に自分もアルトリアに連れて行つて欲しいと考えていた。

しかし、それ以前に現地国家と最初の接触をし、交戦し、終戦までアルトリアで戦った高橋に興味を持っていたのもまた事実だ。

「高橋さんはまたアルトリアに行かれるのですか？」

休暇が終わってから現地にまた行くかは本人の意思次第だ。

高橋は既に自分の意思を明らかにしているので行くことは決定している。

「ん？ああ、行くよ」

高橋はお茶を手にしながら答えた。

「もし宜しければ私も行きたいのですが？」

予想してない言葉に高橋は、は？と間の抜けた声を出してしまう。

「私もアルトリアに行きたいのです。選考漏れましたが、やっぱり未知の世界に興味がありますので」

四宮の言葉に高橋はうん、と唸った。

高橋はアルトリアは四宮が思っている様な良い世界ではない。

今のアルトリアやホードラーはともかく、今度は不穏分子の警戒に向かうので何が起きるか分からない。

最悪、また戦いが起きる可能性もある。

「単純に興味本位なら止めときなさい。そんな甘い物では無いから言葉を選びながら高橋は無駄かもしれないとおもいつつ言ってみた。」「何が起きようと覚悟はあります」

威勢の良い四宮に高橋はため息をつく。

「何の覚悟だ？」

高橋の問いに答える四宮に、やはり、と思わざる得ない。

「勿論、万が一の時に命を落とす事になってもいい、と言う覚悟で

す」

高橋は四宮にそんなものは求めていない。

それを理解してもらわねばならないと思う。

「そんな覚悟は要らん。俺が覚悟すべきだと思つのは『殺す』覚悟だ」

高橋がそう言つて四宮の目を見る。

明らかに動揺したのか目が泳いでいた。

「殺す・・・覚悟・・・？」

動揺した四宮は高橋が何を言わんとしているかが分からない。

「はつきり言つて殺される覚悟なんざ邪魔なんだよ」

分かるまで考えろ、と言わんばかりに高橋は書類にまた向かった。それを見ながら四宮はただ黙って立っているしか出来なかった。

#### 日本での休暇4（後書き）

お待たせしました。

これで第16話終了です。

うん、色々まとめ切れてないorz

もっと話を見直して繋げ方を考えねばなりませんね。



## 緊急事態（前書き）

さて、これより大陸の話に戻ります。

休暇中の高橋たちは出てきませんが、大陸で起きた問題に日本はどのように対応するのか？

と言うお話になります。

では第17話「緊急事態」お楽しみください。

## 緊急事態

同日、アルトリア北部、大森林地帯近郊。

この地域に派遣された田淵は不満だった。

田淵自身のミスだったが、初戦を飾った高橋たちに比べ、指揮放棄の行動が問題視されずと後方で補給科だったのだ。

今回は名誉挽回として送り出されたが、そんな事よりも次の昇進試験が気になっていた。

とは言え、試験を受けるにしても今のままでは昇進など無理だ。

だからこの森林地帯に来たのだが、遠くから観測し変化があったら報告しろ、と言う厄介者扱いだったのだ。

「何故俺がこんな・・・」

一人ももんとしながらも、平地から大森林を観測し続けていた。高機動車が使えるのは良いが、結局田淵に与えられた任務は任務と言える様な内容ではなかった。

「班長、今日も異常はありませんね」

部下の一人がそう田淵に声をかけた。

連れている部下二人は田淵のミスを知らない。

しかし、だからこそ不幸だったのかも知れない。

「異常なんかあるものか」

吐き捨てる様に言うときまた大森林を見る。

だが、ここでふつつつと田淵に欲が生まれてきた。

（この時代遅れの世界では自衛隊は無敵だ。ならもつと接近しても良いんじゃないか？）

万が一の時にまた責任問題になりかねないのだが、田淵は現代技術

で武装した自衛隊が野蛮な原始人に負けるものか、と言う感覚に捕らわれた。

今の日本の状況を客観的に見るなら、新しい問題は出すべきではない。

未知の領域に対してなら慎重になるべきだ。

だが、一度失敗している田淵は、今度は何かしらの成果が必要だと思ったのだ。

「もう少し近づくぞ」

突然の田淵の命令に部下は当然ながら慌てた。

「し、しかし我々は現在地で・・・」

だが、田淵は聞く耳を持たなかった。

自身の現在の立場に対して焦りが田淵にそうさせたのかも知れない。「言われた事をそのままやってたら何時までも使いつ走りだぞ！」怒鳴り付けながら早く動かせ、とばかりに蹴飛ばした。

部下二人は顔を見合せながら渋々車両を大森林に向けて走らせる。背の高い草が視界を限定し、彼等の侵入を阻むが特に邪魔になる物もなく高機動車はどんどんと近付いていく。

田淵は上のハッチを開いて身を乗り出した。

「ふん、こんな簡単な任務に何時までも関わってられるか」

そう言つて不敵な笑みを浮かべたが、それは自らが築いた実績からではなく、他人が必死に築いた自衛隊の実績によしかかった慢心でしかない事に彼が気付くことはなかった。

また、彼等が大森林を監視すると同時に、彼等自身もまた監視されていることにも気付かなかつたのは不幸だった。

大森林の目の前に着いた彼等は、一先ずこれ以上の接近をやめ観測に入った。

高機動車の上部から上半身を出しながら双眼鏡を覗く田淵だったが、大森林の異様な静けさが気になった。

「やけに静かだな・・・？」

そう言いながら大森林を見る。

遠目では分からなかったが、以外と茂みが少なく車両でも入れる事が分かった。

「これならまだ行けるな」

そう言つて田淵は更に前進を命じる。

だが、流石に二人の部下は嫌がった。

「何があるか分からない以上は不用意に入るべきでは・・・」

慎重な意見を田淵は一笑に付した。

「怖いだけだろ。なんならここから徒歩で帰つてもいいのだぞ？」

逆らう事は許さない口調に部下はため息を吐いた。

仕方なくそのまま前進を開始した。

森の中で方向感覚を見失わない様に慎重に車両を進める。

「何もないじゃないか」

軽く笑いながら堂々とする田淵にそれはやって来た。

「警告する！」

突然耳元で聞こえる厳しい声に田淵は度肝を抜かれた。

「な！？」

思わず周囲を見るが何も見当たらない。

「今誰か何か言ったか！？」

田淵にいきなり怒鳴られ部下は二人とも怪訝な表情だ。

「は？いえ、何も・・・」

「誰も何も言つてませんが？」

ばかな、自分だけにしか聞こえなかったとも言つのか！？

田淵は狼狽えながらも周囲を見張る。

するともう一度先ほどの声が聞こえた。

「警告する！これより先は我等森の民の領域！直ちに出ていけ！」

「またも警告の声が聞こえた。」

田淵は今度こそと思いい下の部下に声をかけたが二人は田淵の頭がおかしくなったのでは？と言った目を向けただけだった。

（そんな馬鹿な・・・）

二人の様子に田淵はキョロキョロと落ち着き無く見回したが、何も見付けられなかった。

「班長、もう気がすみましたか？」

明らかに馬鹿にした様子になった部下に田淵は愕然としていた。

その時、視界に何か動く者を見付けた。

田淵は9mm拳銃を抜くと安全装置を解除、スライドを引き初弾を装填する。

田淵の行動に危機的な物を感じた部下は即座に動こうと身をよじった時、田淵が木の上の動く何かに向けて9mm拳銃を発砲した。乾いた破裂音が数回森の中に響き渡り、木の上の何かが落下した。

「はあはあはあ・・・ざまあ見る・・・」

田淵は血走った目で落ちた何かを凝視した。

それは粗末な服装の人に見えた。

田淵はまだ息のある人に止めを差そうと9mm拳銃を再び向けた。

ドスツと言う鈍い音が田淵の拳銃を持った腕から聞こえてきた。

田淵が自分の腕に目を向けると一本の矢が突き刺さっていた。

「う、うわああ！」

まさかの事態に田淵が悲鳴をあげる。

だが、その田淵を待っていたのは無数の矢が自分に向けて飛んでくる光景だった。

「うわあ！？」

「班長！？」

上半身の至るところに矢を浴びた田淵が車内に崩れ落ちてくる。

二人は田淵の状態から、田淵にもう息が無い事を知ると直ちに高機動車を発進させ、元来た道に引き返して行った。

森を抜けるまで高機動車を叩く金属音がなり続けたが二人はそんな事よりも早くここから逃げ出したかった。

田淵は自衛隊最初の戦死者として名を知られることになる。

## 緊急事態 2

7月19日アルトリア基地

「大森林で攻撃を受けた？」

伊藤は上がって来た報告に首を傾げた。

未開の地であるとは聞いていた為、人が居るとは思っていなかったのだ。

「はい、また田淵直人軍曹が戦死しました」

その報告の方が衝撃的だった。

何せ能力的問題はあるにせよ自分の部下に戦死者が出たのだ。

それは旧王国との戦いでも出なかった物なのだ。

まさか、と言う思いの方が強い。

「攻撃を受けた状況は？」

伊藤はそう聞いた物の全く要領を得ない報告を聞かされただけだった。

曰く、田淵が幻聴を聞き出したかと思うと発砲、直後……。

これでは何を言っているかさえ疑わしい。

「薬でもやってたのか？」

あり得ないと思うがそう言わざる得ない報告なのだ。

「薬物反応はありません。ただ、弓矢による攻撃があったのは事実です」

部下の報告に伊藤は腕を組んで考え込む。

しばらくして報告書を手に帰還した二人の元に足を運んだ。

数時間後、事情聴取を終えた伊藤は漸く幾つかの事態を把握した。それはかなり面倒な問題だ。

「司令と北野さんに報告しなければならぬな」

そう呟くと、聴取結果を報告書として出すように部下に伝えると自

室に足を向けた。

## シバリア行政府。

しばらくシバリアに釘付けとなっていた北野は行政府に日本の省庁から派遣されてきた官僚に引き継ぎを済ませ帰ろうとしていた。宿泊先に行って体を休めたら明日にはアルトリア基地、忙しい身の上だ。

「ああ、そう言えば今晚は夕食に誘われていたな」  
北野は思い出した様に時計を見る。

午後5時半、今から行けば間に合うか？

そんなことを思いながら車に乗り込む。  
そこに行政府の人間が走ってくる。

それを見た北野はまだ何かあったかな？  
と思いながら窓を開けた。

「どうかしましたか？」

何気無い一言だったが、アルトリア基地からの報告に北野は呆れ返らざる得なかった。

「・・・明日の朝一に連絡機を使います。準備してください」  
流石に今日これからは無理があるので翌朝にアルトリアに向かうと伝えると北野は夕食に招待されている迎賓館に向かった。

「・・・この大変な時期によくもまあ・・・」  
死んだ人間には悪いが何をやっているのか？と無理矢理にでも問いただしたくなる。

「漸くシバリアも安定してきたのに・・・これは厄介だな」  
そう言いながら新たに遭遇した森の現地人に興味があった北野は、ついでに夕食会で何かしらの情報を得ようと思った。



カトレーアが少ない予算をやりくりして行われた夕食会は質素なものだった。

だが、元々日本としても冷遇するつもりも無いので変に贅沢をしなければそこまで苦勞する筈のない予算を割出していたはずだったが、予想してなかった事だったのだが、カトレーアは王族の立場（あくまでも今は元王族扱い）であるにも関わらず慈善事業家だった事だ。

その為、迎賓館は身寄りの無い子供たちがたくさんいた。また元近衛だった騎士たちは今や簡単な武装（戦闘用とはいいがたい剣など）を持ったカトレーア専属のSP（要人警護官）となっていたのでその彼等にも少ない予算を割いていたのだ。

（これは予算配分を考え直す必要があるな）

流石に元王族であったカトレーアを粗末に扱っては要らぬ誤解を招きかねない。

そう言う意味では彼女もまた厄介な存在ではある。

しかし、当の本人からすれば王族と言う重荷から解き放たれた解放感と日々の充実感から気になってはいない。

「カトレーア嬢、もし不自由がありましたらお申し付け下さい。出来る限り便宜を図りますよ」

北野の言葉にカトレーアは首を振った。

「いえ、私は貴殿方に助けて貰うばかりで何もして差し上げられません。ですからこのままで良いのです」

時に無欲は如何なる知謀であろうと太刀打ち出来ない。それをまざまざと見せ付けられた思いだ。

（ある意味、彼女が彼女の幸せを掴むまでは日本が責任を持たねばならないな）

自分たちの都合でこの国を滅ぼした以上は、偽善であれ自己満足であれやらねばならないと思っていた。

後日、北野はこれにより自分自身の身の振り方を真剣に悩まねばならなくなる。

それはさておき、北野もただ食事をして終わりには出来ない。

ダメで元々でも大森林について知ってる限りの事を聞かねばならないのだ。

「時にカトレーア嬢、一つお伺いしたいのですが？」

畏まった北野にカトレーアは笑顔で楽にしてください、と言った。

「それで、何をお話すればいいですか？」

愛嬌のあるカトレーアに北野は不躰ながら大森林について聞いてみた。

「アルトリア北部の大森林ですが、人が住んでいるとか何か聞いた事はありませんか？」

いくら何でもこれは無駄かな？

と北野は思ったが意外な事に返答があった。

「大森林ですか？たしか何年か前に大森林に進軍した国がありましたわ」

その答えに北野の目が鋭くなる。

口の悪い知り合いからすれば「あの目の時は悪巧みか陰湿な事を考えてる」となるが、北野をよく知る者からすれば「ああなったら北野は最善と言える思考をする」となるから不思議だ。  
ただしカトレーアからすればまた別だ。

（お仕事の事です）

ちよつと寂しさを感じるカトレーアだが、男とは時に全てを捨てて大義に生きる事を知っている。

だから何も言わなかったし態度にも出さなかった。

「いや、失礼しました。ちょっと問題が起きてましてね」  
ただしカトレーアの誤算は北野自身、勘の鋭い人物のためバレバレである事だ。

しかし、ここで北野はミスを犯した。

事もあるうちに問題が起きている事を暴露してしまったのだ。

これには直ぐに気付いたが今更だ。

（私もまだまだ、だな）

ため息を吐きたいのを我慢しながら北野は己のミスを悔いる。

「問題ですか？」

やはりそこは突いてくるよな。

北野はカトレーアが外交や政治に疎いが感覚だけで本質を突いてくるだけの能力がある事を初めてあつた時から知っていた。

「と、なればやはりエルフ絡みですね」

カトレーアはSPの一人が持つてきた紅茶（この世界にも品種が違うが紅茶があつた）を口に運びながら言う。

「エルフ？」

ファンタジー小説とかに出てくるあれか？と北野は想像する。

「エルフは森の賢者とも言われる種族です。見た目は人で違いは耳くらいですね」

その説明に北野はまんまファンタジー小説だな、と思いつつも耳を傾けていた。

「何年か前に大森林に進軍した国はエルフと争い敗北した、と聞き及んでいます」

敗北と聞いた北野はエルフと呼ばれる種族はかなり強力な戦闘能力を持つのだなと感じた。

「エルフ・・・ですか・・・やはり何百年も生きるのでしょうかねえ」  
半分独り言だが、その通りなら根の深い問題になりかねない。

だが、カトレーアは意外な言葉を発した。

「たしかに長生きですが、せいぜい150年くらいですよ？」

流石に自分のファンタジーに対する知識が何ら役に立たない事を実

感ぜざるえない。

普通エルフと言えは何百年も生きる森の妖精と描かれるからだ。

「人より少し長生きなだけです」

そう言われた北野はまだ何とかなるかも知れないと思った。

「なるほど、それは良い事をお聞きしました。いや、我々の常識が通用しないとは分かってましたがここまでとは」

笑いながらそうは言ったものの、北野は心底痛感していた。

「そうですね。私たちも私たちの常識以外は存在しないと思ってました。貴殿方と会おうまでは・・・」

そう呟くカトレーアに北野は罪悪感が浮かぶが直ぐに打ち消した。彼女らには悪いが北野ら日本人に取って日本の命運が何よりも優先されるのだ。

それは残念ながら事実であり、日本が転移してきた以上は運命と言わざるを得なかった。

「さて、貴重なお話をお伺い出来ましたし、今日はここでおいとまさせていただきます」

北野はそう言っただけで席を立った。

カトレーアも席を立てて北野を見送るために正面玄関へと歩き出す。

「今度、時間が作れば此方をご招待させて頂きますよ」

北野はそういつと会釈した。

「楽しみにさせて頂きます」

カトレーアもそう言っただけで会釈する。

北野はそのまま外に止めてある車に乗り込むと迎賓館を後にした。

### 緊急事態3

7月20日 アルトリア基地会議室

翌日、早朝にシバリアを発った北野は9時頃にアルトリア基地に到着した。

その足で緊急会議を開くと詳細な報告を受けた。

「では、我が国の自衛官により森の住人一名が負傷、あるいは死亡しているのですね？」

北野は報告を行った伊藤を冷たく見る。

伊藤に責任がないとは言わないが、それでもこれは事故の様な物だ。こんなので伊藤と言う優秀な人物を失う訳には行かないが、一応今なお全権を任された北野は感情を排してなければならぬ。故にどうしても冷たい視線になりがちだった。

「しかし、此方も一名死亡してますが・・・」

遠慮がちに外務省官僚が口を開くが、そんな事はどうでも良いといふ放った。

「問題は此方が加害者で向こうは正当防衛を行った被害者と言う立場です」

この状況になった場合、自衛隊による制圧なんかは出来ない。幾らなんでも正当性がないのだ。

「しかし、それは幾らでも話をすり替えれるのでは？」

先程の官僚がそう言ったが森はその意見に反対した。

「私達自衛隊を関東軍にする気ですか？」

流石に官僚は黙るしかない。

まさか日本が今更軍国主義に走る訳には行かないからだ。

北野は官僚のアホさ加減に呆れるしかない。

「一番それをさせまいとする我々官僚が自衛隊に指摘されるとは何事ですか？」

北野にもそう言われた官僚は恥ずかしさのあまり小さくなっていた。  
「この問題の解決を図るにはやはり交渉ですね。大森林は何が何でも開発しなければならぬ地域でもありませんから、これ以上の厄介事は何としてでも早期解決を図らねばなりません」

北野の言葉に森も伊藤も柿野も同意した。

「問題は誰が交渉するのか？誰が交渉役を護衛するのか？ですね。交渉の内容は我々は関知出来ませんし」

柿野はそう言つて北野以外の官僚を見たが、皆下を向いていた。万が一が怖い、責任を取りたくない事無かれ主義全開である。

「・・・私が行くしかないみたいです」

元からそのつもりだったが、外務省官僚の情けなさに北野は嫌味たっぷりに言つた。

「では、護衛は最小にせねばなりませんから、数人志願者を募りますか」

伊藤がそう言つた時、北野が先に指定してきていた。

「ああ、こう言うのには特殊任務部隊が適任でしょう。その中から何人か指定して着いて来て貰います」

この北野の発言で特殊任務部隊は厄介事を解決するための部隊と言う認識が広まったのは言うまでもない。

### 緊急事態3（後書き）

第17話終了です。

如何だったでしょうか？

多少なりともキャラたちの人間模様が見えたのであれば幸いです。

さて、次回は大森林。

未知の領域に生きるエルフが関わってくる話になります。

いやあ、やっぱり異世界の住人には亜人とかは欠かせない（偏見ですが）でしょうw

そしてもう一つ欠かせないものがありますが・・・w

それは次回でのお楽しみですw

では、また次回でお会いしましょう。

追伸：ご意見ご感想心よりお待ちしております。

## 新たな任務（前書き）

急遽呼び出された高橋。

しかし彼は休暇を楽しむ部下を思い独自に動く。

その結末は？

第18話「新たな任務」お楽しみください。



## 新たな任務

7月22日 小松基地

呼び出しを受けた高橋は無線電話でアルトリアの伊藤の話を聞いていた。

「つまり、休暇は取り消しですか？」

高橋の不満を受話器の向こうにいる伊藤は感じとるが、この際四五の言ってられない。

「残念だがな」

それを聞きながら高橋は考えていた。

人選は最小で高橋自身に任されている。

何も今休暇を取ってる仲間を引っ張り出さなくてもいいか？

「中隊長、人選は私がしても構いませんか？」

高橋はそう言ってにやりと笑みを浮かべる。

「人選は一任する。数人を選出して直ちにアルトリア基地に来てくれ。足は手配済みだ」

伊藤は高橋が何を考えているかを想像していたが、休暇取り消しに対する不満ぐらいだろうと認識していた。

「了解、直ちに行動を開始します」

そう言って無線を切る。

数人か、なら本当に数人で納めるか。

良からぬ事を考えながら小松基地の待機所へ足を向けた。

「と、言うわけで俺と一緒にアルトリアに向かう気のあるやつはいるか？」

唐突に高橋が簡単な説明と共にアルトリアに行くかの志願者を募る。待機所にいた何人かがざわめく。

その中に四宮もいた。

「私が志願します」

いの一番に席を立つた四宮に高橋はやっぱりと言っ思いだ。

「自分も行きます」

もう一人立ち上がる。

まだ20そこそこの若者だが、居ないよりいい。

他の自衛官はひそひそと話すばかりで他に志願者はでない。

想定よりマシだな、と考えた高橋はこれで志願を打ち切った。

「よし、上に話は通してある。即座に装備を確認し1030時（ヒトマルサンマル時と読み時間を表す）までに第二倉庫前に来い。遅れたらおいていくぞ」

高橋が命令を終え背を向けた瞬間、二人が待機所から飛び出して行った。

「さて、俺も支度するか」

高橋は二人が飛び出して行く様を見ながら一人呟くと与えられた自室に向かった。

同日 小松基地10時30分

第二倉庫前のC-130Hに荷物が運び困れていく。

その前に高橋と四宮、そして多田昭彦ただあきひこが揃っていた。

三人は即座にC-130Hに乗り込むと飛行時間を待つ。

それから30分後に彼等は空へと飛び立った。

飛行中に高橋はアルトリアでの注意か心構えを説明する。

アルトリアではちよつとした行動が大きな問題に成りかねない。

また、今までの常識が通用しないので、下手な優しさは自身のみな

らず仲間の命を危機に晒すのだ。

だから殺される覚悟ではなく、殺す覚悟をと四宮に言っていたのだ。四宮はそれを頭では理解していたが、感情的にそれで良いのか疑問を持っていた。

だが、高橋は疑問を持つかも知れなくても、そう言うところであると言う認識を持たなければ危険きわまりない地だと教えた。

「隊長は人を撃った時どう思いましたか？」

人に向けて発砲したことのない多田は不安があつたのだろう。

しかし、高橋はあっさりと言つてのける。

「夢中だったから何も、後で怖くなつたけど慣れたな」

ホードラーの騎兵を相手にしたときから高橋は撃つべき時には全く躊躇わなくなっていた。

撃たれる側にも家族など守るべきものがあるはずだ。

だが、一々そんな事を考えてたら此方が殺られる。

それなら何と言われようと殺る側に回る。

それが今の高橋だ。

ただし、そんな高橋も子供などを相手には撃ちたくないと思う。

だが、敵として撃った相手が年端も行かない子供だった事など何度もある。

その度に後悔し、悩み、それでも前に進んできた。

そうしなければならぬところ、それがアルトリアだと思った。

「自分は撃てるでしょうか？」

多田は人を撃つと言う行為に躊躇いはない。

だが、だからと言って撃てるかどうかは別だ。

「撃てるさ。撃てなきゃ死ぬだけだ」

敢えて高橋は突き放す。

四宮はそんな高橋に基地で見た時とは打って変わって冷たい印象を感じた。

（これがアルトリアで戦った人なのか）

そう思いながら自分は果たしてどうなのか？  
と言つ自問自答を繰り返していた。

## 新たな任務2

同日 アルトリア基地

アルトリアに到着してから二人には休息を指示した高橋はその足で司令室に向かった。

正式な基地司令がまだ決まっていないうちに森が司令代行だった。

「やあ、よく来たね」

北野が先に司令室に来ていた。

白々しい挨拶だが北野とて致し方ないと判断しての事だろう。

だから、高橋はお気遣いなく、と答えるだけにした。

「すみませんね、休暇中でしたでしょうに」

そう言われた物の高橋は外出取消しを受けてたので気にならない。

「早速、状況をお伝えしますね」

北野はそう言つて高橋に資料を渡す。

田淵の独断専行、それにより現地人に死傷者がおり、また現地人の

反撃に田淵の戦死。

あまり好きになれない人物だったが、一度は上司だった人だ。

その冥福を祈った。

「つまり、我々は北野さんを護衛しながら大森林に行けば良いのですね」

高橋の話に北野は満足そうに頷いた。

「その通りです。しかも軽武装で」

内心楽しくは無いが、北野はさも楽しそうに演じた。

ある意味、高橋の反応を見てみたかったのだ。

「・・・なるほど、中々に愉快的状況ですね」

北野の言葉に高橋は小銃は持つて行かずに9mm機関拳銃を持つて行ければまだマシかと考えた。

問題は9mm機関拳銃を高橋は扱った事がない。

なので、射撃時の反動などがどの程度か分からない。

「軽武装となりますと護衛は極めて困難です。ほとんど形ばかりの護衛になりますか？」

少し悩んだ様子の高橋に北野は、下手な人物よりは安心出来そうだった。

これが頭から無理と考える様では話にならない。

そして簡単に可能と言うなら論外だ。

出来るとも言わず、不可能とも言わない高橋は状況判断が的確と言えるのだ。

そう言う意味でなら任せていい人物と言えた。

「遺書ぐらいは用意する時間をあげますよ？」

北野は半分厚意で言ったが高橋は首を横に振った。

「読ませる相手がいませんし、何より遺書を残す様な仕事をする気はありませんよ」

自棄にならずに生きて帰る事を前提にしている点は評価に値すると北野は思った。

「よろしい、本日これからでは時間的に夜になりそうですが善は急げです。直ぐに向かいましょう」

北野は立ち上がると即座に動く旨を伝えた。

「夜間に向かうのは構いませんが、大森林に入るのは私と北野さんだけです」

北野の背中に投げ掛けられた高橋の声は一瞬、北野を驚かせた。

「当然でしょう？万が一にも退路は確保してもらわねばなりません」

そこは専門の高橋、北野の足りない想定を補足するのに十分だった。

「なるほど、わかりました。あんまりゾロゾロ連れて行っても逆に警戒させてしまいますからね」

北野は高橋の提案を了承すると部屋から出ていった。

二人のやりとりをじっと見ていた森は正直賛成しかねる思いだ。だが、二人がそのつもりなら口は挟めない。

「高橋少尉、少しいいかな?」

森に声をかけられた高橋は森の前に歩みでる。

「正直言って心配なんだ。勝算はあるのかね?」

しかしその問いに高橋は無い、としか言えない。

高橋としては北野次第と言えたからだ。

「北野さんの手腕に期待しますよ」

それがダメなら恐らく無事では済まない。

何せ相手は森を常日頃から生活の場に行っているはず。

ならばレンジャー隊員でもかなり難しいはずだ。

レンジャー訓練も受けてない高橋自身、実際に北野を守りながら森から脱出など不可能だと思うからだ。

「・・・北野さん任せか、やるせないな」

森も高橋の考えと同じだ。

これが一個師団のバックアップを受けるならともかく、実際にバックアップは無い。

ならば北野の交渉に全てを託すしかないのだ。

「よろしい、万全を尽くして臨んでくれ。それしか言えん」

森は半場諦めた様に言った。

それに対し高橋は敬礼で答えた。

大森林に向け高機動車を運転する高橋は油断なく周囲に気を配る。

万が一大森林前で攻撃を受けても言い様にだ。

「大分暗くなりましたね」

四宮は周辺が暗くなる様子にやや戸惑いがあつた。

それは仕方ない事かもしれない。

訓練や演習で山奥に行った時ならともかけ、普段は小松基地と言う周辺が街で一定の明るさがあるなかで暮らして来たのだ。

この飲み込まれる様な暗さには圧倒される。

今のこの一向にある光源は高機動車のヘッドライトだけだ。

ちなみにこの高機動車はトヨタが開発した陸上自衛隊向けの軽人員輸送用車両だ。

以前は三菱ジープと呼ばれた車両を使っていたが、装甲が脆弱で歩兵からの銃撃で搭乗する兵員の死傷から守る形で全面的に対小銃レベルでの装甲を施した車両だ。

その分、車重が増した為に悪路走破能力の低下や調達コストの高騰などの運用面の問題が起きた。

しかし、それを補ってあまりある多様性（多数の派生型がある）は今や自衛隊において三菱ジープより遥かに高い。もつとも、未だ三菱ジープが多数使用されてる現実是如何に自衛隊が少ない予算に苦しんでいるかの左証でもある。

その高機動車は大森林目前に到着する。

周囲は静けさに包まれ、不気味と言える様相であつたが、高橋には確かな敵意を感じとる事ができた。

幸か不幸か今までの戦いで培われた能力と言える。

「総員このまま待て」

高機動車を停めた高橋は一人車両を降りた。

四宮と多田は何が起きるのかと言う感じだったが、高橋は高機動車から離れると大声をあげた。

「自分は日本国陸上自衛隊所属の高橋少尉です！我々に敵意はありません！話し合いをしたいのですが！」

突然の高橋の行動に北野も含めた三人は驚いた。

こんな何も無い平原でいきなり大声をあげるのだ。

普通なら正気を疑いたくもなる。

しかし、その高橋の行動は間違いではなかったのが証明される。

何時から居たのか、数人が草むらに隠れていたのだ。

それぞれが弓矢とおぼしき武器を構えている。

それは間違いなく高橋を照準している様に見えた。

「話し合い？」



人影の一人から高橋に確認を込めてだろう。

そう問いかけがあった。

「話し合いです。不幸にも行き違いがあり、此方の人間が貴殿方の仲間に危害を加えてしまった事は謝罪してもしきれません。ですがその事だけで手を取り合う機会を失うのは双方に取って損失だと思います」

高橋の冷静かつ、そして真摯な言葉が通じるかは神にしかわからないだろう。

だが、これが証拠とばかりに高橋は銃を捨てた。

「話し合いを持って事態の収束を我々は臨んでいます。話し合いが不可能であるなら我々は即座に立ち去ります。如何ですか？」

そこまで言われて問答無用で攻撃を仕掛けては完全に自分たちが野蛮であるとの証明だ。

だから人影の一人は高橋に敢えて歩みよった。

「私はエルフ13氏族が一つ、守りの氏族であり第7氏族のアーヴァインだ。話し合いと言ったが、場所は此方で指定しても良いのかな？」

アーヴァインと言った見た目には若いエルフが高橋に告げる。

高橋はその要求に従うと伝えた。

「よろしい。我々も力で事態の解決は望まない。故に貴君の申し出を受けさせてもらう」

アーヴァインと名乗ったエルフはそういうと高橋に着いてこいと指示した。

「すみませんが、私は護衛役であり交渉役の人はあの中です。その交渉役の人と共に行くのが私の役割ですがよろしいですか？」  
相手を刺激しないように高橋は慎重に言葉を選んだ。

## 新たな任務2（後書き）

書き足し完了。

続きはまた今度です。

### 新たな任務3

高橋の言葉にアーヴァインは、ふむ、と呟くとその場で返答してき  
た。

「よからう、護衛が一人着くくらいなら我々の判断に変更は不要だ」  
その有難い申し出に高橋は頭を下げると北野を呼び出した。

呼び出された北野は、この短いやり取りから小細工は出来ないと考  
えた。

「私が交渉役の北野です。提案を受けてくださり感謝します」  
そう言ったがアーヴァインは頭を振る。

「実際に話し合いとやらをしてみないことには結果は分らんぞ？」  
現実的な考えにこれならまだ話し合う余地はあると北野は思った。  
旧王国に比べれば話が出来ただけ遥かにましだ。

「そうですね。ですが一度の間違いで手を取り合えない、と言われ  
るよりは遥かにマシでしょう」

アーヴァインは慎重に北野と言う人物を見定める。

そのアーヴァインの目に北野は油断ならない人物として映るが害意  
を持った人物ではないとも判断できた。

「それは此方もだ。ただ一度の誤ちが未来永劫付きまとうのではこ  
の世は何と救いの無いことか」

まるで役者の様に言うアーヴァインに北野も同様に役者の様に返す。  
「救いの無い世の中なら我々の間だけでも救いのある世にしたいも  
のです」

互いに真意を隠したやりとりだが、同時に互いに争いを求めてでは  
なく、本当に話し合いで解決、そして互いの友好を願っているのは  
理解できていた。

「では着いて来なさい。しばらく歩き通しになるが良いかね？」  
エルフの青年、アーヴァインはそう言って運動の苦手そうな北野を  
気遣う。

「大丈夫。その程度で立ち止まらねばならぬくらいなら初めからこうして来ませんよ」

確固たる意思を持って北野もアーヴァインの問いかけに答えた。

「よろしい、では案内しよう」

そう言つて右手を上げたアーヴァインは背を向けると大森林に向かつて歩き出す。

高橋はアーヴァインの手の動きが何かの合図に思い周辺を見渡した。なるほど、すでに包囲されてたか。

高橋の目に暗い周辺に溶け込んだエルフが数人ではなく数十人隠れていたのが見えた。

レンジャーでもこうは行かない。

それをまざまざと見せ付けられた様にも思えた。

エルフの集落まで歩き通したものの、正直言つて北野はへとへとだった。

（いずれ道を切り開くぐらいはしたいですね）

集落を見た限りでは文明レベルは中世より低い感じはしたが、それは彼等の生活が森での暮らしに合わせているのだろう。

その証拠に彼等の持つ弓矢等の武器、革鎧は優れた技術で作られていた。

弓は単純な木製ではなく、複数の材質を織り混ぜて作られた強化弓であり、革鎧も軽さの割にかなり強度がある。

これだけの装備なら下手な兵隊よりもお金がかかっていそつだ。

高橋と北野は比較的大きな木造の家に案内される。

アーヴァインは代表を呼んでくるまで待て、と言うと毛皮を床に敷いた。

アーヴァインが出ていった後、二人が地面に敷かれた毛皮の上に座ってエルフの代表を待っているとにわかには外が騒がしくなった。

「どうやら来たみたいですね」

高橋が人の気配を感じとり北野に教える。

「では、これからは私の役目ですね」

そう言うて北野は姿勢を正した。

その時にドアが開き複数のエルフが入ってくる。

エルフたちは皆、高橋たちと同じように床に座るとそれぞれがそれぞれの氏族の代表であると言った。

つまりこの場に全エルフの氏族の代表13人が揃っているのだ。

ちなみにアーヴァインは第7氏族の長として話し合いに参加すると言う。

「さて、ワシがエルフ13氏族のまとめ役であり第1氏族「管理者」の長バーテックじゃ」

一番年長の老人が改めて自己紹介をする。

北野も自己紹介を済ませると早速交渉に入った。

しばらくお互いの主張が続いた。

その上でやはり先日 of 偶発的衝突が問題視された。

「我々としてはその件につきましては謝罪申し上げますしか言えません。また、もしも補償を求めるをならば別に話し合いの場を持ちたいと思っています」

北野は敢えて日本の非を認めた上で、再発防止に務め補償もすると言った。

「別に死んだ訳ではないから補償は要らぬ。それとそちらの死者についてだが・・・」

バーテックはそう言うて北野の反応を見る。

北野はここでエルフ側に責任云々を議論するつもりもない。

非は此方にあるので何ら求める気がない、と伝えた。

「ふむ、しかし、そうもいかぬ。如何なる理由であれ死人を出した以上はそれなりの行為をしなければ我々の誇りが許さぬ」

北野が初めから非を認め、率先して頭を下げる事で互いの不信感を早期に解決できた瞬間だった。

これだけでも北野の外交的手腕の勝利となり得るが、北野はそんなものが欲しい訳ではない。

北野はこの機会にエルフとの交友を持ちたいと思っていたのだ。

「ならば、こうしてはどうでしょうか？」

北野はそう言つて一つの解決策を提案する。

それは、エルフは先に手を出した此方の非を許し、逆に日本はエルフにより出た死者の事を許す。

と言つものだった。端から聞けば死者の田淵を蔑ろにしているが、田淵の命より日本がエルフと交友を持つ方が万倍も大事だ。

この際、田淵の死はその足掛かりになつてもらおう、と言う辛辣な考えがあつた。

エルフたちは少し話し合つた後、それで良いと合意した様だった。それを聞いた上で北野は交友を持つための交渉に移る。

「我々としては今後の事もありますので国境の制定、並びに国交を持ちたいと思うのですが如何でしょうか？」

この提案にエルフたちは怪訝な表情になる。

「国交？我々は国家ではないが？」

バーテックは長い髭をなでながら北野の話に答えた。

「我々の常識から言えば国が領有を主張しなければ先に主張した側の物になります。大森林が貴殿方の国であり領土、とならない場合は開発しようと言う動きがあるのです」

半分でまかせだが、半分は本当だ。

日本本土では大森林を開発しようとする動きがある。

北野はそれを言っているのだ。

「それはそちらの都合ではないか？」

秩序の名を持つ第3氏族の長が北野に反論する。

「そうです。此方の都合です。ですが、国であるなら対等に付き合えますし、お互いに様々なことで手を取り合えると思います」

北野としてはこの領域がエルフの国であるならば、その方が都合がいい。

何故ならばこの広大な大森林を開発出来ないのは惜しいが、下手に管理する必要がないからだ。

また、旧王国とは違い話を通じるならば交易も可能になる。

今の日本はアルトリアとホードラーと言う2つの地区を持つものの、交易すべき対象が居なければまともに付き合える国もない。

そう言う意味では日本はまだ孤独だったのだ。

戦後から孤立と言う状態に拒否的反応を持つ日本人が多くなった。

そのストレス解消の的にしたいのだ。

「我々の国と言われましても、我々の何処の氏族から誰を王にせよと申すのですかな？我々はそれぞれの役割を担い、それぞれの氏族に上下を作らなかつたから今までやってこれたのですよ？」

アーヴァインは今更、国家と言う形は無理だと断じた。

それを聞いた時、北野はこれだ！と思った。

「王など要りませんよ」

北野の話にエルフたちは不思議そうな表情をする。

人間は王とか神とかで上下を着けたがるのではなかつたのか？

人間はそうやって支配する側とされる側に別れるのを求めているのでは？

と言う感じだろう。

「現に我が国日本にも天皇陛下と呼ばれる象徴は居りますが王はいません。政治は議会による話し合いで決まります」

予想外と言える北野が語る日本の政治体制にはエルフたちも目を見張った。

「ふむ、詳しい話を聞きたいな。が、少々夜も更けた。後日改めて話し合いたい为宜しいか？」

まとめやくであるバーテックはまず日本と言う国が如何なる国かを  
知る必要がある。

その為に国交云々の話はこの場で深くやらずにいた。

北野としては勢いのまま決めたいところだったが、拙速に事を進めて台無しにするよりは、とこの場での話を切り上げる事にした。



### 新たな任務3（後書き）

な、長くなりすぎました。

ま、まあ、その分読めると思ってくださいw

これにて第18話終了です。

次回以降話が短く（気分で長くなりますがw）なります。

また、20〜24話辺りで一端終わりにして新章として新たに小説を作ります。

理由？

そんなの「新しき世界へ」だけで60話以上書いたから読みやすくするために決まっていますw

いえ、管理が面倒なだけですw

と、言うわけでもうちよつとお付き合いください。

気が向く方は新章も引き続き読んでくださると幸いです。

ま、気が早いですけどねw

では今回はこの辺で次回でお会いしましょう。

## エルフの里（前書き）

途中ですけど書き込んでおきます。

エルフとの話し合いで誤解を解消した日本。

その中でエルフの人々とありのままに接する高橋。  
その胸に去来するは一体何なのか？

第19話「エルフの里」お楽しみください。

## エルフの里

会談が一つの終息を見た時、その場はそのまま宴会の場となった。エルフたちは料理と酒を最大限に振る舞い、高橋や北野はそんな彼等に親しみを感じる。

何処にでもある気の会う仲間との酒をのむ間柄の様だった。

それは彼等エルフの考え方が日本人と合うことを示した最初の事例だ。

昔から日本人は自然と共に生きてきた。

時代が変わり自然そのものを軽視した様に思えるが、その根幹にある日本人の性質は変わらない。

そして、他者を尊重し、その思想、宗教、文化に関わらずお互いを認め会えるなら如何なる相手であろうと友人となり得る事も・・・。普段は気にしなくなっている、何より相手を歓待するその精神は建前や形だけのものではない。

日本人は悪い形でそれを為してしまうが、それはやはりお人好しであるからかも知れない。

そしてそれはエルフたちも同じだった。

だからこそ、互いの利益を越えたこの場だけのものであっても相手を尊重できた。

それは日本が求めて止まなかった本当の意味での友人との出会いだったかも知れない。

夜は更ける。

だが、今の彼等に時間は関係ない。

ただ、共に手を取り合える相手と初めて出会えたのだから・・・。

翌朝。

彼等は普通に接してきた。

古くからの友人であるように。

まだ、詳しい話もまだだったが、やはり北野の真摯な対応が実を結んだ結果と言える。

そんな北野に高橋は敬意を持った。

彼は下手したら自らの命が失われるかもしれない状況でも決して臆することなく向かって行ったからだ。

この世界の常識からすれば北野の行動と発言は必ずしも好意的には受け止められなかったはずだ。

だが、エルフたちは理解してくれた。

そう言う意味では北野は打算的ではあったにしろ、日本の将来にあるべき何かを残したと言える。

「北野さん、お加減は如何ですか？」

気持ち良いくらいの朝にアーヴァインが北野に挨拶を交わす。

「ええ、お陰様で気持ちいい朝を迎えました」

世辞抜きでそう言えたのは北野に取っても例外だった。

「何より後に残らないお酒の作り方を学びたいくらいです」

正直言つて酒に弱い北野はあれだけ飲んでも悪酔いせず、二日酔いもせずに済んだ事は非常に有り難かった。

「ははは、我々が口にする酒の作り方を教えては将来交易するとき到我々が損しますよ」

その言葉は少なくとも交易を視野に入れた話が今後期待できるものだ。

しかし、それもこれからの北野の手腕にかかっている。

「お酒が苦手な私としてはエルフの皆さんと仲良くして行きたいですね。何せこんなに気持ちよく飲めるのですから」

朗らかな笑みで答える北野にアーヴァインも笑う。

まるで何年も付き合っている友人の様だ。

「一応、我々は貴殿方日本との交易は視野に入れています。ただ、細

かい事はやはり後日になりそうですね」

隠すべき事柄をアーヴァインはあっさり言ってしまう。  
自分たちの利益と言うものを考えない訳ではない。

言ってしまうてもお互いに損がない上に信頼を寄せてるからだろう。  
本来、騙し合いとも言うべき国同士の付き合いである外交をすべき  
立場にある北野にすれば新鮮な気持ちだった。

彼が甘くなった。感化されたと言うなら易しいだろう。

だが、それを非難するのは間違いだ。

元の世界なら間違いだが、この世界は元の世界とは違う。

如何に相手との信頼関係を築けるか？

それは杓子定規な考えでは出来ないのだ。

一瞬で相手の心理を読み、その上でどうするか？を瞬時に編み出せる  
北野だから出来た事だ。

「さて、続きは後日、とは言いましたが具体的な日取りを決めたい  
のですか？」

先程までの友人の顔から真面目で油断してはならない表情をみせる。  
それに伴い北野も気持ちを切り替えた。

「分かりました。直ぐに伺います。それと貴殿方を見る限り護衛は  
不要と思いますので彼は好きにさせたいのですが？」

北野は真面目にそう言った。

単に信頼ではない。

それに信用があったからだ。

アーヴァインも、集落から出なければ構わないと答える。

「では、高橋君、集落の中でしばらく休んでください」

そう言われては高橋も拒否すべき理由がない。

初めて見るエルフの集落に興味もあったので北野の言う通りにしよ  
うと思った。

「了解しました」

それだけ答えると高橋はヘルメットを脱ぎ辺りを散策しだした。

自分が来た意味があつたかはかなり疑問だったが、高橋は集落を見て歩いていた。

集落のエルフが高橋に視線を興味の向けるが、高橋はただのどかな集落の様子を何気なく見ていた。

「あのう・・・」

そんな高橋に背後から声がかけられる。

なにかと思ひ後ろを見ると少年や少女といった感じの男女がいた。

「え、えつと何かな？」

高橋の返答に一齐に逃げ出す。

何が起こったのか分からない高橋はただ呆然とその有り様を見ていた。

「なんだ？」

訳が分からず高橋は首をかしげる。

しばらくそのまま待つているとまた集まり出す。

（もしかして、怖いのかな？）

高橋は自分がそんなに怖いかを考える。

しかし、思い当たりがありすぎた。

（生死を賭けた場にいた時の雰囲気を感じ取ったのかな？）

結構、暢気にそんな事を考えてたが、また集まった少年少女たちは高橋に声をかける。

「あの・・・外の人ですよね？」

外の人と言う表現に違和感を感じたが、大森林の外と考えると分かる気がした。

「ああ、そうだけど？」

そう言った高橋に表情を輝かせた少年少女たちから一齐に質問が投げ掛けられた。

外の世界はどんなものか？

貴方みたいな人はどれだけいるのか？

外の世界の文化はどんなのか？

様々な質問を一齐に向けられても高橋は聖徳太子ではない。

一つつつ聞かねば答え様がない。

「待て待て、質問は一つづつにしてくれないか？」

高橋の言葉に子供たちはひそひそ話をし、順番を決めた様だ。

「あの、貴方は何処から来たのですか？」

最初の質問がこれだった事は高橋には救いだったかもしれない。

「ここからもう少し南にアルトリアと呼ばれる地域がある。そこから海を越えた先の日本と言う国からだ」

簡単にそう答えると彼等（彼女等）は互いに手を取り合う様に歓声をあげる。

よつぽど高橋の様に外から来る人は珍しいのだろう。

そんな印象を高橋は受けた。

「外の世界、てどんな感じですか？」

続けざまに来た質問には高橋は簡単に答えられない。

何せ日本と言う国とアルトリア、そしてホードラーしか知らないからだ。

「俺も簡単に言えないが、酷い世界さ」

そう言いながら高橋はホードラーにあった旧王国、その王国に巣くう諸侯と言う魑魅魍魎。

そして宗教と言う底の見えない存在を分かる範囲で答える。

それと同時に自分たちがそう言った物とは違うこと、そして、そう言った存在とは別に新しい、いや、別の考え方が、生き方があることを高橋は出来る限り答える。

それは自身にも向けられた言葉かもしれない。

如何に元の世界、そして日本で生まれ育ったとは言え、比較的長くこの世界の標準的思想や常識に接してきたのだ。

自分たちが絶対の正義とは言えない上、それ以外の価値観が間違えとは思えない。

故に高橋自身、揺らぐ物があつた。

だが、自分たちがやってきた事で特権階級者から恨み、妬みを買うことはそれほど苦痛ではない。

ただ、本当に自分はこれで良いのか？

そう言った意味での再確認が出来た気がした。



## エルフの里 2

だが、それでもこう言える。

「それでもどんなに酷くても何時かは分かり合えると思う。それを、平和な世界になると信じて俺はこの世界に生きている」

建前でも何でもない。

これが高橋の本音だ。

幾ら酷い世の中でも決して明けない夜が無いように、酷い世が続くわけではない。

高橋はその先駆けにエルフたちがなっで欲しいと切に願った。

その時、エルフの少年が呟いた。

「でも、外の人間たちは神の教えとかでエルフを・・・」

一瞬、高橋は耳を疑った。

神の教え？ 何処で聞いた？ たしか・・・。

直ぐに思い当たる。

ファミティー教だ。

「ちよつと詳しく教えてくれないか？」

高橋の言葉に少年は少しづつ語り出す。

それは高橋に新たに別の決意をもたらすことになる。

北野は後日の話し合いの場をアルトリア基地で行う事に多少なりとも安堵していた。

エルフの人々と語り合うのは苦にならないが、流石に大森林を抜けてエルフの集落に来るのは大変だからだ。

そのため、大森林との境に人間とエルフが共存出来る施設が必要と考えていた。

その時、高橋が北野の下にやってきた。

「おや？高橋さん、お待た・・・」

高橋の様子に北野は二の句を繋げられなかった。

今までどんな相手、状況でも圧倒されることなどない。

だが、高橋の放つ雰囲気は歴戦の北野でさえ息を飲むほどだ。

「北野さん、話があります」

有無を言わさぬ高橋の雰囲気は北野は頷いた。

エルフと会談した部屋を借りて高橋は北野と向き合う。

側にはアーヴァインもいる。

その中で高橋はエルフの少年たちから聞いた話を北野にした。

エルフは有史以来その存在は大陸中で知られていたらしい。

だが、今から約1200年ほど前に誕生したファマティー教が全てを一変させる。

教団が出来てから500年ほどは平和だった。

しかし、その時の教皇が人間以外は神に従わぬ異端者として弾圧を開始した。

その結果大陸に数多くいたエルフの大半は姿を消した。

大森林には元からエルフの聖地だったらしく、エルフは数多くいたが、その他の地に住まうエルフは軒並み殺戮の対象とされたのだ。

今でもエルフはいるが限られた地域にいただけで、大半は正体を隠しながららしい。

その話をした時、北野はアーヴァインに確認を取った。

何事も話には尾ひれが付き易い。

だが、アーヴァインは全て真実と保証した。

「我等エルフが大森林から出ず、先の衝突を産み出す要因もそこにある」

そう言われた北野は宗教とは何か？と考えざる得なかった。

「・・・高橋さん、貴方に取って宗教とは何ですか？」

聞かれた高橋は即答した。

「人が生きる為の方便です」

簡潔かつ的確な表現だ。

だから高橋は無神論者を自認している。

「そうですね、全然全く同意しますよ」

肩をすくめながら北野はそう言っただけで続ける。

「宗教とは人に許しを与え、その心を救う方便であればいいのです」  
自身は宗教など考えもしなかったが、この時ばかりは真剣に考えていた。

「しかし、その方便や建前が他者に害を与えるならそれは詐欺師と変わりません」

高橋は北野の言葉に頷く。

その上でファマティー教のやり方はこの世界では正義なのかもしれない。

だが、到底受け入れられないし認められなかった。

「北野さん、一宗教が宗教の都合でこうもろくでもない真似をするのを放置できますか？俺は嫌だ。例え偽善でもこんな酷いのは放置したくない」

まだ若く、人生と言う経験の浅い高橋らしい答えだ。

青いとも言えるだろう。

「気持ちとは分かりますが、今の日本にそんな余裕はありませんよ？」  
冷静に状況を分析し導き出した答えに高橋は頭では理解できた。

だが、感情が納得できない。

「今はまだ日本は存続出来るかどうかの瀬戸際です。正直、ファマティー教を私たちはよく知らない。それなのに冷静な判断が出来ますか？」

そう言われては高橋は感情に走りすぎかもしれない。

ただ話に聞いて腹を立てるだけなら子供でもできる。

だが、そうは言っても実際北野自身苛立っていた。

自分たちの元いた世界でも歴史が証明しているが、宗教が権力を持

てば悲劇しか生まれない。

そして、それよりずっと後の時代の生まれであり、同時に接した人間ではない。

だから易々と結論は出せない。

しかし、それらを踏まえても宗教とは何か？と考えるとファマティ教のやり方は何かおかしい。

そこまで弾圧、迫害せねばならない理由があるのか？

ただ人ではない、そして、ただ別の宗教を信仰していたり、ファマティ教を信仰してないだけで弾圧、迫害されて良いのか？

自分たちの価値観が全てではないが、彼等の価値観が全てでもない。「今はその気持ちは底に閉まってください。ただ、いずれは何とかしなければならぬでしょう。それまでは堪えてください」

北野はそう言つて高橋を宥める。

高橋も話に聞いただけで腹を立てた事に恥ずかしくなっていた。

だが、そこにアーヴァインから発言があった。

「君たちは神を何だと思っているのだね？」

その問いに二人はこう答えた。

高橋は「偶像で幻想」、北野は「不幸を神のせいにする責任転嫁で妄想」と・・・。

その似た様な二人の答えにアーヴァインは笑い出す。

「くっ・・・はっはっはっ！君達日本人とやらはかなり辛辣だな」  
そう言われても困つてしまう高橋は苦笑いするしかない。

「なに、あらゆる多様性を認めてるだけです。それが生きる者に害を与えない限りはね」

北野に取つて辛辣と言われれば誉め言葉の様な物だ。  
だからそれほど気にもならない。

「よろしい、実はアルトリアに向かうのは数日後になっていたのだが、君達と共に私が行こう」

突然のアーヴァインの提案に驚いたのは北野だった。

「よろしいのですか？」

思いがけない提案に北野は戸惑いがあつた。

しかし、アーヴァインは構わん、と答える。

「何よりも君達を見ていると日本とそこに住む人々に興味が沸いた」  
アーヴァインは最大限の好意を示すと同時に、臆面もなく本音で神など要らん、と言う二人に敬意と親しみを持った。

「なに、早いか遅いかでしかない。この目で見させてもらうよ。君達の国と民をね？」

ある意味、かなり大変な事であると同時に感謝すべきことだろう。

「分かりました。では本日中にもアルトリアに向かいます」

北野の言葉に高橋とアーヴァインは同時に頷いた。

エルフと日本人、人種どころか種族さえ違う両者が互いを認めた瞬間だった。

## エルフの里2（後書き）

短いですが第19話は終了です。

正直宗教を絡めると終わらないと思っていましたが、物語に一つの目的を明確に示すのには適当と思い宗教を絡めました。

異論反論あるとは思いますが、実際私も大体おんなじ意見なんですよね。

まあ、考え方は人それぞれありますけどね。

さて、次で20話目です。

あつと言う間に着ちやいましたね。

でも、ここで止まりませんよ？

まだまだ書き足りないのでこれからも書き続けます。

では今回はココまでです。

次回でお会いしましょう。

追伸：感想の書き込みが元気の源ですw

## 訪問者と日本人（前書き）

ついにきました20話です。

アルトリア基地にきたアーヴァインは基地の人々から歓迎を受ける。  
それは種族の違うもの同士の本格的な交流の始まりだった・・・。

第20話「訪問者と日本人」お楽しみください。

## 訪問者と日本人

大森林前で高橋と北野を待つ二人は二日目の日が沈む様子を見ていた。

二人は高橋から「4日経っても戻らなければ基地に戻って指示を仰げ」と言われていた。

「二日経ちましたね」

多田が呟く。

そんな多田を横目に四宮は大森林を見つめていた。

本当なら着いて行きたかった。

しかし、高橋の退路を確保しろ、と言う事に反論出来なかった。

そんなに自分たちは信用出来ないのだろうか？

頼りないのだろうか？

そんな疑問が頭に浮かんで消えていく。

「四宮さん、取りあえず食事にしましょう」

色々考えこむ四宮に多田が声をかけた。

何時までも、ぼー、としてられない。

四宮は意識を切り替えると荷物を漁る多田に近付いた。

その時、無線機から声が聞こえてきた。

「・・・ら・・・答せよ・・・此方ネゴシエーター、ハウス応答せよ・・・」

高橋の声二人は顔を見合わせると無線機に走り出す。

「こちらハウスキーパー2、ネゴシエーターどうぞ？」

少し出遅れた四宮は地団駄を踏んでいる。

「おう、これより帰還する。何時でも動ける様にしてくれ」

切迫した様子もなくのんびりした感じの声に交渉がうまくいったのだと思った。

「了解、家出息子の帰還を待ちます」

多田が無線機にそういつと高橋は愉快そうに言った。



「お前井上と気が合いそうだな」

恐らく今頃は日本にいる井上がくしゃみでもしてるに違いない。

その光景が高橋には浮かんだ。

「では、お待ちしています」

多田がそう言つて無線を切った。

「高橋隊長は上手く行つたみたいですね」

多田はそう言つて振り返った。

そして後悔する。

そこには憤怒の炎を纏つた般若がいたからだ。

「多田く〜ん？何で代わってくれないばかりか切っちゃうのかな？」

四宮の言葉に多田は後退りするしかない。

「多田く〜ん？」

その言葉を聞いた後、多田は四宮の胸の膨らみを顔で感じつつ暗闇へと意識を手放した。

高橋と北野が帰ってきた時、四宮が運転席、多田が助手席で伸びていた。

何があつたかは知らないが、聞いてはならないように感じた高橋は聞かない様になっていた。

その時、四宮は見慣れない人が高橋と北野に着いてきているのに気付いた。

警戒しながらも高橋に誰か？と聞く。

「エルフの代表としてアルトリア基地に視察に来られたアーヴァイン殿です。失礼の無いようにね」

高橋の代わりに北野が教える。

慌てて多田を叩き起こすと敬礼した。

そして互いに自己紹介し、高機動車に乗り込んだ。

動き出した車内でアーヴァインは馬も使わずに動く高機動車に興味を持ったのか、終始その話になった。

「単純な移動手段とするならかなり効率が良さそうだな」

アーヴァインは感心しながら感想を言った。

「そうとも言えませんが」

そんなアーヴァインに高橋は以外にも反対の事を言い出した。

「馬はそこらの草を食べれば維持には困らないでしょうが、コイツは燃料が無くなったら動かせません。しかも、きちんと整備してやらないと直ぐに動かなくなります。そして整備するには高い技術力が必要です」

たしかに車と言う代物は燃料が無ければただの置物だ。

そして整備する技術力が無ければ整備できず、壊れても修理が出来ない。

ましてや、技術力は教えたから、与えたからと言って身に付く物ではない。

今度は技術力を発揮するための工業力が必要になる。

それらはかなりの投資と積み重ねてきた基礎工業力があって初めて発揮されるのだ。

現に元いた世界では基礎工業力が全くなく、ただ与えられた技術力を自らの実力と勘違いした国があった。

結果、日本に儲けを渡すだけの鵜飼の鵜になっていた現実がある。

つまり、長い目でみた投資と積み重ねがあって初めて基礎工業力となるのだ。

でなければ経済的植民地になるより他は無くなってしまふ。

もちろん、日本の立場からすればそれでも良いのだが、競争相手がいなければ技術と言うのは発展し難い。

そう言う意味では基礎工業力を養う力を持ち、日本に追い付き追い越せと切磋琢磨できる国が一つはあった方が良いのだ。

「ですから、それほど簡単な話ではないのです」

技術力の話もされてもアーヴァインには分からない。

しかし、話の内容からある程度の予測はたつ。

「なるほど、使うとしてもしばらくは日本に依存になるか」

二人の会話を聞きながら北野は中々に感心していた。

特別物事に詳しい訳ではないが、それでも表面だけではない高橋の知識とその説明の仕方は教師向きとも言える。

何より瞬時に話す内容の筋道を見いだせるのは外交向きだ。

対するアーヴァインは理解の範疇外であつても、積極的に知識に接して理解出来るよう務める。

ある意味で出来は良くなくても良い生徒だ。

その上で本質を直感的に捉え、相手の言わんとする事を理解する能力は中々に侮れない。

「まあまあ、アルトリアに着いたらもつと色々な物を見れますよ」  
北野はそう言つて一旦話を打ち切つた。

でないと後で色々話す事が無くなるかもしれないからだ。

それほど二人は馬が合っている様に見えた。

アルトリア基地ではエルフの突然の来訪にも関わらず、出来る限りの歓迎が行われた。

とは言つても式典と言うより、お客様のお出迎え程度だ。

それでも多くの自衛官が立ち並ぶ様子はアーヴァインを圧倒していた。

規律正しく、そして良く訓練されているらしい振る舞いには感嘆すらある。

しかし、逆に争いにならなくて良かったと思えた。

戦いになつても負けない自信はある。

しかし、こちらは無事では済むまい。

アーヴァインは自衛官を見ながらそう感じていた。

とは言え、幸いにも話し合いで決着が着き、そして新たな関係を築く為の視察であるので自衛官たちの様子は頼もしくも見える。

「ようこそ日本国アルトリア地域、自衛隊アルトリア基地へ」

森が自らアーヴァインを歓迎する。

「大森林のエルフ代表として来ました。アーヴァインです」

二人は互いに握手を交わすと基地内へと歩みだした。

食堂ではささやかながら宴会の準備が整っていた。

これは北野たちが歓待を受けたのだからこちらも、と言う外務省官僚の意見があつたのだ。

そう言う意味ではお花畑な思考しか出来ない官僚でも使いようはあると言える。

北野は、いつそ宴会省歓迎委員会でも作ったら良いかもな、と心の中で皮肉を言つた。

「お口に合うか分かりませんが、どうぞ心行くまでお楽しみください」

官僚の言い回しにまるで接待だ、と高橋は思うが口にはしない。

「有りがたく頂きます」

アーヴァインはそう言つて席に着くと、手近料理に手を伸ばした。そばに箸があつたが、スプーンやフォークならともかく、箸を知らない上に普段は手掴みで食べる事が多いのでそのまま普段通りにしてしまつたのだ。

外務省官僚は「え？」と言う表情をしたが、すかさず北野や高橋、森らが手掴みで料理を口にした。

これはかつて、元の世界の英国女王がやつた逸話の再現だ。

だが、少なくとも彼等にそんな考えは無かつた。

ただ、それが彼等の風習ならば、と思い同じようにしたのだ。

食堂に揃つた自衛官や職員、派遣役人もそれに習う。

面食らつた外務省官僚も、北野らの真意に気付くと周りに合わせた。実はこの時、アーヴァインは間違いに気付いていた。

何故ならば横の方にフォークやスプーンが用意してあつたからだ。だが、彼等はアーヴァインに恥をかかせまいとしたのだと感じ、ア

ーヴァインは感激していた。

違う風習や習慣であるにも関わらず、それに合わせようとするのは並大抵の事ではない。

と・・・。

奇しくも宴会は交流の場となり、楽しい一時を作り出していった。

## 訪問者と日本人

翌朝、アーヴァインが意識を取り戻すと今まで使った事もない柔らかいベットのの上だった。

かなり痛飲したのか頭が痛い。

エルフの里で飲まれる樹酒（エルフ独自の製法で樹液から作られた酒で悪酔いしたり後に残らない。代わりに量が作れない）と違う彼等の酒を口にしたのはいい。

口当たりもよく、豊潤で味わい深く、また飲みたいと思えたが、この後に残るのは頂けない。

だが、その価値はあるとも思う。

「万物に宿りし精霊よ・・・」

アーヴァインは精霊に呼び掛けると二日酔いを治す為に解毒の魔法を使った。

この世界の魔法使いの多くは解毒は解毒として使うが、地味にこう言った使い方も出来るのだ。

要は発想の転換だ。

「ふむ、これでよし」

アーヴァインはそう言うのと部屋を出る。

ドアを開けると一人の兵士がアーヴァインに敬礼した。

「アーヴァイン殿、お目覚めですか、朝食は如何いたしますか？」

警護の兵なのだろうが、まるでそんな堅苦しさを感じさせない。

「ああ、しばらく辺りを歩きたいのだが？」

アーヴァインの申し出に兵士は、基地内であれば護衛は不要ですが、何かあれば付近の者に声をかけてください。

と言ってその場を後にした。

その様子にアーヴァインはかなりの自由が認められていることを知る。

だが、丁度いい機会でもある。

この機会にここの人々の生活を見てみたいと思った。

アーヴアインは舗装された道を歩いていた。

自然が少ないのは気になったが、それでも道に沿って木々が植えられている様子から、彼等は自然を愛しているのが分かる。

基地内にはヘリコプターや輸送機をはじめとした航空機や、乗った事のある高機動車、73式小型トラックや73式中型、73式大型トラックが整然と並んでいた。

「凄い物だな」

素直にそう思える。

これだけの充実した装備を持った日本はこの世界では極めて特異な国である。

だが、それだけに彼等日本と手を取り合えるならば、それは閉塞感に包まれているエルフの里には新しい風を入れてくれると思う。

実はエルフの集落では長い年月を森の中で生き、その外に向ける目を持たなかったが故に閉塞感が強い。

若いエルフ（アーヴアインも54と言う若い年齢だが）の中には外の世界に出たがる者も少なくない。

ただ、ファマティー教の影響を考えると外に出るのは問題がありすぎる。

そう言った意味では日本と言う新たな存在はエルフに取っても新しい時代を呼ぶ事になると思った。

「おや？お加減は如何ですか？」

アーヴアインは後ろから声が聞こえたので振り向くとそこに高橋がいた。

「高橋君、昨日聞いた君たちの技術は凄いな」

そう言つて目の前の車両群を見る。

普段燃料不足の問題から動くのは一部だが、それでもそこにあるだけでもアーヴアインには壮観だと感じられる。

ちなみに深刻な燃料問題は最近見付かった油田の開発が進めば解決する上、代用燃料（石炭から作る代用石油と呼ばれる物）を自衛隊向けに精製しだした事により、近い内に解決する見通しだ。もつとも、軽油代わりにしかならないのでやっぱり動かせるのは車両ぐらいなものだ。

「凄いかも知れませんが、昨日の通り欠点もありますよ」

高橋はそう言った。

だが、アーヴァインにはそれを補ってあまりあると思った。

これでエルフの集落と外の街（アルトリア限定）を繋ぐ事が出来れば、エルフの集落もより発展するかもしれない。

しかし、高橋はその考えにはやや否定的だった。

「発展は代わりに大森林に犠牲を強いる事になります。やるなら大森林の外に街を作るべきですよ」

高橋は知らない間に北野と同じ考えを言っていた。

その考えにアーヴァインは考え込む。

確かに大森林に危害を加えずに発展する事は出来るが、里が寂れる可能性がある。

それなら里もある程度発展するべきだろう。

もちろん、大森林に与える影響を考えなければならいだろう。

「それも一つの考え方だね。ところでこの国の政治等に触れる事は出来ないかい？」

本来の目的であり、学すべき事である日本の政治を知りたいと思って聞いてみた。

「日本本土は海の方こうなので簡単には行きませんが、政治に関する書籍をお見せする分には一切問題ありませんよ」

高橋の言葉にアーヴァインは海を越える事が如何に困難かを考えた。実際は船や航空機の手配から向こうでのアーヴァインの扱い（護衛など）、更には現在議会がほぼ機能してないのを見せたくないのが



ある。

だが、アーヴァインはこの世界の海が如何に危険（技術的に）かを知っている。

だから、なるほどな、と感じていた。

「たしかに不躰だったね。でも書籍を見せて貰えるならありがたい」  
そう言うアーヴァインは高橋の案内で書籍のある書庫に向かった。

しかし、ここで問題が起きた。

「………読めん」

アーヴァインが無念そうに言う。

アーヴァインは言葉が通じるから文字もある程度は読めると思っていた。

「………やつぱり………」

高橋はそう呟いた。

「ホードラーでも文字の解読をしていますが、通訳と言うか代筆で何とかやってますからね」

高橋の言葉にアーヴァインもがつくりしていた。

「これは……文字の解読からか……」

高橋は、そう言うアーヴァインに幾つか書籍を手渡した。

「解読するにも本が無いと厳しいですよ」

その高橋にアーヴァインは、こんな高級品を渡されても、と答えた。  
この世界では紙は極めて貴重品だ。

エルフの集落でも紙はなく、本と言っても獣皮紙を使う。

なので本と言うのは極めて貴重で高級品なのだ。

高橋はそれに思い当たると、笑いながら本を渡した。

「俺らの国では本ははした金でも買えたりするので高級品ではありません」

大丈夫と言われて、少し戸惑いながら本を受け取った。

一応、未知の言語を解読する魔法はあるがアーヴァインは使えない。

それにこの本を元に日本を学び、自分たちの糧と出来るならこの上ない話だ。

「ありがとう。大事にするよ」

そう言われて高橋は笑顔で頭を掻いた。  
ちよつとだけ照れたのだ。

「我々がエルフの国を作る・・・か、考えもしなかったな」

国と言うのに偏見があつたアーヴァインは素直な感想を言った。

この世界において国とはファマティー教の認可の下に存在を許される。

そしてファマティー教を信仰し、それ以外を打ち倒すために国があるような物だ。

だからエルフたちは自らを迫害するファマティー教を忌避し、そしてそれとは違う合議によりエルフ同士の結束を保った。

言わばこの世界では国にはならなくても国としての体裁は整つていたのだ。

それを日本は後押ししただけに過ぎない。

そして、エルフに取ってエルフの国は悲願でもある。

エルフの国が出来れば各地に点在するエルフたちを大森林に集め、平和に暮らして行けるようになる。

それはエルフの生きる場を作ると言うことにつながる。

これは今後を考えればかなり大きいだろう。

「国なんて無くても生きては行けますが、やっぱり心の拠り所は国にあるものです」

宗教に拠り所を求めたこの世界とは違う価値観を高橋は、日本はアーヴァインに提示している様に見えた。

「我々が国となっても、我等は友人で要られるかな？」

最大の問題である国益を考えればアーヴァインの言葉も仕方がないだが、高橋は自信を持って答えた。

「勿論です。我々が共にある事はこの世界で苦しむ多くの人やエルフ、またはそれ以外の亜人とされてる人たちにも救いの手を差し伸

べれる事ですから」

青いが真っ直ぐな高橋の思いにアーヴァインは納得できた。

これなら、また人間を信用できる。

いや、あくまでも日本とそこに住む日本人ならば種族の垣根を越えた信用と信頼が生まれる、と・・・。

「そうだね。近い将来、そんな関係になれるね」

アーヴァインの言葉に高橋は力強く頷いた。

訪問者と日本人（後書き）

第20話はココまでです。

ちよつと青臭く、夢物語が過ぎるかと思いましたが、このまま日本を一人ぼっちにしたくなかったのでもうなうてしまいましたw

まあ、良いかな？w

では、また次回でお会いしましょう。

## 日本の向かう先（前書き）

さてさて、一つの区切りとなる第21話です。

日本はこの世界へとやってきた。

それにより日本は危機に瀕したが辛くも切り抜け、新たな隣人を得た。

これで「新しき世界へ」はひとつの終わりを向かえ新たな一歩を踏み出します。

では「新しき世界へ」最終話をお楽しみください。

## 日本の向かう先

莊嚴な印象を受けるステンドグラスに囲まれた広間では、何人もの宗教関係者と受け取れる人物たちが円卓を囲んで議論を交わしていた。

議題は突然現れ、ファマティー神に背きし日本と言う国についてだ。その議論もどう打ち倒すか？

と言うものに終始しているため議論は方法論に対するものへとなっている。

そして彼等を悩ませているのは如何に大国とは言えない中規模の国とは言え、それを圧倒した軍事力だった。

「下手な国を焚き付けても効果は望めませんな」  
豪華な衣を纏う高位の司教の発言に誰もが頷く。

単純に軍事力で圧倒出来るなら誰も頭を悩ましはしない。

むしろ軍事力を使わないで日本と言う国を滅ぼさないでも、自分たちの側に引き込められないだろうか？

それが今、話し合われている最大の議題と言えた。

「ロシアン枢機卿、あなた様のご意見を伺っておりませぬが？」

この場にいる誰もが最初から聴きに回っている一人の男の発言を待っていた。

ある意味、現在のファマティー教の中で教皇に次ぐ順列にあり、気弱な教皇を傀儡にしていると真しやかに噂される程の人物だ。

実際、若い教皇は即位より今までまとに指針を示した事はない。

常に彼、ロシアン・クローリーの指示の下に教皇は動いていた。

その為、何故、今代教皇選出の時に自ら出なかったのか疑問視されたほどだ。

「いやいや、私の意見など大した物ではありませんよ」

謙虚な姿勢を示すためのなのか自身の意見をあやふやにするロシアンはそう言って発言しなかった。

「何を言われますか、あの強大な軍事力を誇りファマティー教を否定していた帝国でさえあなた様の力で膝を屈したではありませんか」おだてた、と言うより事実をそのまま伝えた様な話ぶりにロシユアンはふむ、と唸る。

「左様、そのかいあつて大陸西方の不信心者は一掃されました」

先の発言に次々と沸き起こるロシユアンを褒め称えるが如く発言が飛び交う。

この場を知るものが見れば明らかに教皇より強大な力を有した人物であると見るだろう。

「まあまあ、皆さんの前ですし粗末なものですが私の意見を話させて頂きます」

ロシユアンのこの一言で場は静まり返っていた。

「私と致しましては、如何に強大な軍事力を持つ国であろうと恐れるべきでは無いと考えます」

そう言ったロシユアンは如何にファマティー教がこの世界で偉大で、そして強大かを語る。

日本と言う未知の国が如何に軍事力を持ち、王国を打倒したとしても所詮は遙か東方の極地の出来事、世界にさしたる影響はないと言った。

「また日本がファマティー教を信仰していないなら教化も出来ましょう。まずは国の中枢から布教し、彼等自身の過ちを自らに自覚させればそれだけで済みます」

ホードラー王国滅亡は確かに悲しいですが、と付け加える。

「それではファマティー教信徒たちに神聖なる戦を指示いくさなさらないのですか？」

司教の一人の意見にロシユアンは頷いた。

「如何に異教徒であろうと最初から力で叩く様では神の教えに反しますよ？」

こう言われて発言した司教も己の未熟に赤くなる。

端から見れば、平和的に解決を図ろうとする立派な聖職者に見える。

だが、その内心には聖職者とは思えない程のどす黒いものが渦巻いているのを知るものはいない。

「とにかく、まずは使節を送り、ファマティー教布教を認めて頂きましょう」

ロシユアンのこの一言で場の方針は決まった様なものと言えた。

何より、議論と言うよりロシユアンただ一人の意志を聞く場でしかなかったのだ。

「では、使節の選出は我等が行います」

司教たちがそう言いながら席を立つと、ロシユアンは満足げに頷いた。

一人場に残ったロシユアンは、日本と言う国が如何なる国かを理解する時間が必要だと感じていた。

「日本か・・・我等がファマティー教に殉ずればよし、さもなくば・・・」

ロシユアンはまだ見ぬ話にしか聞いた事の無い日本がこの世界に与える影響と言うものをまだ知らなかった。

数日の滞在の後、アーヴァインはアルトリア基地の面々の見送りの中、多用途ヘリコプターUH-1Jに乗り大森林へと帰って行った。始めは車を使おうと思ったが、アーヴァイン自身の空を飛ぶ機械に乗ってみたい、と言う意志もありこうしたのだ。

北野も同乗し、再度話し合う場を持つ予定だ。

アーヴァインの乗るUH-1Jが遠ざかると自衛官たちは本来の持ち場へと帰っていく。

アーヴァインとの交流で得るものが多かった高橋は翌日から行われるホードラー地域巡回の引き継ぎの準備のため自室へと足を向けた。



「慌ただしかったが楽しかったな」  
独り言を口にしながら満足な表情を浮かべた高橋はそのままそこを後にした。

自室で書類を整理して数時間した時、にわかにドア前が騒がしくなった。

疑問符を頭に浮かべながらドアの前に来ると突然、ドアが開け放たれた。

「いよお！隊長さん！」

見慣れた井上の顔がそこにはあった。  
ただし、額には青筋が浮かんでいる。

「お、おお、もう戻りか？」

何か分からないが気圧された高橋は一瞬後退りした。

そんな事に構わず井上は室内に入ってくる。

その後ろから佐藤や高橋の部下たちも入ってきた。

流石に30人が入れる様な作りになっていないため、かなり狭い。

「おいおい、一体・・・」

高橋が皆を押し留めようとするが、誰もが高橋を囲む様にして集まってきた。

「さて、何で俺が怒ってるか分かってるよな？」

井上の言葉に高橋は素で首を傾げた。

全く見に覚えがない。

それが高橋の考えだった。

「俺、何か怒られる様な事したか？」

全く何も理解していない高橋に井上は一言言った。

「・・・・・・・・やれ」

直後一斉に拳を持って向かってくる隊の仲間に高橋は思わず悲鳴を

上げた。

後に基地警務隊が鎮圧するまでこの騒ぎは続くことになる。

日本では鈴木総理の下、民間アルトリア渡航の法案が本格的に議論されていた。

無制限に向かわせれば現地で要らぬトラブルを起こしかねないので制限付にせざる得ない。

しかし、野党やマスコミは現実を知らない為か、やたらと制限を撤廃すべきだ、と主張していた。

幾ら鈴木が現地の風習や慣習が日本とはかけ離れており危険と言っても聞き入れやしない。

これも自分の蒔いた種、と思うが、だからと言って認める訳には行かない。

「なんなら奴等を現地に送り込んでやったらどうだ？少しは分かるんじゃないか？」

伊達はうんざりした様子だ。

それもそのはず、ここ数日間ずっとマスコミに付きまといわれている。「それで何かあったら政府が悪い、と言い出すのですね？連中のやり口なんかわかりきってますよ」

伊達の提案に伊庭が首を振る。

如何に現地の治安の為に自衛隊を展開させていても限度がある。

ホードラーの確保している地域は日本の倍ぐらいの広さだ。

そしてアルトリアは昔の満州ほどの広さがある。

そんな広大な領域を自衛隊の一部だけで治安を守るなど不可能だ。未だに無法を働く輩が多く、そんな中に現代の日本人を送り出せば獣の群れに羊を投げ込む様なものだ。

アルトリア地域はまだ安定している方だが、未調査の地域がありすぎる。

どんな危険な生物や植物があるか分からない。

「それにマスコミのことだ。絶対無許可で侵入禁止の地域に入り込みかねない」

鈴木も疲れた目で言った。

現に何度か漁船などを使って無許可渡航を実行しようとさえしていた。

「在日外国人の移住計画の問題もあるしな。ここでエルフと事を構えたくないよ」

そう言つて鈴木は北野から送られた資料を見た。

最初はエルフと言われて何の話だ？と思つたが、本当にそう言つた種族がいた事に驚きを隠せない。

一応発表はしたが、まだ正式な会談も交渉もしていない、と言つたにも関わらずマスコミが騒ぐ騒ぐ。

おかげで外務省前や官邸前にはマスコミが待ち構えており業務に支障が出ている程だ。

「まさか大森林沿いに壁を作る訳にも行きませんしね」

苦笑しながら言うが伊庭とて内心その方がまだ楽だと思つている。

「まあ、そこはエルフの人たちとの交渉次第だな」

お茶を飲みながら伊達は束の間の休息を取る。

「荷は重く道は遠きけり、だな」

鈴木はそろそろ国会の再開や、食料、供給の目処が付次第燃料などの統制も緩和しなければならぬと思つていた。

「されど荷を捨てるも死、歩みを止めても死、ならば逝くしかあるまいな」

伊達は鈴木にあわせてそう言つた。

だが、彼等が抱える問題は極めて大きく、それは彼等の手に余る。それでも進まなければならぬのは責務だからか？

「どちらにせよ、国民にはまだ我慢を強いらねばなりますまい」

二人の苦勞を思えば自身の抱える問題が些末に感じられる。

だから伊庭はアルトリアやホードラーにおける自衛隊の活動は重大だと思つていた。

日本がこの世界に転移してより3ヶ月が経とうとしていたが、まだ多くの問題を抱えながらも日本と言う船はこの世界と言う海をいくことになる。

時に西暦201X年7月29日。

日本は未だ暗雲の中をさ迷いながらも着実に明日を目指して進み続けていた。

## 日本の向かう先（後書き）

最終話ながら短くてすいません。

これにて新しき世界へは一応の終わりを迎えます。  
ですが、まだまだ日本の異世界での物語りは終わりません。

なので、次回作に続きますw

ここまで読んでくださった皆様には感謝の言葉もありません。  
次回作も引き続き読んでくださると幸いです。

それでは次回作でお会いしましょう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4520/>

---

新しき世界へ～日本の受難

2011年3月26日05時30分発行